３．京都第二外環状道路関係遺跡
平成 19 年度発掘調査報告

１．はじめに

京都第二外環状道路は京都西南部の交通渋滞緩和のため名神高速道路大山崎ジャンクションから京都縦貫道路沓掛インターチェンジまでの高速道路である。この道路の予定地は長岡京跡、下海印寺遺跡(注1)、伊賀寺遺跡をはじめとする多くの遺跡を横切る。平野部においては道路計画地点が、淀川支流の小泉川に近接することから、遺跡が河川によって破壊されている可能性がある。また、長岡京は 10 年間の都であり、七条や八条地域に条坊が施工されているかが注目される地域でもある。そのため遺構の有無を確認するため、平成 15 年から路線内の試掘調査を先行して開始し、用地買収の進捗にあわせ面的な発掘調査を必要とする地点の調査を実施してきた。本年度は表１に示したように９地点の試掘調査と３地点の本発掘調査を実施した。

発掘調査地点は大きく荒堀地区・尾流地区・上内田地区・下内田地区・友岡地区・調子地区の６つの地域に別けられるが、上内田地区・調子地区では複数の調査が行われ、連続して実施されていないものも含まれるが、地域ごとの調査結果を提示したい。また、下内田地区では、縄文時代の集落跡を確認したが、別冊で報告する予定である。なお、本報告で使用している座標は、国土座標日本測地系第６座標系による。

荒堀地区は長岡京市奥海印寺荒堀に所在する。旧石器時代から近世までの複合遺跡である奥海印寺遺跡に近接し、律令期の須恵器を焼成した鈴谷窯推定地の近くである。鈴谷窯については須恵器窯として報告されているが、正確な位置が特定されていない。窯跡が連続的に作られていることも稀ではないことから、関連する遺構の検出が期待された。発掘調査は長岡京跡右京第 902 次調査の一連の試掘調査として実施した。

尾流地区は長岡京市下海印寺尾流に所在する調査区で、旧石器時代から近世の複合遺跡である下海印寺遺跡に含まれる。京外に位置しているが長岡京西京極大路と、多数の人面土器や土馬が出土し、長岡京の祭祀場として有名な西山田遺跡に隣接する。今回の調査地南側の長岡京跡右京 851 次調査(注2)では、長岡京期の土馬片が出土した流路跡が検出されていたことから、西山田遺跡と同じく水辺の祭祀が行われた跡が検出される可能性も指摘できた。長岡京跡右京第 902 次調査の一部として実施した。

上内田地区は、長岡京市下海印寺上内田に所在する調査区で、縄文時代から近世までの遺跡である伊賀寺遺跡に含まれ長岡京跡右京七条四坊十二町（旧条坊七条四坊十町）に相当する。平成 19 年度は、長岡京跡右京第 901・902・926・928 次調査として実施した。第 901 次調査は、平成 18 年度に実施した長岡京跡右京第 870 次調査区の西側に接した調査である。第 890 次調査にお

第 1 図　調査地位置図（国土地理院 1/25,000 西南部・淀）

1. 奥海印寺遺跡　2．下海印寺遺跡　3．西山田遺跡　4．伊賀寺遺跡　5．友岡遺跡　6．鞆岡廃寺
7．長岡京跡　　（A：荒堀地区　B：尾流地区　C：上内田地区　D：友岡地区　E：調子地区）

いて古墳時代後期の竪穴式住居跡が検出されていたことから、面的な調査として実施した。また、901 次調査で検出した遺構の西への広がりを確認するため試掘調査を実施した。試掘調査は長岡京跡右京第 902 次調査の一環として実施した。この試掘調査によって遺構が確認できたことから、長岡京跡右京第 901 次調査区と長岡京跡右京第 902 次試掘調査区の間の面的な調査を実施したの

付表1　平成19年度調査次数一覧

調査次数	調査種別	地区	地区略号	調査面積	概要
901	本掘	上内田	OKD-4	1400㎡	古墳時代初頭の溝
902	試掘	尾流	OOR-6	100㎡	小泉川旧河道
		上内田	OKD-5	200㎡	古墳時代初頭の住居跡
		荒堀	PHR-2	350㎡	土石流の痕跡
		調子	RHK-3	150㎡	流路跡
926	試掘	友岡	NKR-4	200㎡	流路跡
		調子	RHK-4	150㎡	中世の柱穴・溝
		上内田	OKD-6	400㎡	流路跡
927	試掘	岸ノ下	OKT-4	400㎡	小泉川旧河道
	本掘	下内田	OOD-4	800㎡	縄文時代住居跡
928	本掘	上内田	OKD-7	400㎡	古墳時代初頭の住居跡・土坑
	試掘	調子	RHK-5	200㎡	中世の柱穴・土坑

が長岡京跡右京第928次調査である。

上内田地区の遺構の広がりをさらに確かめるために、長岡京跡右京第901次調査南側と長岡京跡右京第902次調査西側に試掘トレンチを設け遺構の確認を行なった。本稿では調査成果を上内田地区の調査トレンチが隣接することからまとめて報告したい。

友岡地区は長岡京市友岡河原に所在し、長岡京跡右京第926次調査として実施した。長岡京跡右京八条三坊六町・十一町、東三坊坊間小路（旧条坊八条三坊八・九町）推定地にあたる。鞆岡廃寺推定地にも隣接する。

調子地区は長岡京跡右京第902・926・928次調査（試掘調査）として実施した。いずれも長岡京市調子二丁目に所在する。長岡京跡右京第902次調査の調子地区試掘地は長岡京右京八条三坊五町にあたる。第926次調査地は長岡京跡右京九条三坊一町（旧条坊八条三坊三町）にあたる。第928次調査は長岡京跡右京九条三坊一・二町、九条坊間北小路（旧条坊八条三坊三・四町、八条坊間南小路）にあたる。

下内田地区を対象とした第927次調査では、縄文時代の遺構がまとまって検出されたため、整理作業を進め、別報告として次年度に刊行する予定である。

現地調査は、当調査研究センター調査第２課調査第２係長森　正、次席総括調査員辻本和美、主任調査員戸原和人、同増田孝彦、同中川和哉、専門調査員竹井治雄、調査員高野陽子が担当した。報告については各担当者が分担執筆し、文末に文責を示した。今回の調査に係る経費については、国土交通省近畿地方整備局が負担した。現地調査においては、周辺住民の方々および関係諸機関のご協力を得たことと、調査および整理作業に参加していただいた方々に対して深くお礼申し上げたい。

（中川和哉）

２．各地区の調査概要

（１）荒堀地区（７ANPHR － ２地区）

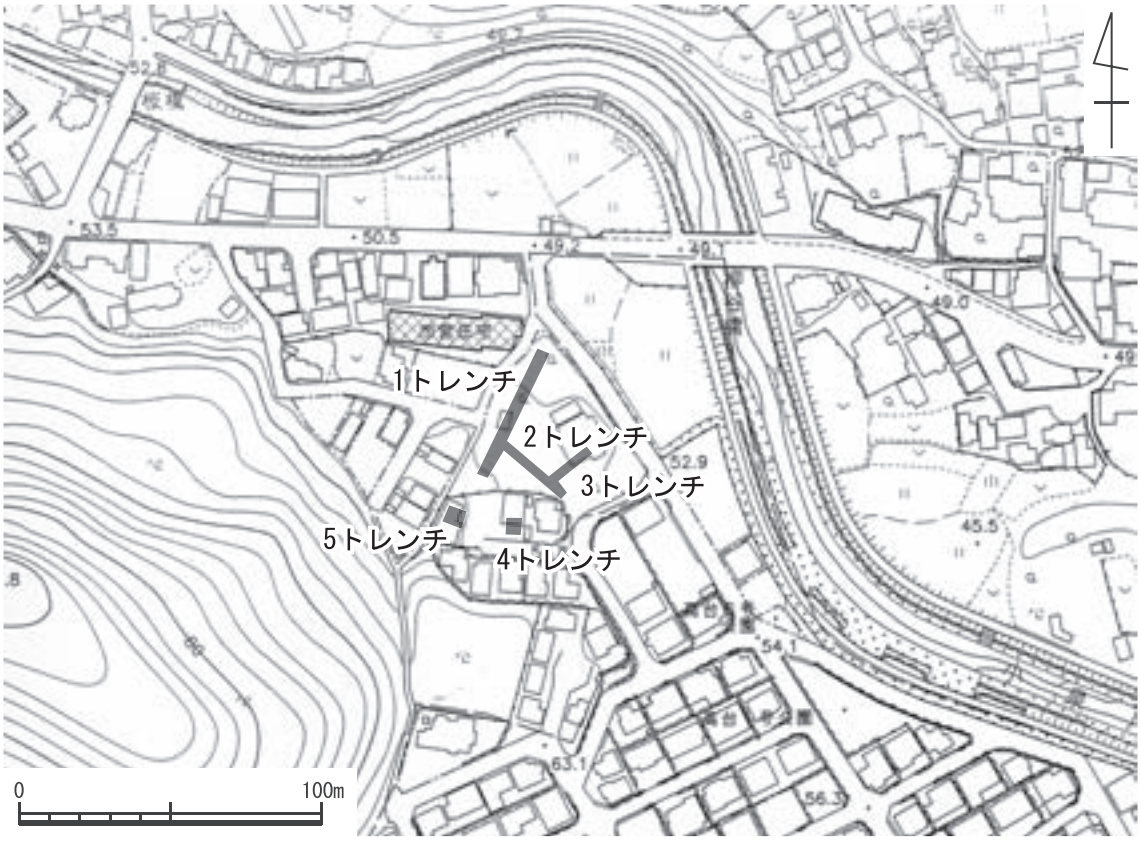
今回の調査地は長岡京市下海印寺荒堀地内に所在し、鈴谷瓦窯跡に推定される地点付近にあたる。現地調査は、平成 19 年５月７日～同年５月 30 日の期間をあて、調査は調査第２係長森　正と専門調査員竹井治雄が担当した。

調査地の現況は標高 51 ～ 57 ｍの緩斜地に位置する宅地跡である。調査は１～５トレンチを設定し、調査面積は 350㎡である。調査の結果、大規模な土石流、大阪層群と考えられる堆積を確認した。

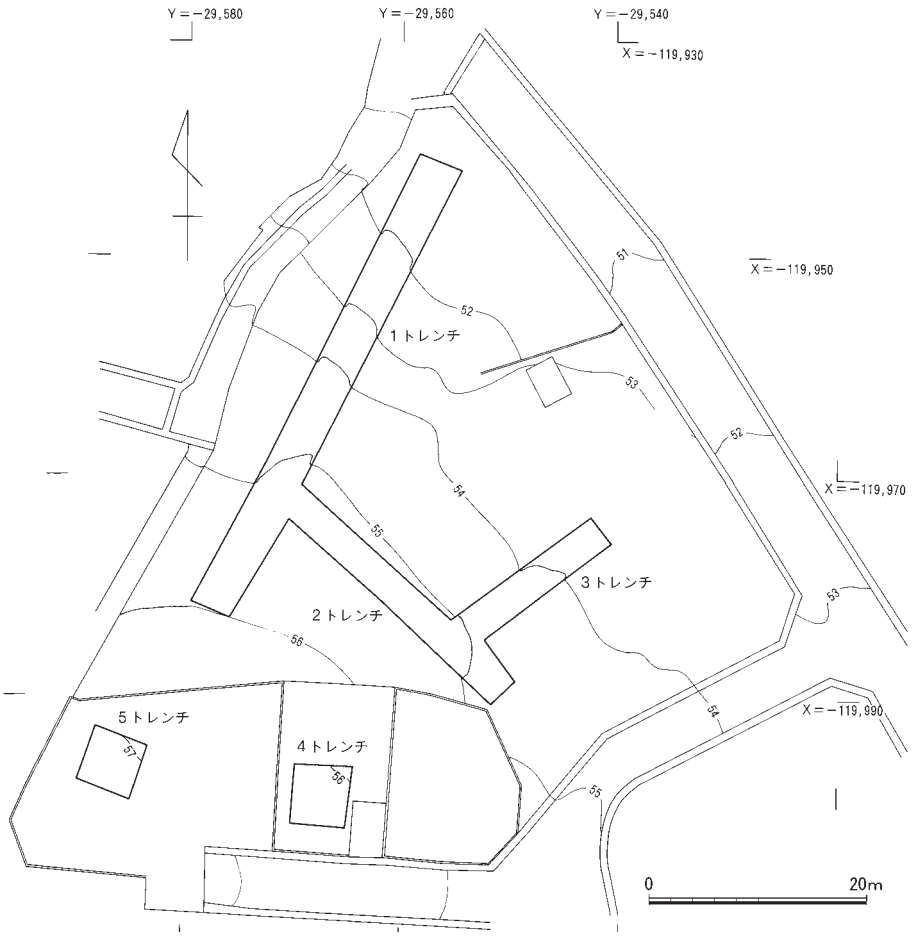
１～３トレンチ　調査地斜面の堆積土はおもに厚さ 0.5 ｍを測る淡褐色粘質土であり、遺物は近世陶磁器、土師器、瓦器、須恵器片等が出土した。調査地の北東部標高 51 ｍの平坦部は造成、整地が認められ、宅地等の土地利用がうかがわれる。大規模な土石流は１・３トレンチの北側斜面、標高 51 ～ 53 ｍの地点で検出した。堆積状況は、人頭大、拳大の角礫が厚さ 1.5 ｍにおよび北西から南東方向に堆積する。出土遺物はなく、時期不明である。地表下 1.2 ｍにおいて地山層を確認した。この層は、粘土層、シルト層、砂層の互層からなる大阪層群、あるいはその上部洪積層であり、南北断面では傾斜角は５度、北側が高く傾く。

４・５トレンチ　現況は宅地跡である。地表下２ｍ以上まで造成、整地されており、遺構・遺物はなかった。

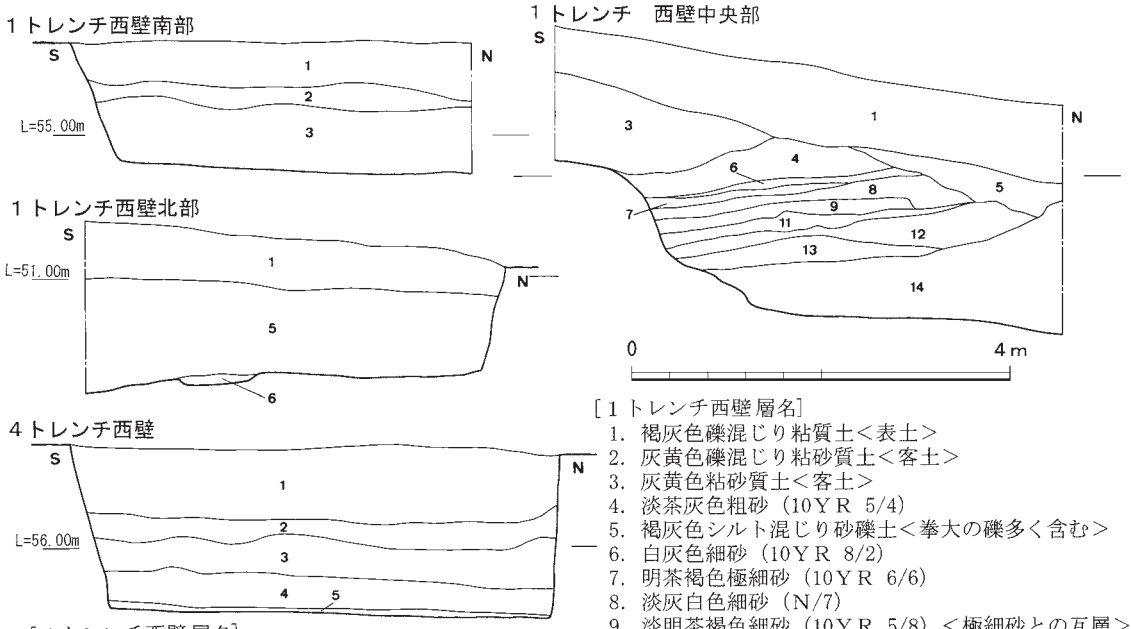
調査の結果、長岡京跡に関連する遺構・遺物等は確認されなかった。　（竹井治雄）



第２図　右京第 902 次荒堀地区調査地位置図



第3図　右京第902次荒堀地区トレンチ配置図



［1トレンチ西壁層名］
1. 褐灰色礫混じり粘質土＜表土＞
2. 灰黄色礫混じり粘砂質土＜客土＞
3. 灰黄色粘砂質土＜客土＞
4. 淡茶灰色粗砂（10ＹＲ 5/4）
5. 褐灰色シルト混じり砂礫土＜拳大の礫多く含む＞
6. 白灰色細砂（10ＹＲ 8/2）
7. 明茶褐色極細砂（10ＹＲ 6/6）
8. 淡灰白色細砂（N/7）
9. 淡明茶褐色細砂（10ＹＲ 5/8）＜極細砂との互層＞
10. 淡茶白色粗砂（10ＹＲ 8/4）
11. 茶白色粗砂（10ＹＲ 8/4）
12. 淡白灰色シルト
13. 茶灰色、乳白灰色微砂＜ラミナ性堆積＞
14. 茶乳灰白色シルト混じり極細砂

［4トレンチ西壁層名］
1. 茶灰色粘質土（2.5Ｙ 6/3）＜客土＞
2. 灰黄褐色礫混じり粘砂質土（10ＹＲ 4/2）
3. 淡黄灰色砂質土（2.5Ｙ 6/2）
4. 淡黄褐色粗砂礫（10ＹＲ 7/8）
5. 褐灰色粘砂質（10ＹＲ 4/1）＜腐食土含む＞

第4図　右京第902次荒堀地区1・4トレンチ断面図

（２）尾流地区（７ANOOR － ６地区）

調査地は長岡京市下海印寺尾流１－１に所在し、字名では尾流と呼ばれる水田である。調査地の北東には段丘崖を接して縄文遺跡として著名な下海印寺遺跡が所在している。

今回の調査は 100㎡を試掘調査として実施した。現地調査の期間は平成 19 年５月 21 日～同年６月４日を要した。調査には、調査第２課調査第２係長森　正と同主任調査員戸原和人があたった。

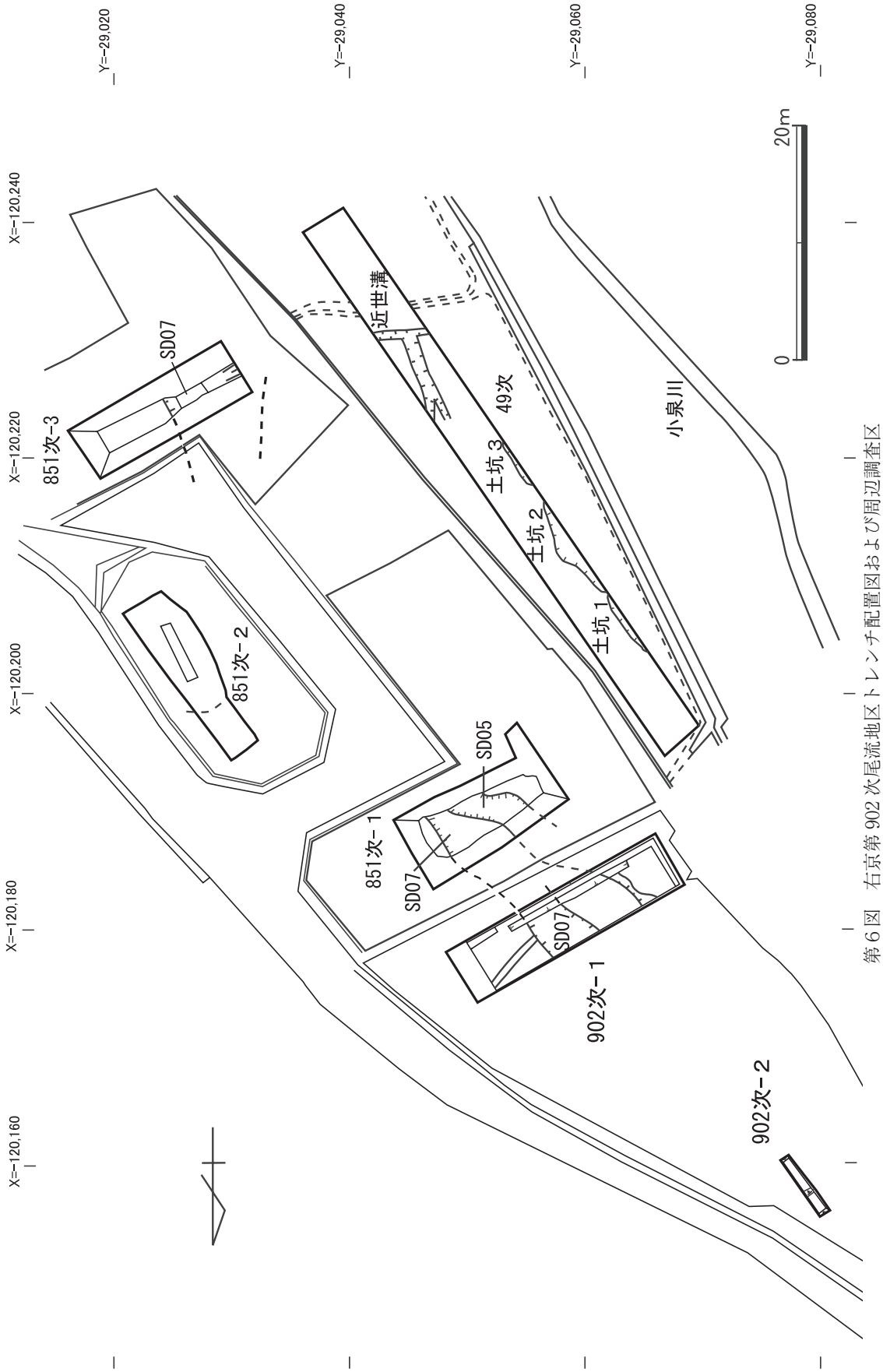
本調査地の周辺では、南東方向に接して、昭和 56 年度に当時の建設省によって施行された小泉川の改修工事に伴い調査された右京第 49 次調査と、平成 17 年度に調査された右京第 851 次調査がある。

第 851 次調査では、３か所のトレンチのうち１・３トレンチで、長岡京期の可能性がある流路跡を確認した。西北西から東南東に、幅２～ 2.5 ｍの規模を有し、深さは約 0.6m である。埋土より、須恵器壺底部片、土馬片が出土しており、１トレンチではこの流路の下層でそれ以前の流路幅約５ｍ、深さ 1.4 ｍを検出し、内部には砂礫が堆積していた。また３トレンチでも最下面の南端で砂礫を埋土とする流路となっており、出土遺物より古墳時代のものと判断されている。

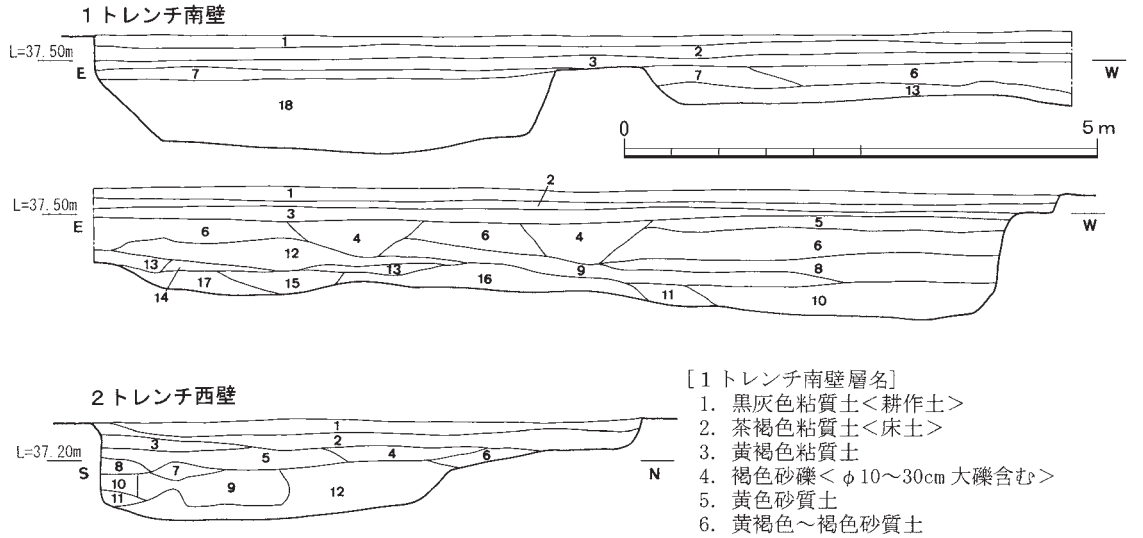
今回の調査は第 851 次調査１トレンチに平行する第 902 次１トレンチとその西で直交する方向の２トレンチの２か所のトレンチを設定しておこなった。

南東に設けた１トレンチでは耕作土と床土の下位で、水田耕作に伴うと考えられる溝ＳＤ 01 と長岡京期の可能性がある流路跡を確認した。この流路跡は右京第 851 次調査で検出した溝ＳＤ

第５図　右京第 902 次尾流地区調査地位置図



第6図　右京第 902 次尾流地区トレンチ配置図および周辺調査区



［1トレンチ南壁層名］
1. 黒灰色粘質土＜耕作土＞
2. 茶褐色粘質土＜床土＞
3. 黄褐色粘質土
4. 褐色砂礫＜φ10～30cm大礫含む＞
5. 黄色砂質土
6. 黄褐色～褐色砂質土
7. 暗灰色粘質土
8. 黄褐色砂性粘質土
9. 赤褐～灰色砂礫＜φ3～10cm大礫含む＞
10. 赤褐～黒色砂礫＜φ1～5cm大礫含む＞
11. 灰色～赤褐粗砂
12. 暗褐粗砂
13. 褐色砂礫＜φ1～3cm大礫含む＞
14. 灰色砂層
15. 赤褐色砂礫＜φ1～5cm大礫含む＞
16. 暗灰色粗砂
17. 黒灰色シルト
18. 黒灰色粘質土・黒灰色砂礫・黒灰色シルト

［2トレンチ西壁層名］
1. 黒灰色粘質土＜耕作土＞
2. 茶褐色粘質土＜床土＞
3. 灰色粘質土
4. 暗灰色粘質土
5. 褐色～灰色砂礫＜φ1～2cm大礫含む＞
6. 暗灰色砂礫＜φ3～10cm大礫含む＞
7. 黄褐色粘質層
8. 黄褐色砂礫＜φ1～10cm大礫含む＞
9. 灰色砂礫＜φ1～10cm大礫含む＞
10. 暗灰色粘質土
11. 暗灰色砂層
12. 黄褐～赤褐色砂礫＜φ5～30cm大礫含む＞

第7図　右京第902次尾流地区1・2トレンチ断面図

05とＳＤ07にあたると判断し同じ遺構番号を踏襲した。

溝ＳＤ05　西北西から東南東に、幅2～2.4ｍの規模を有し、深さは0.6mである。砂礫を埋土とする流路である。

溝ＳＤ07　西北西から東南東に伸びており、溝は3～4ｍの規模まで検出したが、流路の幅は、トレンチ外に延びるため不明である。検出した深さは約0.6mである。腐食質から粘質土で埋まっており、須恵器片、土師器片が出土している。

北西に設定した第2トレンチでは湿地状堆積をなし、下層で南西方向に落ち込む地形を検出した。以下は砂礫の堆積となり顕著な遺構は確認できなかった。

小結

1トレンチで、長岡京期に比定できる可能性のある溝もしくは流路跡2条を検出した。また、水田耕作に伴うと考えられる溝ＳＤ01からは瓦質羽釜の足が出土している。

本調査地の南約140ｍには、長岡京期の国家的な祭祀場と考えられている西山田遺跡があり、多量の土馬や墨書人面土器、ミニチュア竈等が出土している。今回、その上流地点の調査で同時期の溝ＳＤ07を検出したことと、その溝内から複数個の土馬が出土したことは、同様な祭祀が広範囲に執り行われていた可能性を示唆するものである。

（戸原和人）

（3）上内田地区

調査地は長岡京市下海印寺上内田に所在し、長岡京跡右京七条四坊五町・十一町・十二町にあたる。

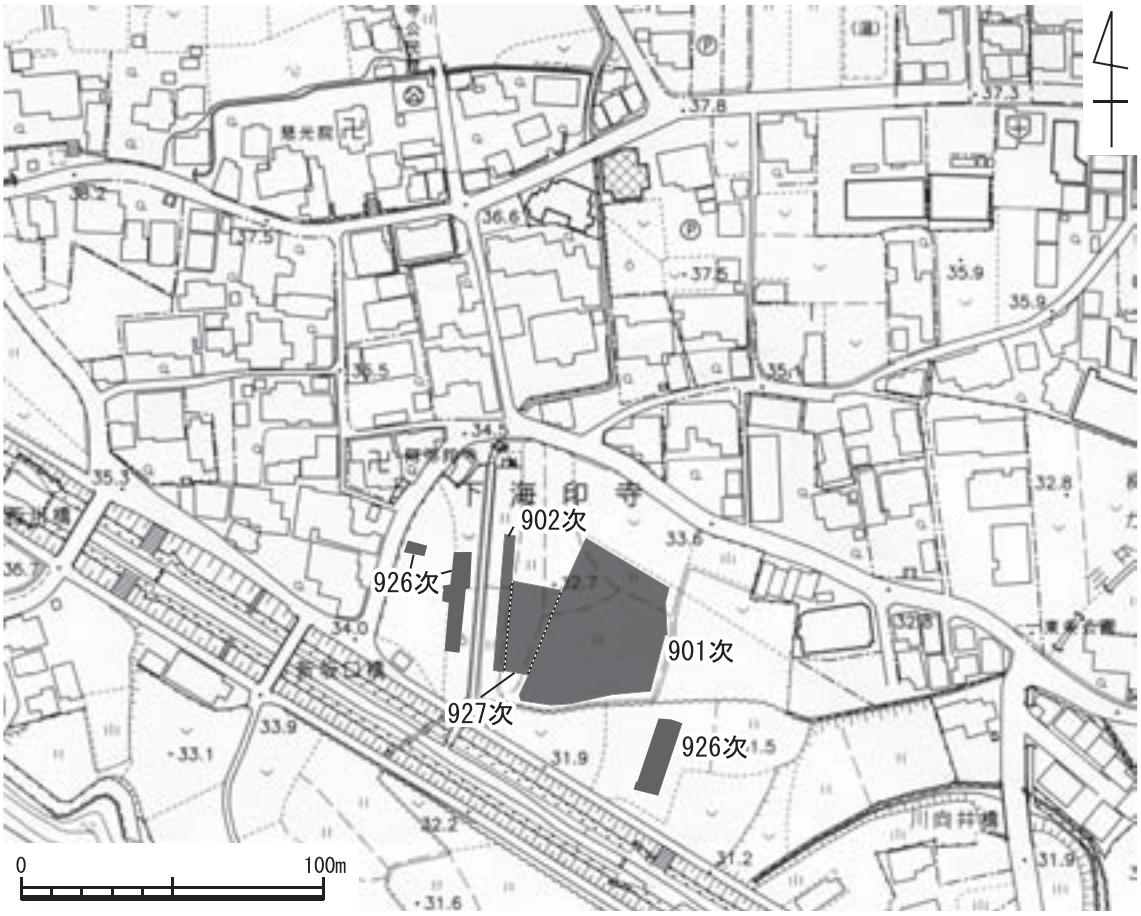
①長岡京右京第 901 次調査（7 ANOKD － 4 地区）

発掘調査は、調査第２課第２係長森　正・同主任調査員中川和哉・同専門調査員竹井治雄が担当した。現地調査は平成 19 年 4 月 24 日～同年 11 月 26 日まで実施した。

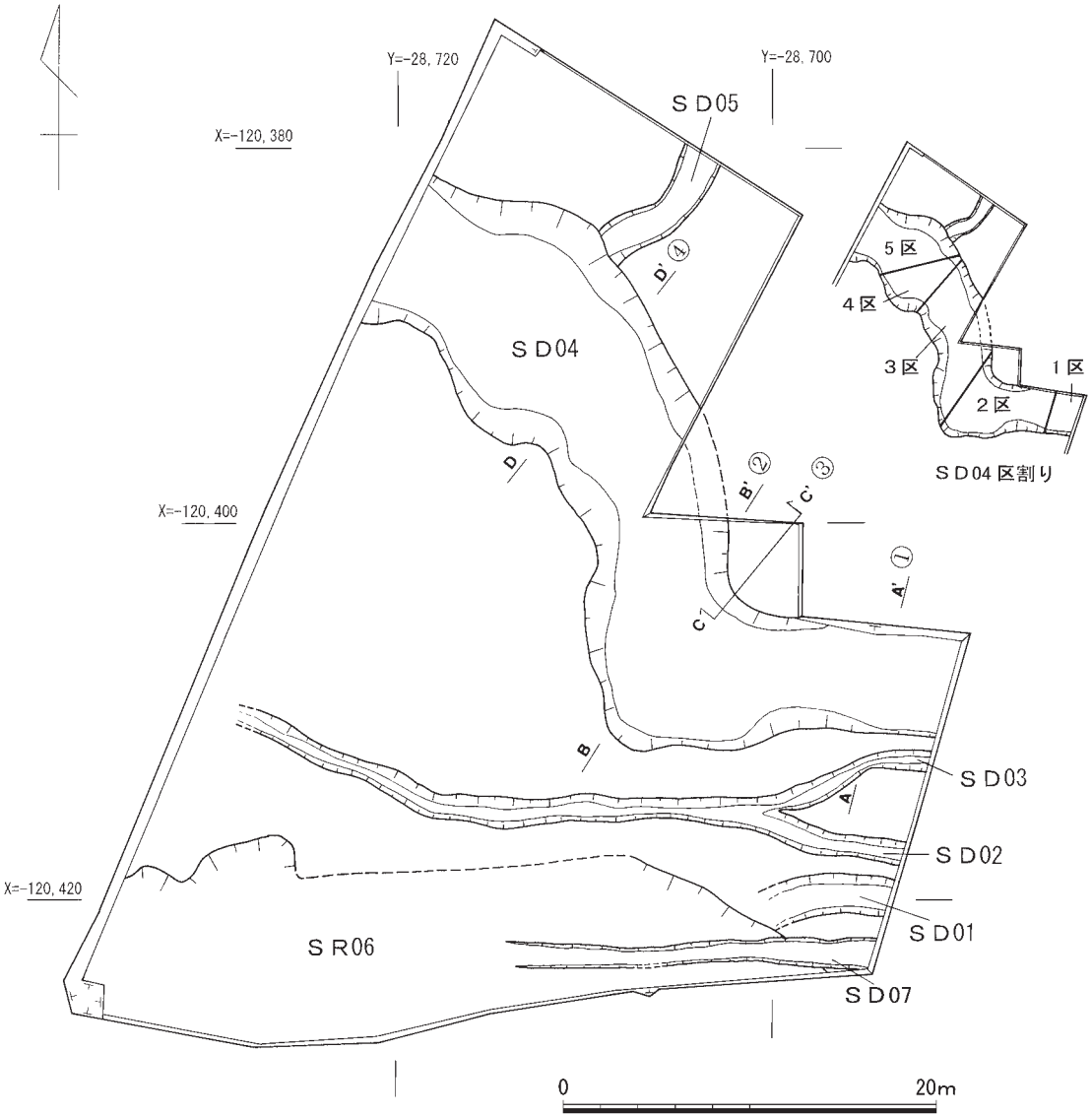
右京第 901 次の調査地は、平成 18 年度右京第 890 次調査に隣接する地区である。右京第 890 次調査では古墳時代後期の竪穴式住居跡、鉄滓を含む古墳時代の流路跡、中世の柱穴などを検出した。長岡京市教育委員会が発掘調査を実施した右京第 162 次調査では、ほぼ真北を向く奈良時代の掘立柱建物跡２棟分を検出している。

遺跡の立地する場所は、淀川支流小泉川の左岸である。現在の小泉川は河川改修によって直線に流路を改変されているが、本来は大きく蛇行し、広い氾濫原を持っていた。調査地は小泉川が大きく蛇行する湾曲の内側にあたる。調査地の基盤層は、大阪層群に不整合で重なる河川堆積物である。礫を主体としてラミナ状の堆積や、洪水性の土石流が見られる。河川から離水した時期は、遺構から古墳時代初頭以前であることは明らかである。離水した以後も洪水による土砂の掘り込みがあり、流水の影響を受けたことがわかる。

基本層序は、耕作土があり、何枚かの水平堆積の水田土壌が載る。その下は灰白色あるいは黄



第８図　上内田地区調査地配置図

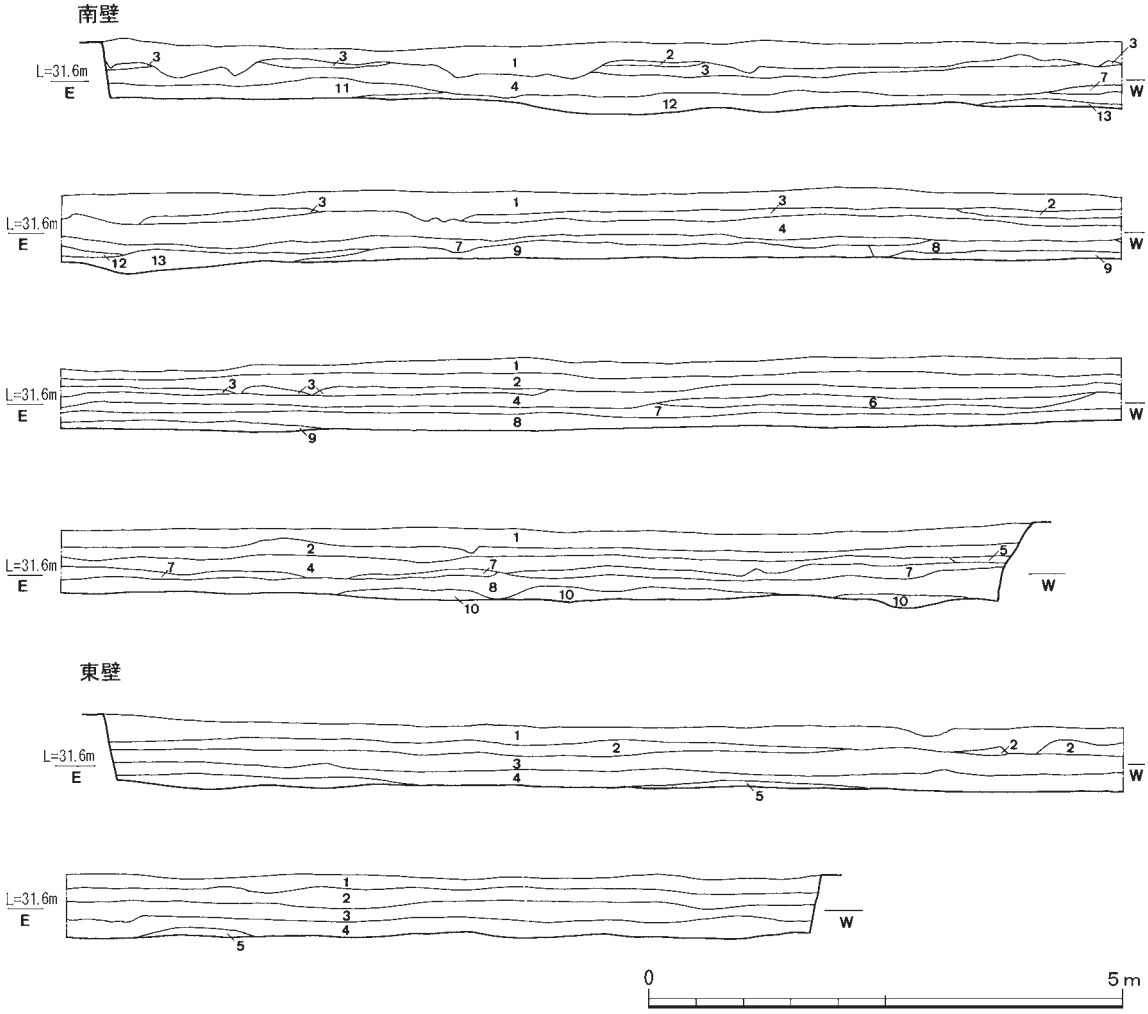


第９図　右京第901次上内田地区遺構平面図

褐色の粘質土、あるいは礫層があり不整合面を形成する。この面は上層の水田面と同じくほぼ水平で、層理面は小礫と遺物が多く出土する。遺物には古墳時代、奈良･平安時代のものもあるが、中世前期の遺物も含まれる。凹凸があると考えられる、複雑な堆積を見せる面が水平であることと、遺物集中層を形成することから、中世前期の土地利用の改変によるものと想定できる。

溝ＳＤ07　東で北に３度傾くほぼ東西方向の溝である。遺物は出土しなかった。右京第890次調査で検出したＳＤ02と同一のものと考えられる。右京890次調査では、遺構の新旧関係の検討から古墳時代後期以後のものであることがわかった。検出長約20m、幅約1.2mを測る。隣接する右京第890次調査区西部では、溝の痕跡が下層に写ったものであることが想定できたが、今回の溝もまた、断面で明確でなく平面のみで検出できた。右京第162調査で検出された掘立柱建物群と方位を同じくすることから同時代と想定できる。長岡京条坊とは一致しない。

流路ＳＤ01　調査区南東部で検出できた小礫を主体とする土によって埋められた流路である。西側は削平され続かない。古墳時代後期以降に形成されたと考えられる。右京第890次調査のＳ



［調査区南壁層名］
1. 耕作土
2. 黄灰色粘砂質土（2.5Y 5/1）＜マンガン含む＞
3. 黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）
4. 褐灰色砂礫土（10YR 5/1）
5. 褐灰色砂質土（10YR 5/1）
6. オリーブ灰色粘砂質土（5GY 6/1）
7. 灰色礫混じり砂質土（N5/1）
8. 灰色礫混じり砂質土（5Y 5/1）＜大礫含む＞
9. 黄灰色礫混じり粘砂質土（2.5Y 5/1）
10. 灰色粗砂（N5/）
11. 灰色粘砂質土（7.5Y 5/1）＜マンガン含む＞
12. 灰色礫混じり砂質土（N5/）
13. 灰色粘砂質土（N5/）

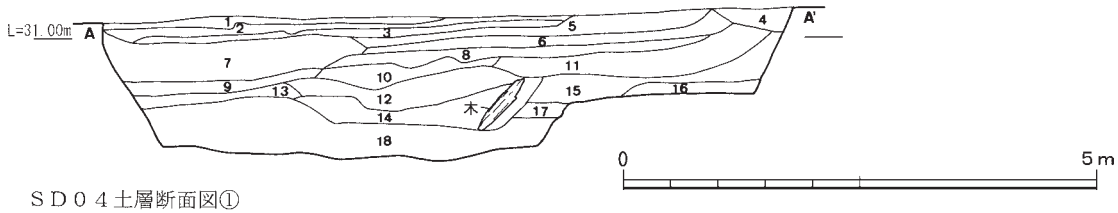
［調査区東壁層名］
1. 耕作土
2. 黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）
3. 褐灰色砂礫土（10YR 5/1）
4. 灰色粘砂質土（7.5Y 5/1）＜マンガン含む＞
5. 黄灰色礫混じり砂質土（2.5Y 4/1）

第10図　右京第901次上内田地区調査区断面図

R 36と同一遺構とみられる。検出長約８m、幅約２m、深さ約0.3mを測る。

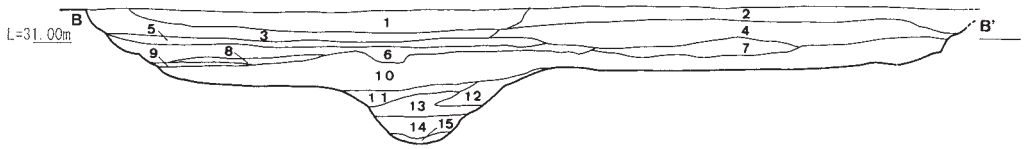
流路ＳＤ02・ＳＤ03　右京第890次調査区から続く古墳時代後期の流路跡である。

流路ＳＤ04　調査区域を蛇行して流れる流路跡である。上層にはシルト質の古墳時代の堆積層が載るが、中･下層は古墳時代初頭の遺物のみが出土する。また、中･下層の堆積には砂礫･砂･シルトが互層を為している状態が見られ、一定の水流があったと考えられる。流路内からは甕を中心に土師器が出土しているが、第12図で見るように完形のまま、土圧で破損した状態で検出できた。こうした完形率の高い土器は、人工的な木の組み合わせや木製品の出土した周辺で多く



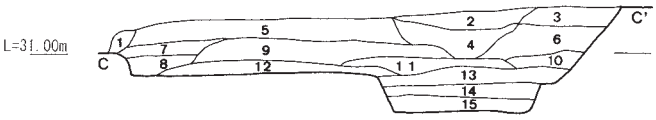
ＳＤ０４土層断面図①

1. 灰褐色粘砂質土（10ＹＲ 7/1）
2. 褐灰色粘質土（7.5ＹＲ 6/1）
3. 褐灰色粘質土（7.5Ｙ 5/1）
4. 灰黄褐色砂礫（10ＹＲ 5/1）
5. 灰黄褐色粘質土（10ＹＲ 6/2）
6. 灰黄褐色砂混じり粘質土（10ＹＲ 6/2）
7. 灰黄色砂礫（2.5ＹＲ 1/2）
8. 灰褐色粘質土（10ＹＲ 6/1）
9. 褐灰色粗砂（10ＹＲ 5/1）
10. 暗褐灰色砂質土（10ＹＲ 5/1）
11. 褐灰色砂混じり粘質土（10ＹＲ 6/1）
12. 黄橙色砂礫（10ＹＲ 6/4）
13. 黄褐色砂礫（10ＹＲ 5/3）
14. 褐灰色粗砂（10ＹＲ 4/1）
15. 黄橙色粗砂礫（10ＹＲ 6/3）
16. 青灰色粗砂礫（10ＢＧ 6/1）
17. 青灰色粗砂（10ＢＧ 5/1）
18. 青灰色砂礫（10ＢＧ 5/1）



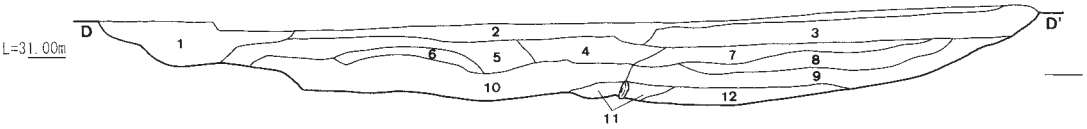
ＳＤ０４土層断面図②

1. 黒褐色粘質土（5ＹＲ 2/2）
2. 淡黒褐色粘砂質土（5ＹＲ 2/2）
3. 淡灰色粘質土（10Ｙ 6/1）
4. 淡青灰色砂質土（10ＧＢ 6/1）
5. 褐灰色粘質土（5ＹＲ 6/1）
6. 淡褐灰色礫混じり粘質土（5ＹＲ 6/1）
7. 橙色砂礫（7.5Ｙ 6/8）＜小礫多く含む＞
8. 灰色砂混じり粘質土（10Ｙ6/1）
9. 暗灰色粘質土（Ｎ3/）＜炭化物含む＞
10. 明赤褐色砂礫（5ＹＲ 7/6）
11. 暗青灰色泥土（10ＧＢ 3/1）＜腐食土混じる＞
12. 灰色礫混じり粗砂（10Ｙ 6/1）＜小礫含む＞
13. 橙色粗砂（7.5Ｙ 6/8）
14. 灰色砂（10Ｙ 6/1）
15. 淡灰色粗砂（10ＧＢ 6/1）



ＳＤ０４土層断面図（断割）③

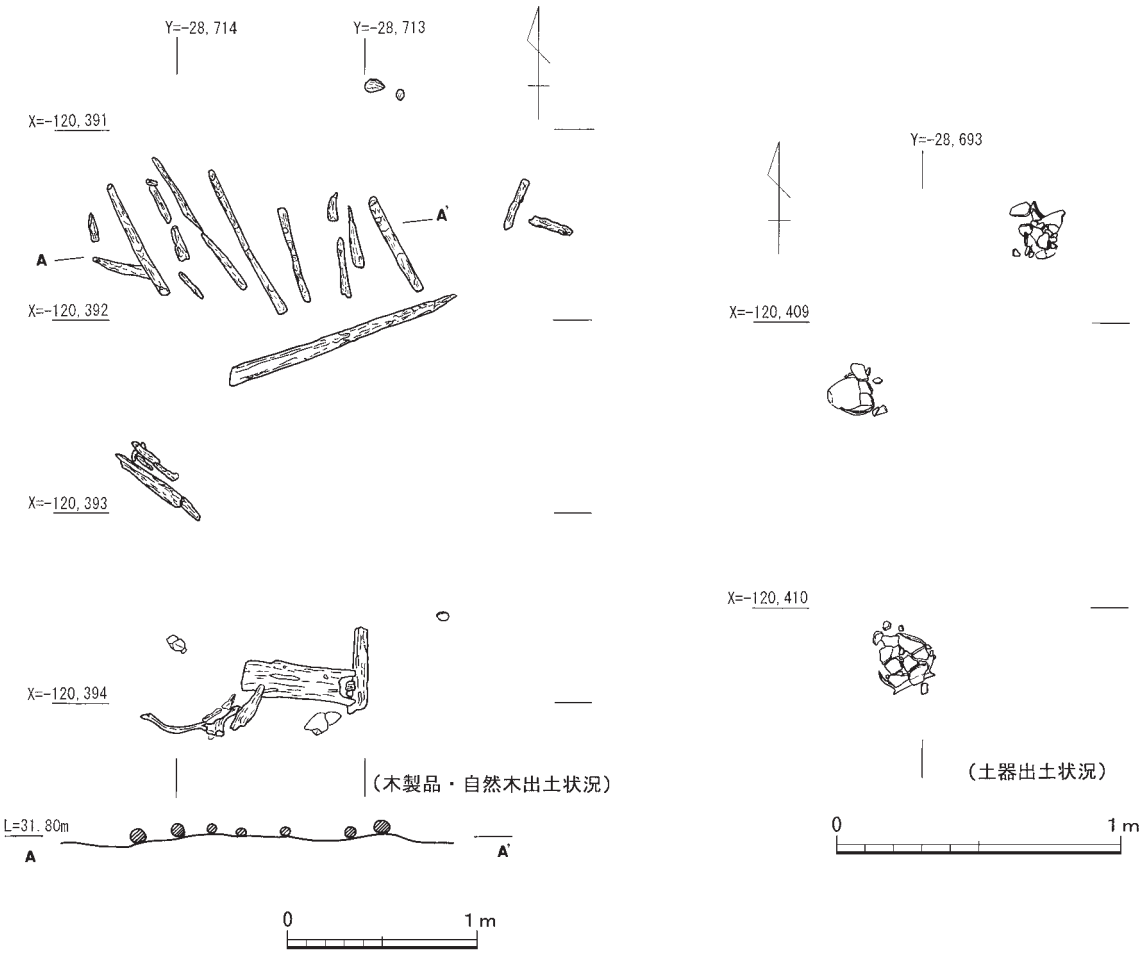
1. 淡褐灰色シルト混じり粘質土（7.5Ｙ 6/1）
2. 明赤褐色砂混じり粘砂質土（5ＹＲ 5/6）
3. 明赤褐色礫混じり粘砂質土（5ＹＲ 5/6）
4. 明褐灰色粘質土（7.5Ｙ 6/1）
5. 淡褐灰色粘質土（7.5Ｙ 6/1）
6. 淡赤褐灰粗砂（5ＹＲ 5/6）
7. 淡褐灰色粘砂質土（7.5Ｙ 7/1）
8. 灰白色粘質土（10Ｙ 6/1）
9. 淡褐灰色粘質土（7.5Ｙ 6/1）
10. 褐灰色礫混じり粗砂（5ＹＲ 5/1）
11. 灰白色粘質土（10Ｙ 7/1）
12. 淡褐灰色砂（7.5Ｙ 6/1）
13. 暗青灰色砂混じり粘質土（5Ｂ 4/1）
14. 灰色砂（7.5Ｙ 6/1）
15. 暗灰色粗砂（Ｎ4/）



ＳＤ０４土層断面図④

1. 黒褐色粘質土（5ＹＲ 2/2）
2. 明赤褐色礫混じり粘砂質土（5ＹＲ 5/6）
3. 明赤褐色砂混じり砂質土（5ＹＲ 5/8）
4. 褐灰色砂礫（5ＹＲ 5/1）
5. 橙色砂礫（5ＹＲ 6/8）＜小礫多く含む＞
6. 淡褐灰色粘砂質土（5ＹＲ 6/1）
7. 灰褐色粗砂礫（5ＹＲ 5/2）
8. 灰黄色礫混じり砂質土（2.5Ｙ 6/2）
9. 明赤褐色砂礫（5ＹＲ 4/8）
10. 黄灰色粘質土（2.5Ｙ 5/1）＜腐食土混じる＞
11. 灰色粘砂質土（Ｎ4/）
12. 灰褐色砂礫（Ｎ5/）＜拳大の礫多く含む＞

第11図　流路ＳＤ04断面図



第12図　流路ＳＤ04土器・木製品出土状況図

発見される。第12図は棒状の木製品が８本平行に配列され、その南東側に横方向に板が置かれている。また、柱根状に底部が平らな直径20cm程度の柱が垂直に立って検出できる部分もあった。なお、流路中からサヌカイト製石鏃（図版24－２ａ）が出土したが、混入とみられる。

流路ＳＤ05　ＳＤ04によって切られる溝状の遺構であるが、人為的であるかについての確証はない。遺構の前後関係から古墳時代後期以前の時期が与えられる。

河道ＳＲ06　人頭大の礫を含む河川状堆積物による流路跡で、埋土から摩滅の著しい土師質の土器片が出土した。深さは断ち割りによって1.8ｍまで掘り下げたが底は検出できなかった。

小結

今回の調査地では、西隣接地点（右京890次）で確認していた古墳時代後期の遺構の広がりを想定したが、調査の結果、同時期の集落の広がりは認められなかった。

一方、右京第890次調査では、断ち割り調査でほとんど遺物が出土しなかったＳＤ04から多量の古墳時代初頭の土器が出土した。第890次調査では同時期の土器はほとんど出土していない。今回の調査地に隣接して古墳時代の明確な遺構があるものと予測されたが、同年度に実施した隣接地の第902次試掘調査によって同時期の竪穴式住居跡が検出された。長岡京期の明確な遺構は検出できなかった。

（中川和哉）

②長岡京右京第902次・928次調査（７ANOKD－５・７地区）

右京第928次調査は、右京第902次調査の試掘結果を受け、本調査を実施したものである。右京第902次調査は、右京第901次の調査期間中に実施し、200㎡を試掘調査した。右京第928次調査は、その東を拡張して調査区を設定し、400㎡を対象に本発掘調査を実施した。調査期間は、平成19年11月23日～平成20年1月17日である。右京第902次調査は、調査第２課調査第２係長森　正と同主任調査員増田孝彦が担当し、また右京第928次調査は調査第２係長森　正と調査員高野陽子が担当した。

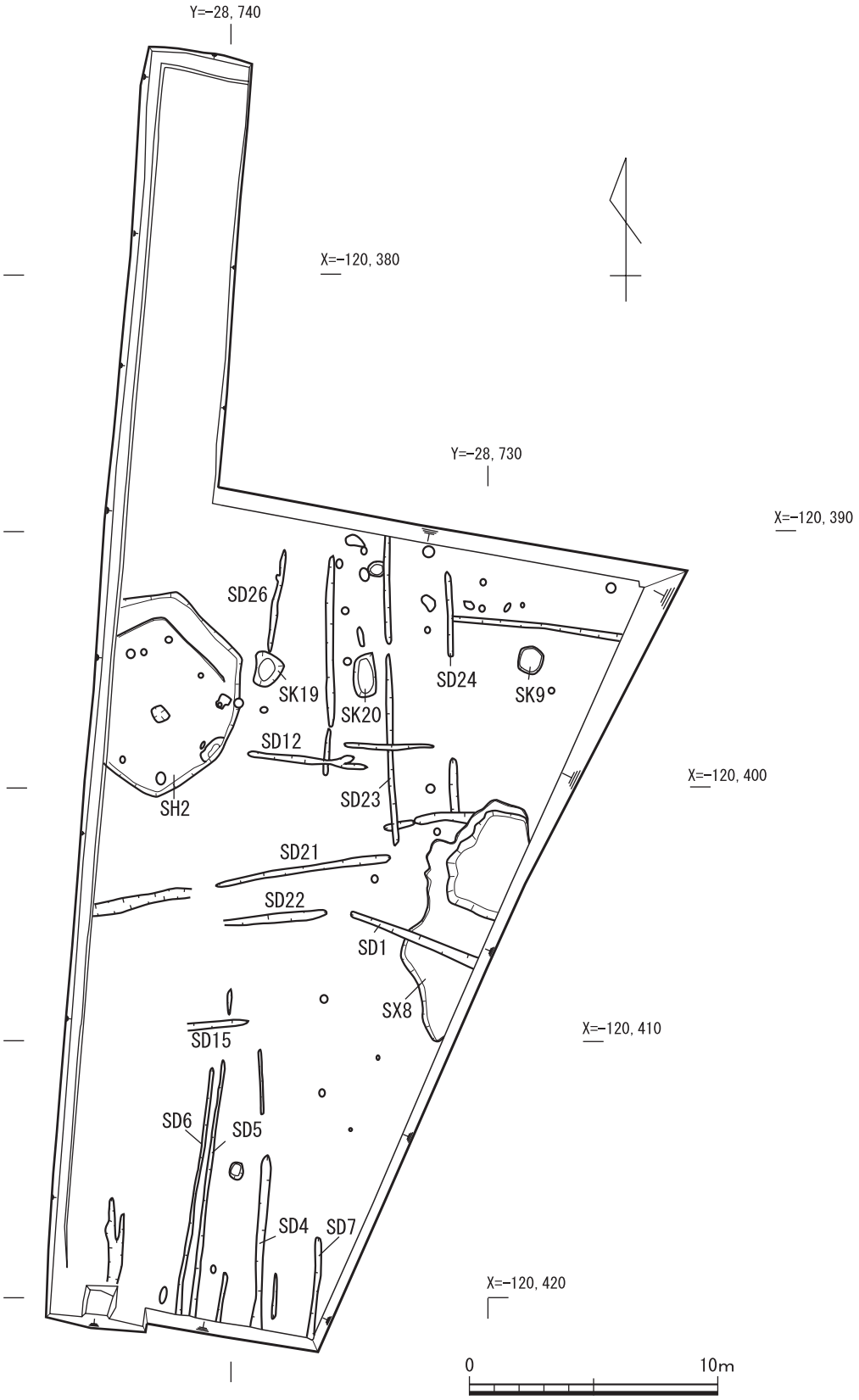
調査地周辺の現地表面は、標高約32.5ｍを測り、地表下約0.8ｍで、ベース面となる青灰色粘土層を確認した。基本層序は、耕作土以下、上層から順に褐灰色粘砂質土、灰色礫混じり砂質土、オリーブ灰色粘砂質土の順に堆積する。厚さ約0.2ｍのオリーブ灰色粘砂質土上層から近世遺物が出土したため、この面まで重機掘削を行い、その下層を人力掘削によって調査を進めた。

今回の調査の主な検出遺構は、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴式住居跡１基と土坑２基、中世の土坑１基と落ち込み１基、中世以降の素掘り溝群等である。

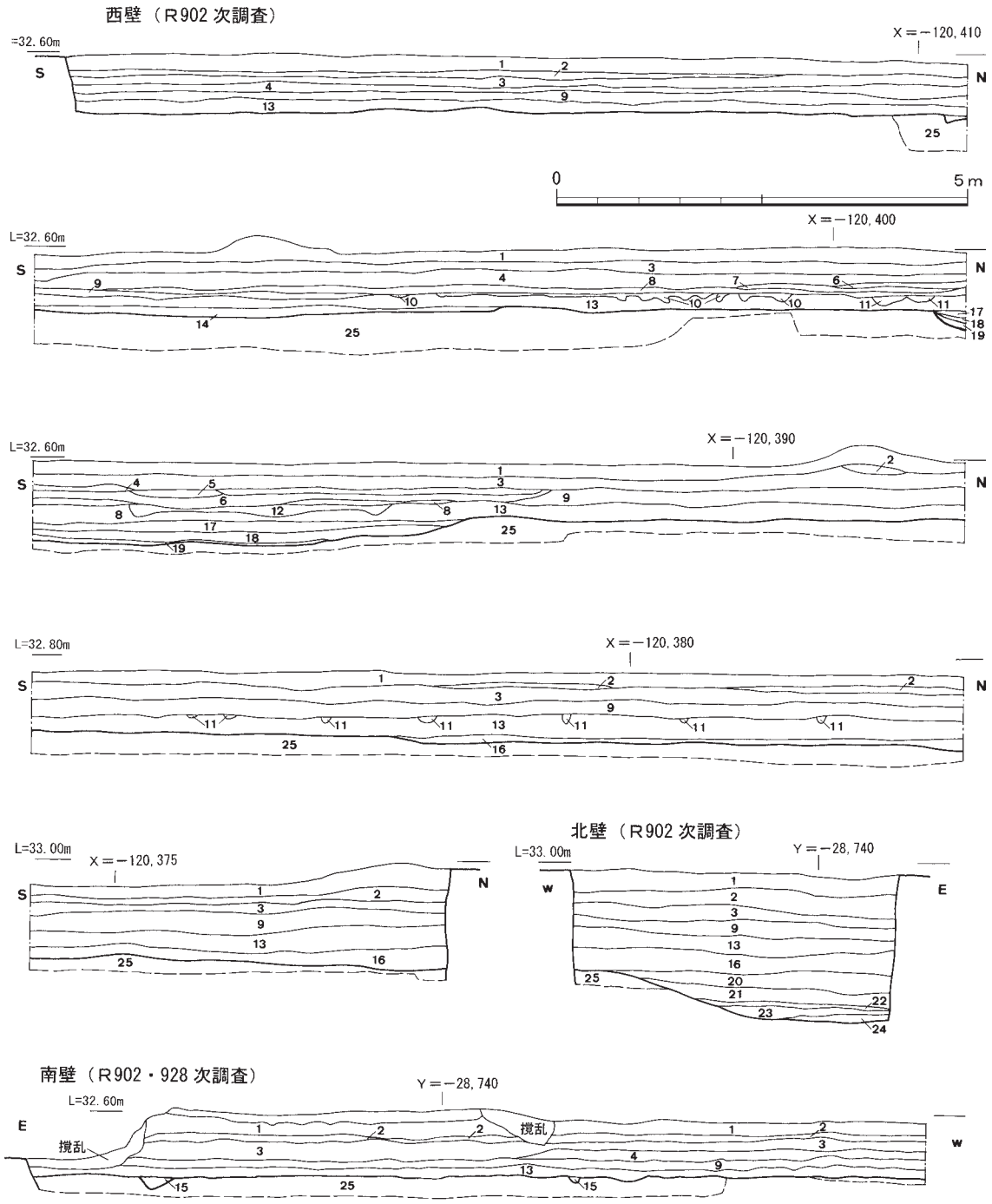
竪穴式住居跡ＳＨ２　調査区北西で検出した住居跡である。右京第902次の試掘調査の際に、すでに西側の４分の３以上を検出していたが、右京第928次調査で東側の残り部分を検出した。住居床面の一部は調査範囲外となっているが、住居の平面形はやや歪な六角形に復原することが可能で、いわゆる多角形住居である。住居床面からは８基の柱穴を検出したが、このうち３基（第15図Ｐ１～Ｐ３）が主柱穴とみられる。調査範囲外の地点の柱穴を復原すると、４主柱で構成される主屋と推定される。また本調査において、試掘部分の精査を行い、床面で北側２辺に平行して幅約１ｍのいわゆるベッド状遺構とされる高床部を検出した。高床部の本来の高さは約0.15ｍを測り、この上面で高杯１点が出土した。床面中央では径約0.6ｍの円形の中央土坑を検出した。炭化物が多く出土し、炉として用いられたものとみられる。住居内土坑としては、南東部の壁際でも土坑を検出した。幅約1.0ｍ、深さ約0.4ｍを測る。土坑は壁体の隅角に掘削され、隅角と土坑を結ぶライン上の内寄りで、長さ0.2ｍ、深さ0.25ｍの楕円形の小規模な柱穴（第15図Ｐ４）を検出した。梯子などの昇降のための施設に伴う遺構の可能性があり、その場合はこの部分が住居入口になると考えられる。また試掘では、住居の検出面で多量の礫が出土しているが（図版第10－１）、いわゆる土屋根に礫が用いられる例があることから、本例の屋根部もこうした構造であった可能性がある。出土遺物は、埋土上層から２片のサヌカイト剥片が出土した（図版第24－２ｂ・ｃ）。土器はわずかながら、久御山町佐山遺跡編年で示したおおよそ佐山Ⅱ式前半に位置づけられ、庄内式併行期古相にあたる古墳時代初頭[注３]と推定される。

土坑ＳＫ20　調査区北部中央で検出した土坑である。平面形は歪な楕円形状を呈する。規模は、約1.7ｍ×0.9ｍ、深さ約0.4ｍを測り、床面は摺鉢状をなす。土坑内から壺・甕類などの土器とともに砥石が出土した。埋土には、細かな炭化物が含まれていた。出土土器から竪穴式住居にやや先行する弥生時代後期末～古墳時代初頭の土坑とみられる。

土坑ＳＫ19　ＳＨ２の東側で検出した不整円形の土坑である。直径約1.2ｍ、深さ約0.2ｍを

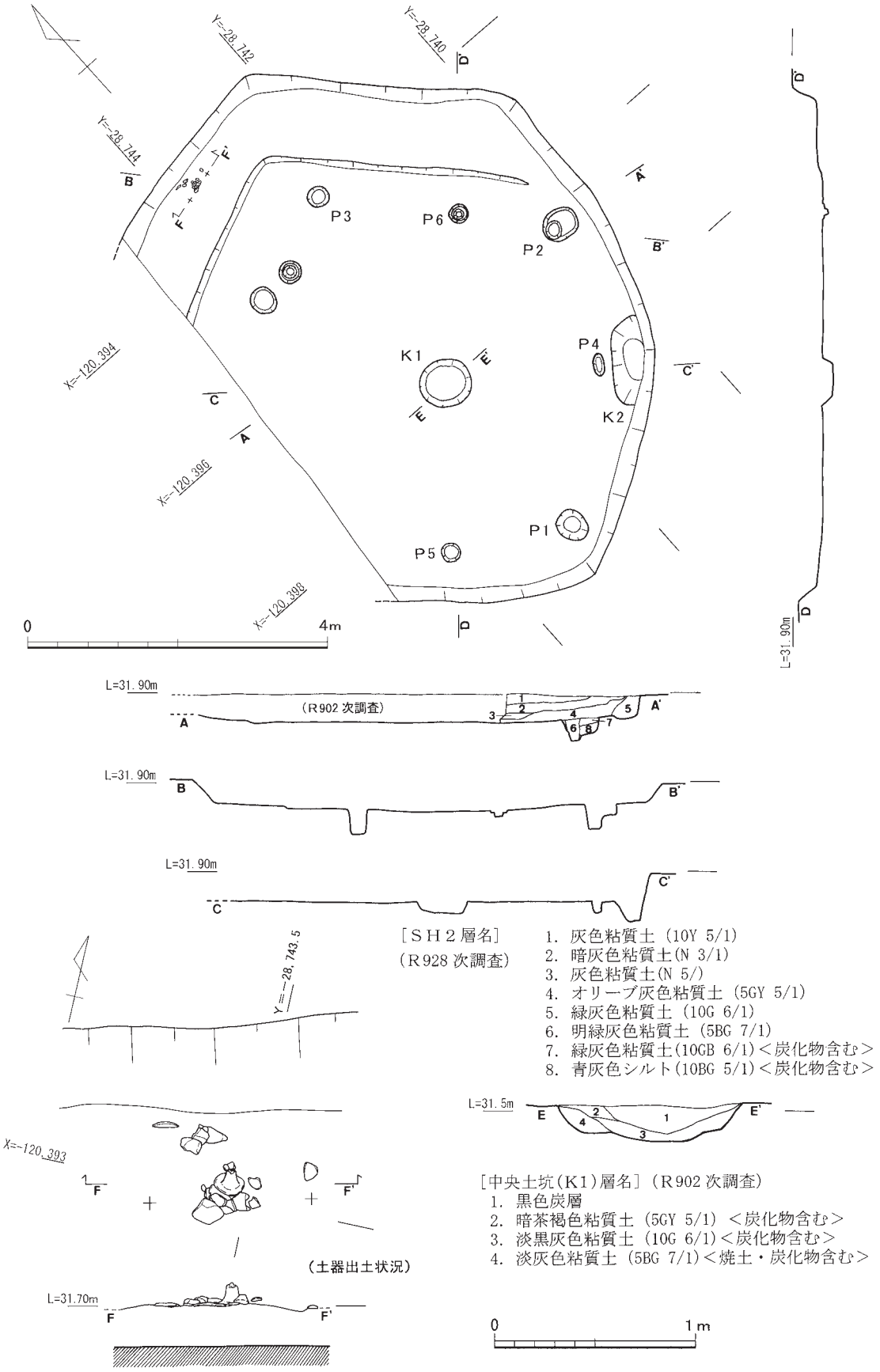


第 13 図　右京第 902・928 次上内田地区遺構配置図



1. 黄灰色粘砂質土（2.5Y 5/1）＜マンガン含む＞
2. 明黄褐色砂質土（10YR 6/6）
3. 褐灰色礫混じり粘砂質土（10YR 5/1）
4. 灰色礫混じり砂質土（N5/）
5. 灰黄色粘砂質土（2.5Y 6/2）
6. オリーブ灰色粘砂質土（5GY 6/1）
7. オリーブ黒色シルト（7.5Y 3/2）
8. 青灰色粘土（5BG 6/1）＜地山＞
9. 褐灰色砂質土（10YR 6/1）
10. 青灰黄色砂質土（2.5Y 5/2）
11. 灰黄色砂質土（2.5Y 5/2）
12. 灰色砂質土（5Y 5/1）
13. 黄灰色砂質土（2.5Y 6/1）
14. 黄褐色砂質土（10YR 5/6）＜マンガン多く含む＞
15. 暗灰黄色砂質土（2.5Y 5/2）
16. 褐灰色砂質土（10YR 5/1）
17. 黄灰色粘砂質土（2.5Y 4/1）
18. 黒褐色粘質土（2.5Y 3/1）
19. 灰色粘質土（10Y 4/1）
20. 緑黒色シルト（5G 2/1）
21. 暗オリーブ灰シルト（2.5GY 4/1）
22. 黒色シルト
23. 緑黒色砂質土（7/5GY 2/1）
24. オリーブ黒色礫混じり粘砂質土（5GY 2/1）
25. 青灰色粘土

第 14 図　右京第 902・928 次上内田地区調査区断面図

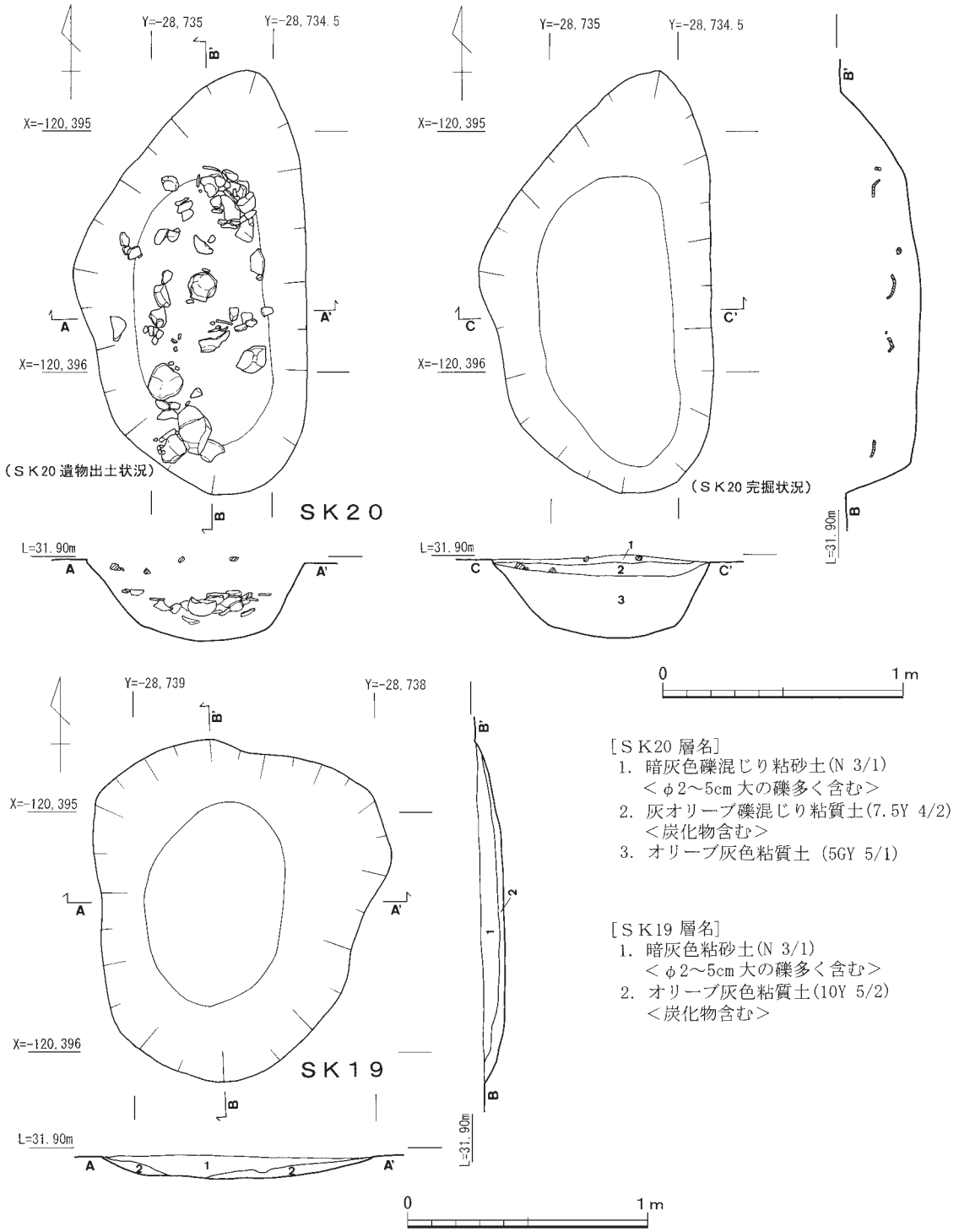


第15図　竪穴式住居跡ＳＨ２実測図

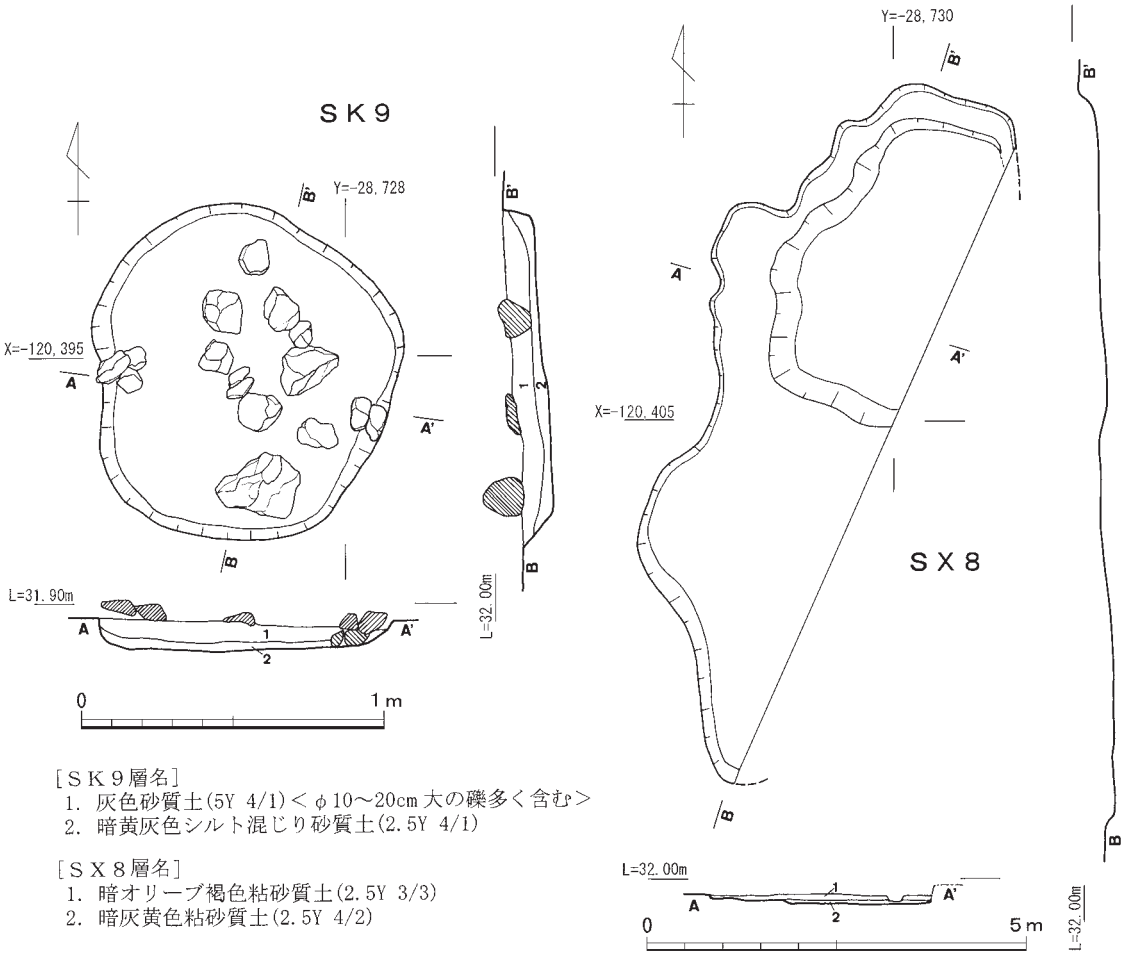
測る。検出状況や埋土からＳＫ20と同様の時期に帰属するものと考えられる。

土坑ＳＫ９　調査区北東で検出した。直径約１ｍ、深さ約0.1ｍの円形の土坑である。土坑上面で多くの角礫を検出した。出土遺物は土坑周辺で瓦器片が出土したが、遺構に直接伴うものではない。土坑の埋土は灰色砂混じり粘質土で、埋土の状況などから中世以降の遺構と推定される。

落ち込みＳＸ８　調査区中央東で検出した不整形の落ち込みである。長さ約9.5ｍ、幅約3.6ｍ以上を測る。北部がやや深く１段深く掘削されており、深さ約0.3ｍを測る。北部から初鋳



第16図　土坑ＳＫ19・土坑ＳＫ20実測図



第17図　土坑ＳＫ９・落ち込みＳＸ８実測図

1368年の「洪武通寶」が出土したことから、中世後期の落ち込みと推定される。

素掘り溝群　素掘り溝群は、近世の包含層によって上層が削平され、検出面での深さは約0.1～0.2ｍを測る。主軸は、大きく南北、東西の二方向に分かれる。溝ＳＤ12・21・22は、東西方向の溝で、重複関係から南北方向の溝群よりも新しく掘削されている。南北方向の素掘り溝ＳＤ４～７、ＳＤ23・24・26は、平安時代末期から鎌倉時代の瓦器細片が出土し、主に中世の耕作に伴う素掘り溝群と推定される。

小結

今回の調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構群を検出した。調査地点の北西では、これまでの調査で古墳時代初頭の大規模な流路跡が確認され、小泉川の段丘上にも集落の縁辺部が広がることが判明した。検出した住居跡は、府内で13例の調査例をみるいわゆる多角形住居である。多角形住居はほとんどが後期に属し、円形から方形の住居形態への移行を橋渡しする住居形態で、特に後期後葉における住居の床面積の拡大に対応する住居(注4)とされる。全国的には150例以上の類例があり、分布は特に東部瀬戸内地域の加古川流域に集中する。播磨・摂津地域の多角形住居には住居内高床部を伴う特徴があり、今回の調査で検出した多角形住居もこうした地域との交流を背景にしたものと考えられる。　（高野陽子）

③長岡京右京第 926 次調査（７ANOKD － ６地区）

今回の調査地は、長岡京市下海印寺上内田地内に所在する。長岡京跡右京七条四坊十一町・十二町にあたり、伊賀寺遺跡にも含まれる。調査面積は、全体で 400㎡を測る。調査期間は、平成 20 年１月８日～同年２月 28 日である。現地調査は、調査第２課調査第２係長森　正と、専門調査員竹井治雄が担当した。

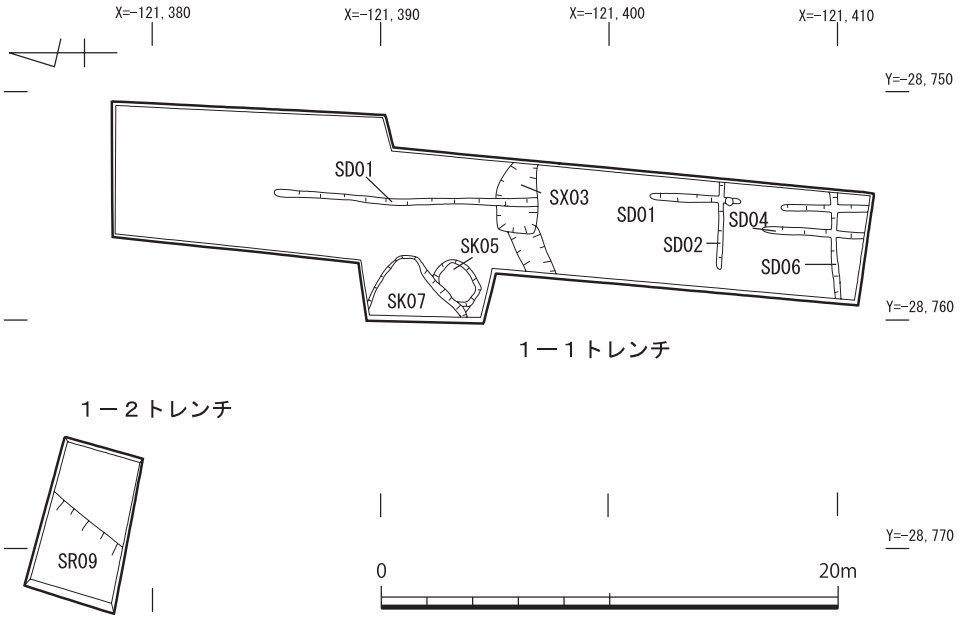
調査地は、現小泉川左岸に隣接し、現況は標高 30 ～ 32 ｍの水田・畑地である。調査地は、大きく２地点に分かれる。１トレンチは、右京第 928 次調査地の西側隣接地に設定した試掘トレンチである。１トレンチについては一部追加調査を実施したため、当初のトレンチを１－１トレンチとし、追加した部分を１－２トレンチとした。また、２トレンチは、右京第 901 次調査の南東地点に設定したものである。

調査の結果、長岡京跡に関連する遺構は検出できなかったが、古墳時代の土坑、平安時代の流路跡、旧小泉川の氾濫、中世～近世の水田・畑地等を検出した。出土遺物は、各トレンチから瓦器、土師器、須恵器、白磁、縄文土器等が出土した。

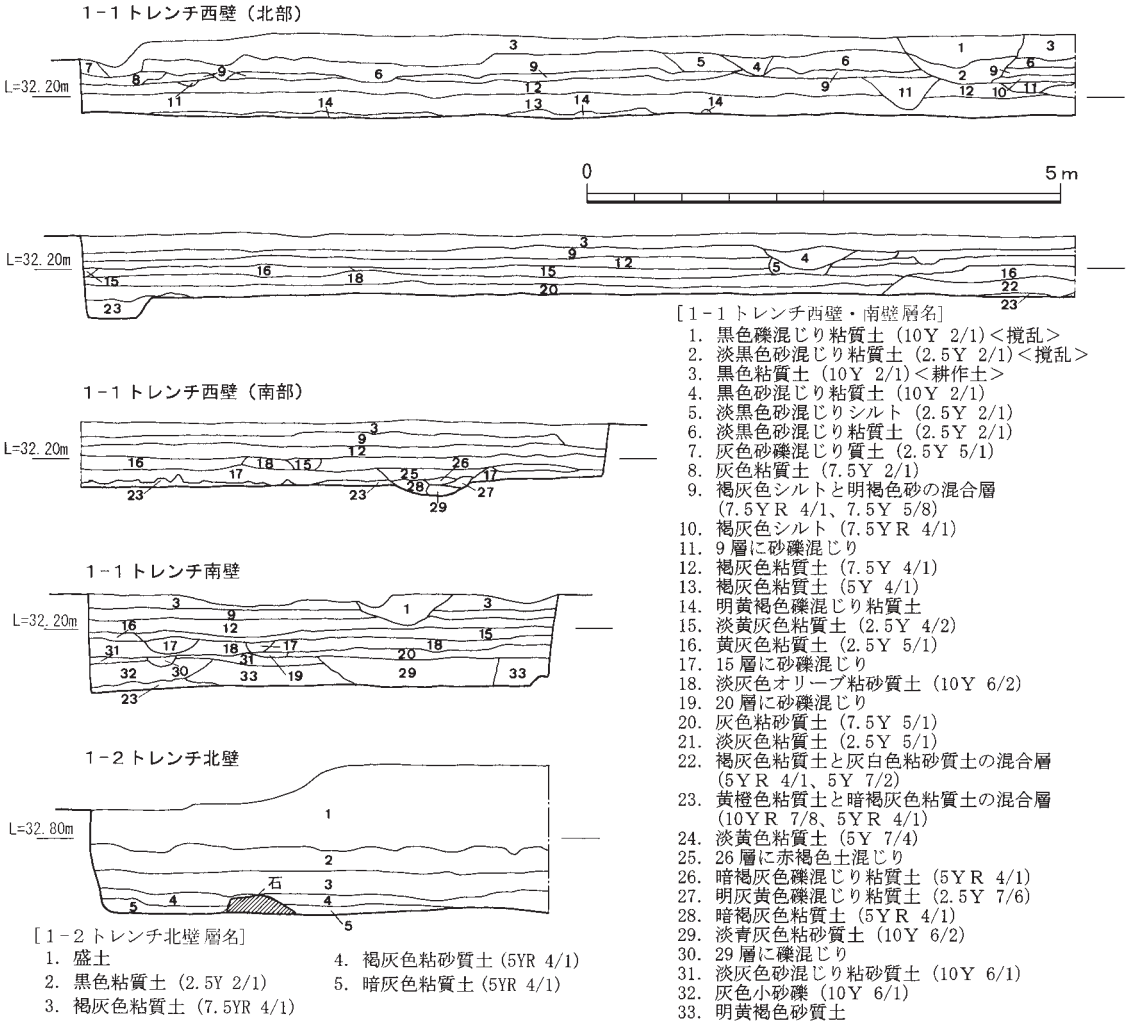
１－１トレンチ（第 18 図）

溝ＳＤ 01　ほぼ南北方向の主軸をもつ素掘り溝である。規模は、幅 0.25 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。断面はＵ字形を呈し、淡灰色粘質土が堆積する。溝内からは瓦器、土師器、須恵器の破片が出土した。時期については、中世に属するとみられるが、トレンチ南半の東西方向の素掘り溝（ＳＤ 02）の方が新しい。

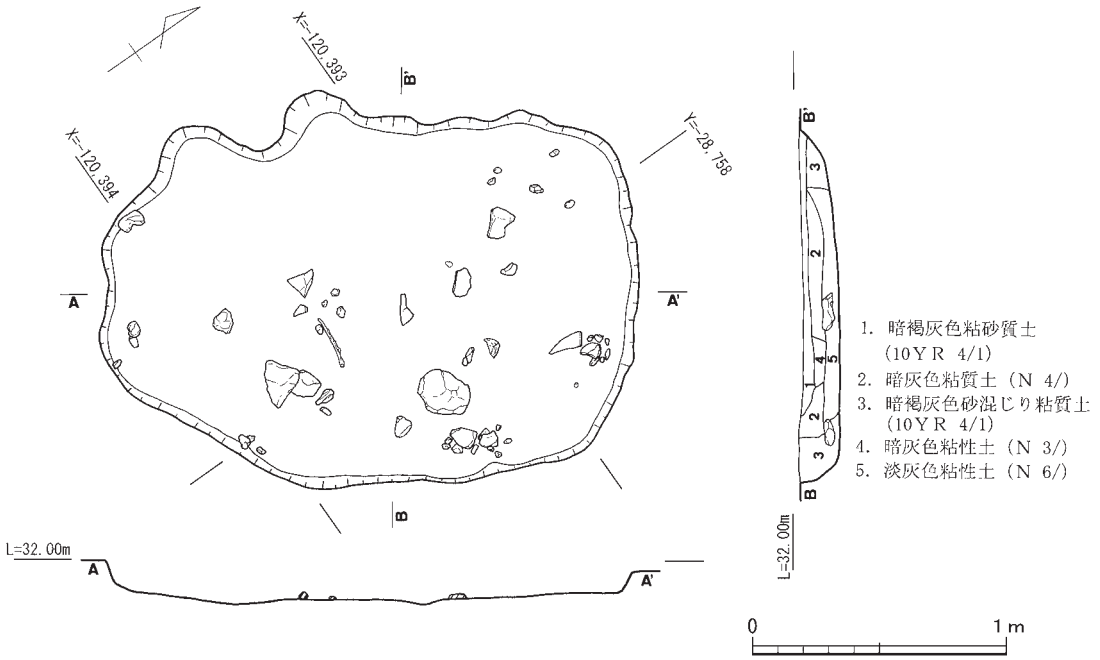
落ち込みＳＸ 03　トレンチ中央部で検出した。規模は、幅１ｍ、長さ約 3.2 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る。断面椀状を呈し、わずかに湾曲する東西方向の落ち込み状の遺構である。埋土は上層に粘土、粘砂質土、下層に小砂礫、砂が堆積し、流水の痕跡が認められる。瓦器、須恵器片等が出土



第 18 図　右京第 926 次上内田地区１トレンチ遺構平面図



第19図　右京第926次上内田地区1トレンチ断面図



第20図　土坑SK05実測図

している。

土坑ＳＫ 05　長辺 1.2 m、短辺 0.7 m、深さ 0.25 mを測る。断面皿状を呈し、底面は激しい凹凸がみられる隅丸方形の土坑である。土坑内には主に暗褐色粘質土が堆積土し、古墳時代の土師器、須恵器に混じって木片、炭化した木皮が出土した。

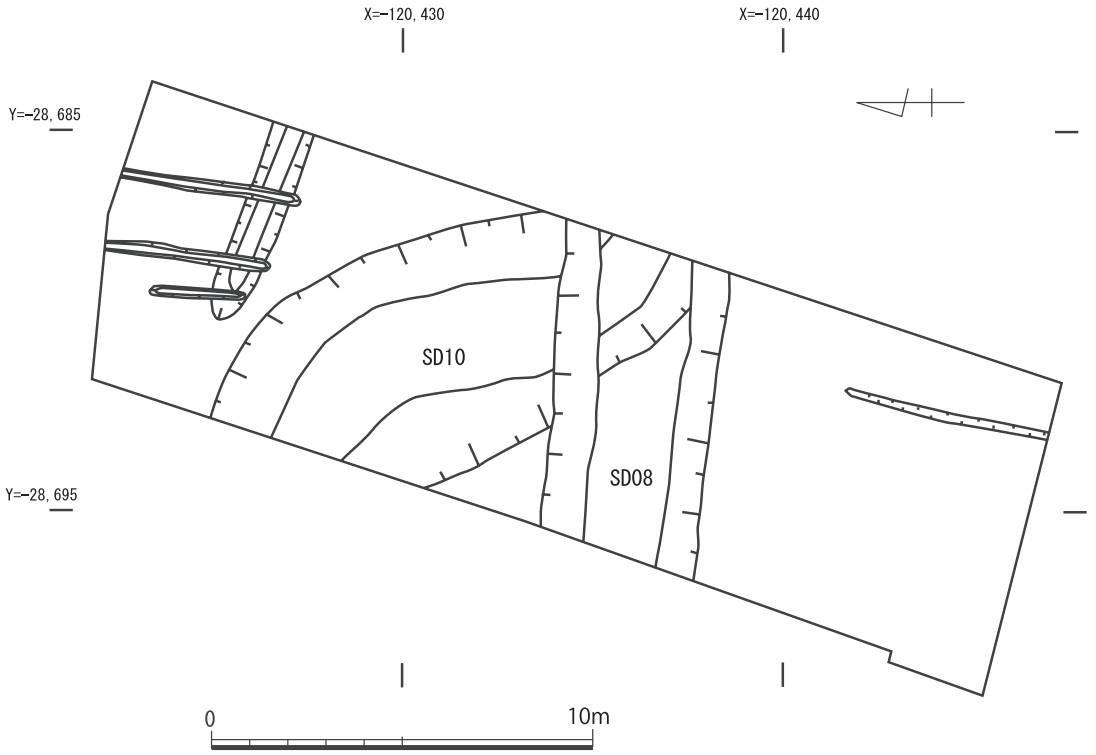
土坑ＳＫ 07　土坑ＳＫ 05 と重複して検出した。一辺３m以上、深さ 0.3 mを測る。断面逆台形を呈し、底面はＳＫ 05 と同様の激しい凹凸がみられる方形の土坑である。土坑内には暗褐色粘質土、灰色砂質土が互層を成し堆積する。遺物は少ないが、古墳時代の土師器、須恵器が出土した。この遺構の性格については、竪穴式住居跡、廃棄土坑等考えられるが、確定するに至らない。

土坑ＳＫ 05 と土坑ＳＫ 07 の時期については古墳時代に属するが、ＳＫ 07 の方が新しい。この両者は、形態、堆積土、出土遺物が類似する点から何らかの関連する遺構として考えられる。

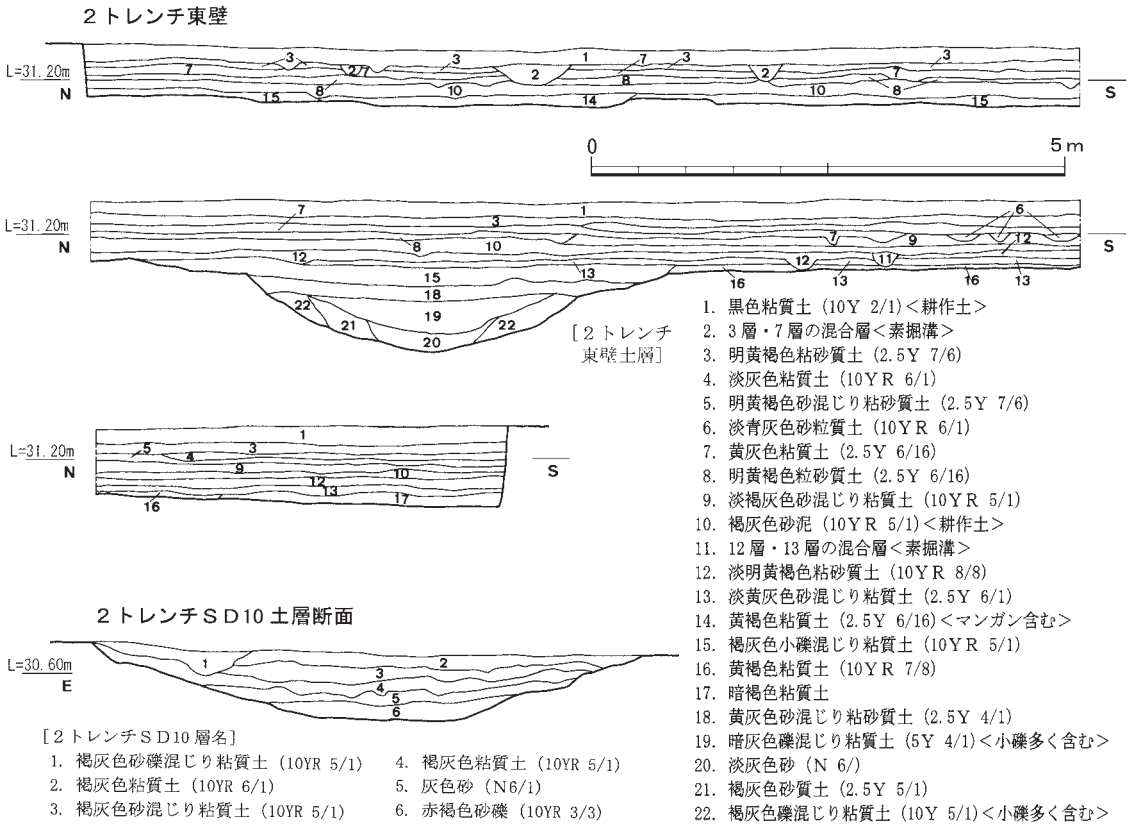
１－２トレンチ（第 18 図）

１トレンチの北西の地点に設定した試掘トレンチである。トレンチの西側で、北東から南西にむかって流れるとみられる流路ＳＲ 09 を検出した。流路内には、粘土、粘質土、小砂礫が堆積し、人頭大の礫、太い流木が混在していた。遺物は、古墳時代の須恵器、平安時代の土師器、中世の瓦器等である。

２トレンチ（第 21 図）



第 21 図　右京第 926 次上内田地区２トレンチ遺構平面図



第22図　右京第926次上内田地区２トレンチ・溝ＳＤ10断面図

流路ＳＤ08　幅３ｍ、深さ0.5ｍを測り、断面皿状を呈する西から東方向に流れる流路跡である。時期は流路内からは土師器、須恵器等が出土したことから、平安時代後半と推定される。流路内は粘砂質土、小砂、砂層が堆積し、流水の痕跡が認められる。流路跡の北肩には拳大、人頭大の礫が幅0.3～0.6ｍ、長さ５ｍにわたって並ぶ集石遺構があった。一部、南肩にも列状に並ぶ石がある。これは、もともと自然流路ではあるが、護岸用に人工的に造作された可能性がある。

流路ＳＤ10　幅５ｍ、深さ0.7ｍを測り、断面Ｕ字状を呈する北西から南東方向に蛇行する自然流路跡である。流路内は粘砂質土、粘質土、砂礫、砂層が堆積する。上層の粘砂質土は人為的な堆積土と思われる。時期は、流路内の上層からは土師器、須恵器、古墳時代の須恵器片等が出土したことから、平安時代後半代には埋没したものと考えられる。

小結

今回の調査の結果では、流路ＳＤ08・10の時期については、平安時代後半に属するが、流路ＳＤ08の方が僅かに新しい。この両者の流路は、元来自然流路であったが、並存する時期もあったものと思われる。ＳＤ08の集石遺構はＳＤ10が埋没し、その機能が消失した後に人工的に構築された護岸工事の痕跡であると思われる。長岡京跡に関連する遺構、遺物等は確認されなかった。

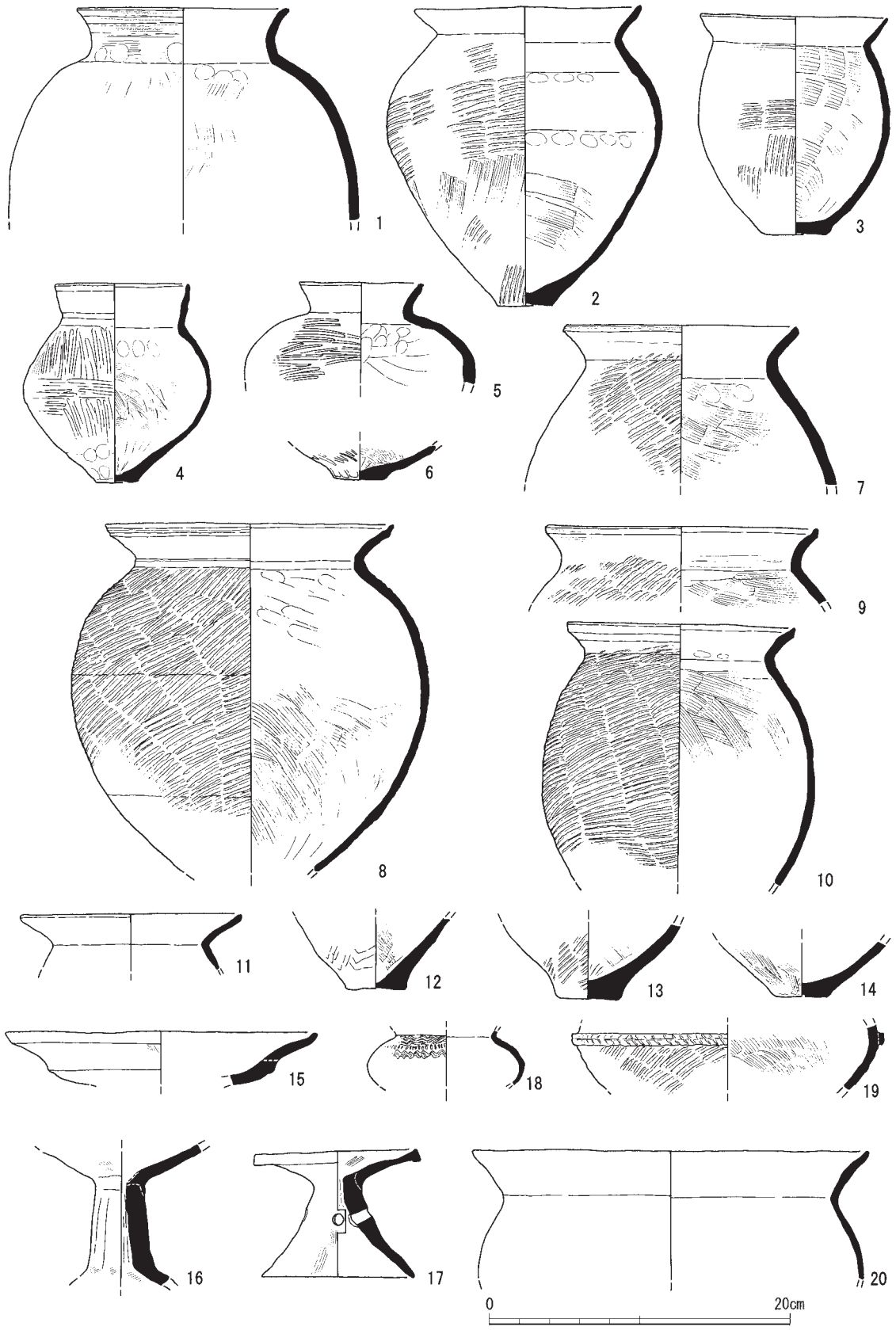
（竹井治雄）

④上内田地区出土遺物（第23～28図）

a. 右京第901次調査

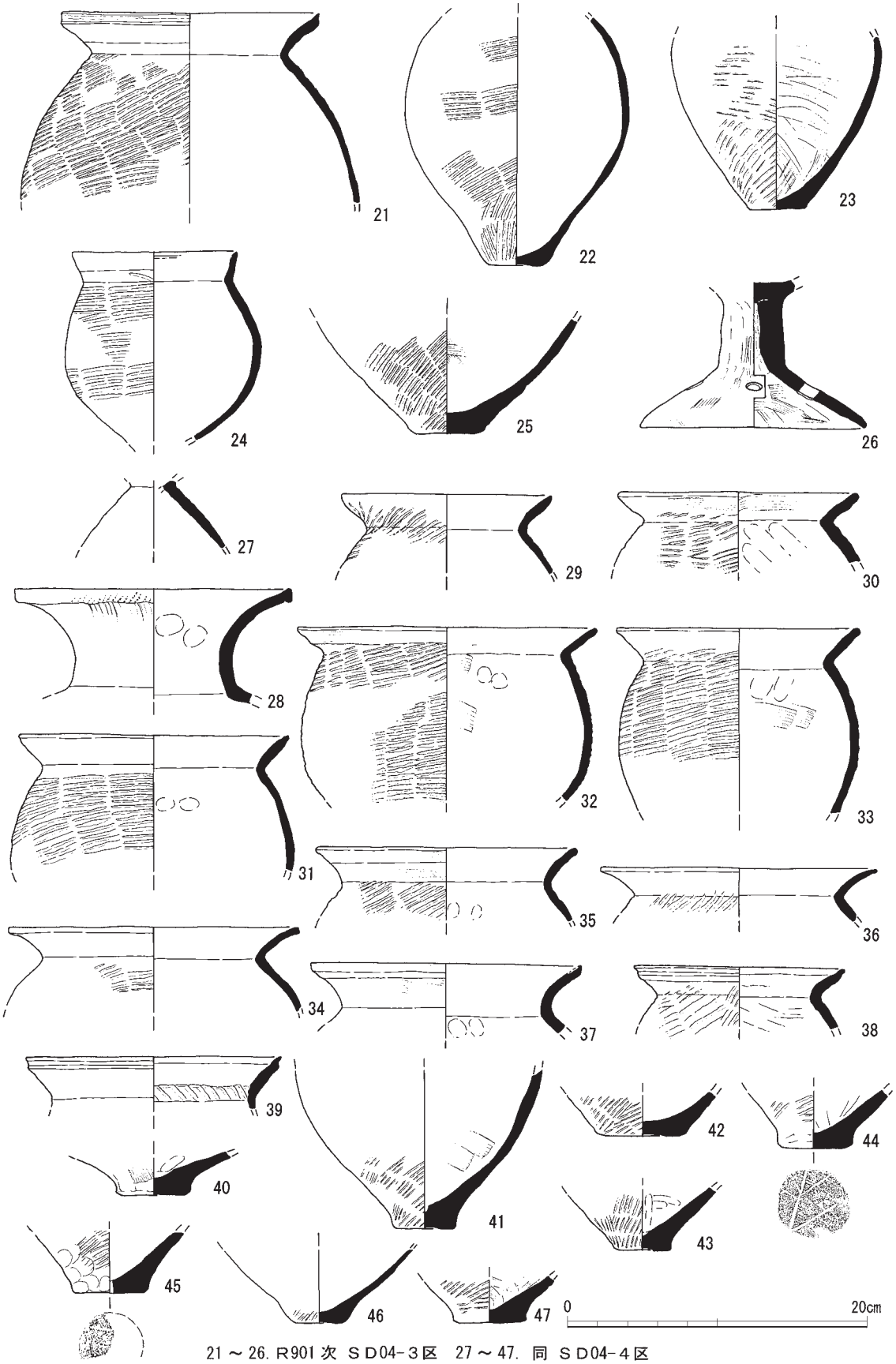
1～98は、右京第901次調査（R 901次）で出土した。1～75・76・78～80は、ＳＤ04の出土遺物である。地区別に取り上げているため、地区ごとに報告する。1～3（第23図）は、ＳＤ04－1区から出土した。1は、口縁部が大きくが外反し、肩部が張る特徴をもつ広口壺である。外面は摩耗しているが、一部に粗いハケが認められる。2は、弥生系の外面タタキ成形による甕である。4～17（第23図）は、ＳＤ04－2区から出土した。4は、外面に丁寧なミガキを施す小形の短頸直口壺で、5は肩部が大きく張る短頸壺である。7～10は、外面タタキ成形による弥生系甕である。口縁端部を丸くおさめるもの（7）と、端部外面に面をなすもの（8～10）がある。8は、端面にハケ条工具による3～4条の条線が確認できる。内面はいずれもハケ調整を基調とし、一部にナデが認められる。11は、著しく摩耗しているが、角閃石を多く含むいわゆる生駒西麓産の胎土をもつ河内産の庄内式甕である。15は、二重口縁壺の口縁部である。16は、中空の器台である。17は、受部で大きく屈曲する東海系の小形器台である。18～20（第23図）、21～26（第24図）は、ＳＤ04－3区から出土した。18は、波状文と刺突文で加飾する小形壺である。19は、受口状口縁鉢の体部とみられる。突帯下半の外面はタタキ成形により、近江系と畿内系との折衷的要素をもつ。21～25は、外面は弥生系のタタキ成形による甕である。21は口縁端部に面をもつ。24は、小形品で口縁端部を丸くおさめる。26は、裾部が屈曲して開く高杯脚部である。4方向に透かしを穿つ。27～47(第24図)、48～57は(第25図)、ＳＤ04－4区から出土した。27は、小形器台の脚部である。28の広口壺は、口縁部形態と櫛状工具による列点文など、文様に近江以東の地域の特色がみられる。29～39は、外面にタタキ成形を施す甕である。口縁端部を丸くおさめるもの(29～34)と、端部を外方に外反させるもの(35・36)、端部外面に面をもつもの（37～39）がある。また29・30・32・33は、口縁外面までタタキ痕を明瞭に残す。38は、端部外面に沈線をもち、内面にケズリを施し、摂津～播磨の土器の特色をもつ。39は、頸部内面の剥離部分に体部外面上端のタタキ成形痕が圧痕としてみられる。41は、外面にタタキ成形、内面に板状工具によるナデを施す。42～47は、弥生系甕の底部である。48は短口縁の甕で、51・52は壺ないしは甕の底部である。49は、有段口縁の北近畿系甕である。内面は摩耗が著しいが、一部にケズリが認められる。53の底部は、底部外面に粘土の付着が認められる。54の鉢は、端部に面をなし、内外面に丁寧なミガキが施される。55は椀状高杯の杯部である。56・57は、低脚の椀状高杯の脚部である。58～62（第25図）は、ＳＤ04－5区から出土した。58は、大きく外方に外反する壺の口縁部である。60の甕は、肥厚する端部を特徴とする。61は、窪み底をなす甑の底部とみられる。62の弥生系甕は、外面をタタキ成形し、内面をハケのちナデ調整する。外面には、口縁端部と肩部から底部にかけて炭化物が付着する。以上の土器群の編年的な位置づけは、久御山町佐山遺跡編年で示した佐山Ⅱ型式前半に帰属し、古墳時代初頭に位置づけられる。

63～71・73～75（第25図）は、ＳＤ04－2～4区から出土した須恵器である。63は、無



1～3．R901 次 ＳＤ04-１区　4～17. 同 ＳＤ04-２区　18～20. 同 ＳＤ04-３区

第 23 図　上内田地区出土遺物実測図（１）



21 ～ 26. R901 次　ＳＤ04-３区　27 ～ 47. 同　ＳＤ04-４区

第 24 図　上内田地区出土遺物実測図（２）

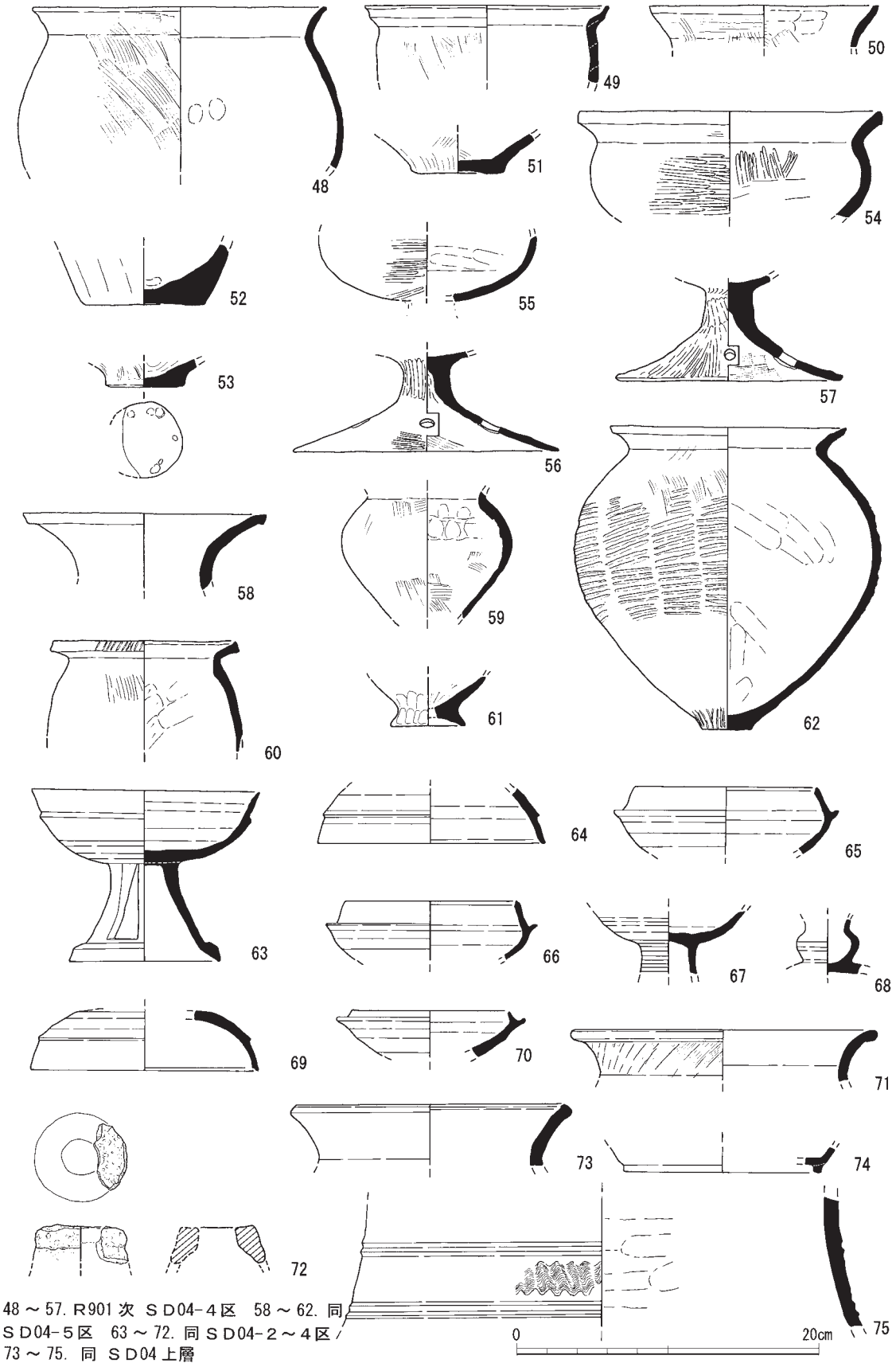
蓋高杯である。脚部には、四方に透かしを穿つ。64 は須恵器杯蓋である。口縁端部の内面に明瞭な段は認められない。65・66 は、須恵器杯身である。いずれも外面は丁寧なヘラケズリが施され。67 は、須恵器高杯である。脚部にカキ目が施される。68 は、装飾付須恵器の器台の一部とみられる。いわゆる子持ち器台の壺を模した部分と推定される。69 は、須恵器蓋である。外面には丁寧なヘラケズリを施し、口縁端部内面に段をなす。70 の須恵器杯身は、口縁部の立ち上がりは短く、口径は矮小化している。71 は須恵器壺の口縁部である。玉縁状の口縁端部をなす。72 は、フイゴの羽口の一部である。一部に表面が気泡状となったガラス質の鉱滓が付着する。以上、ＳＲ 04 出土の古墳時代の出土土器の帰属時期は、陶邑ＴＫ 47 型式～ＭＴ 15 型式（63）、陶邑ＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式（65・66）、陶邑ＴＫ 209 型式（70）と時期幅がある。

73 ～ 75 は、ＳＲ 04 上層から出土した土器である。73 は、古墳時代後期の須恵器壺の口縁部で、75 の須恵器は、器台脚部である。74 は須恵器杯Ｂで、長岡京期に帰属する。

76・77（第 26 図）は、板状を呈する比熱痕跡のみられる土製品である。中央部がやや薄く、端部にむけて肥厚する。76 は、器面の片面に荒いハケやケズリがわずかに観察され、筋状の圧痕が認められる。76 はＳＤ 04 から、77 は南部包含層中から出土し、やや離れた地点で出土している。78・79 は、ＳＤ 04 下層の断ち割り調査で出土した縄文土器深鉢の口縁部である。上端からやや下がった位置に刻み目突帯を付し、縄文晩期の船橋式の範疇で捉えられる。78 はいわゆる生駒西麓産の胎土をもつ。80 は、近江系壺の肩部とみられる。81 は、ＳＤ 04 の上面精査中に出土した瓦器椀である。82・83（第 26 図）は、ＳＤ 01 － 2 区から出土した。82 は、外反する「く」の字口縁をなし、外面に平行タタキ、内面に同心円文タタキを施す。83 は、脚部に横方向のミガキを施す高杯である。84 は、ＳＤ 02 から出土した。口縁外面には、粘土の接合痕がみとめられ、ほぼ平行に指頭圧痕が施されている。85 ～ 98（第 26 図）は、いずれも包含層中から出土した。85 は、頸部から体部への変化点に刻みを施す。86 は、口縁部端面に面をなし、端部をわずかにつまみあげる特徴をもつ。外面は著しく摩耗しているが、わずかにタタキ成形の痕跡を残す。85・86 ともに古墳時代初頭とみられる。87 は、内外面をハケ調整する古墳時代後期の土師器甕である。89 は口径が矮小化したつき杯蓋である。天井部は未調整で、陶邑ＴＫ 209 型式に相当する。また 90 の杯蓋は端部内面に明瞭な段をなすもので、おおよそ陶邑ＭＴ 15 型式に相当する。91 は、大形の須恵器器台脚部である。90 の須恵器杯蓋とほぼ同時期に帰属するものであろう。92･93 は緑釉陶器である。底部外面は露胎で、貼り付け高台である。近江産とみられる。95 は、７世紀後半の須恵器杯で、96 は８世紀前半の須恵器皿とみられる。94 は、削り出し高台の京都産緑釉陶器である。97 の羽釜は胎土に多量の石英・長石を含む。98 は、「皇宋通寶」で、鋳上がりは良好である。初鋳年 1039 年の北宋銭である。輪径 24.6㎜、輪厚 0.95㎜を測る。

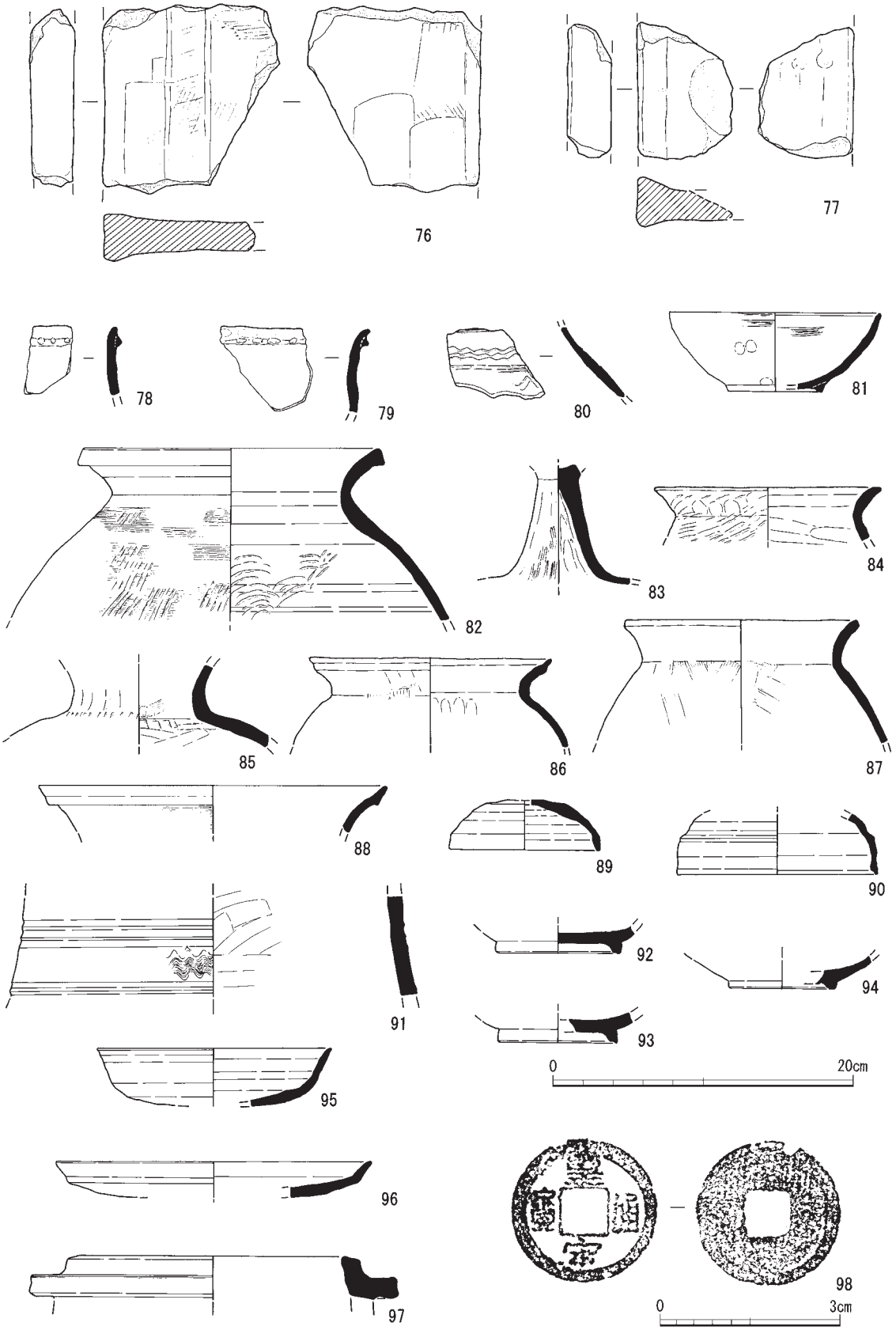
b. 右京第 902 次・928 次調査

99 ～ 133 は、右京第 902 次・第 928 次調査で出土した。99 ～ 105（第 27 図）はＳＨ２出土遺物である。99 ～ 102 は、右京第 902 次調査（試掘）で、ＳＨ 02 上層から出土した。当初、落ち込みとして認識されていた段階のものである。103 ～ 105 は、右京第 928 次調査時に床面から出



48 ～ 57. R901 次　ＳＤ04-４区　58 ～ 62. 同
ＳＤ04-５区　63 ～ 72. 同ＳＤ04-２～４区
73 ～ 75. 同　ＳＤ04 上層

第 25 図　上内田地区出土遺物実測図（３）



76. R901 次 ＳＤ04　78 ～ 80. 同 ＳＤ04 断割　82・83. 同 ＳＤ01−２区　84. 同 ＳＤ02　77・81・85 ～ 98. 同 包含層

第 26 図　上内田地区出土遺物実測図（４）

土した。103･104の甕底部は､底部外面に指頭圧痕を連続して施し､中央を薄く仕上げる。105は、床面の高床部から出土した器台脚部である。４方向に透かしをもつ。ＳＨ２出土遺物は、いずれも細片で、時期を決定づける資料に乏しいが、102の高杯は小形化し、脚柱部が中実化することから、おおよそ佐山Ⅱ型式前半にあり、庄内併行期古相の古墳時代初頭に帰属する。

106～111（第27図）は、右京第928次調査のＳＫ20から出土した土器および砥石である。106・109・110は、弥生系甕で、口縁端部を丸くおさめる「く」の字口縁をなす。外面は、タタキ調整、内面はハケ調整を施す。法量は、大・中・小と明瞭に分かれる。口縁部は、小形品はやや内湾気味に立ちあがる。112の砥石は砂岩製で、一面に砥面をみとめる。ＳＫ20出土土器の帰属時期は、甕の法量分化に新しい要素をみるものの、いずれも肩部は張らず、口径に比して頸部径が大きく、前述したＳＤ04出土土器に先行する資料と言える。おおよそ佐山Ⅰ－３型式～Ⅱ－１型式に対応し、時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭と推定される。

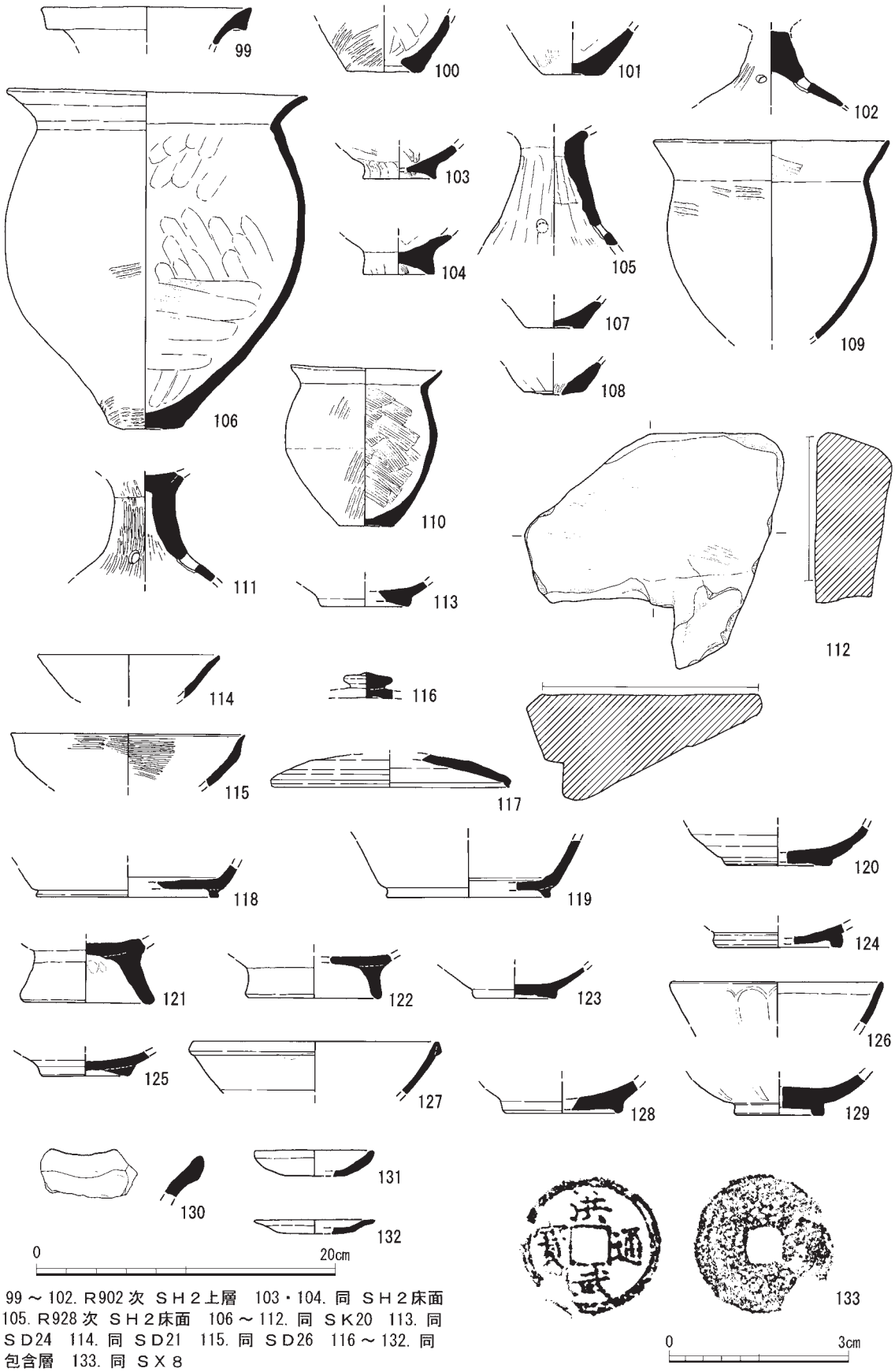
113は、右京第928次調査ＳＰ24から出土した京都産緑釉陶器の底部である。削り出し高台をなす。114はＳＤ21から出土した白磁椀の口縁部である。115は、素掘り溝群の一つであるＳＤ26から出土した瓦器椀で、おおよそ12世紀前葉に帰属する資料である。133は、右京第928次調査ＳＸ８から出土した「洪武通寶」である。初鋳年1368年の明銭である。鋳上がりは良好である。輪径は23.4㎜、輪厚は1.35㎜を測る。

116～139（第27・28図）は、いずれも右京第928次包含層中から出土した。116～126・129は、北東部の包含層から出土した土器である。117は須恵器杯蓋の一部である。118・119は高台をもつ須恵器杯Ｂで、118は貼り付け高台である。おおよそ長岡京期に帰属する。121・122は土師器杯の脚部で11世紀前半の資料である。120・123は、削り出し高台をもつ京都産の緑釉陶器である。125は須恵器壺底部で輪高台をなす。126は、蓮弁の陰刻をもつ龍泉窯の青磁椀の一部である。12世紀前半の資料とみられる。127・128・130～132は、右京第928次中央部包含層中から出土した。127・128は、白磁椀の一部である。127は玉縁口縁をなし、白磁Ⅳ類に属する。時期は12世紀後半に位置づけられる。129は、龍泉窯青磁椀の底部である。130は、魚住産とみられる片口鉢の一部である。12世紀前半の資料である。131・132は土師器小皿で、11世紀前葉の資料である。134の須恵器は、壺などの把手の一部とみられる。側面に、獣脚などにみられる線刻状の刻みが施される。135は、12世紀後半の羽釜である。138は上層包含層から出土した瀬戸･美濃産の天目茶碗で、16世紀後葉～末の資料である。136は京都産緑釉陶器である。137は、白磁Ⅷ類である。139の軒平瓦は、半截花文を交互に配した段顎の軒平瓦である。おおよそ平安時代後期に位置づけられる資料とみられる。

140～144（第28図）は、右京第902次調査の包含層中から出土した。140・141は、須恵器杯Ｂである。142・143は、いずれも白磁皿である。143は、白磁ＸＩ類で、12世紀後半に位置づけられる。144は東海系の須恵器鉢で、口縁部外面に段をなす。13世紀頃の所産である。

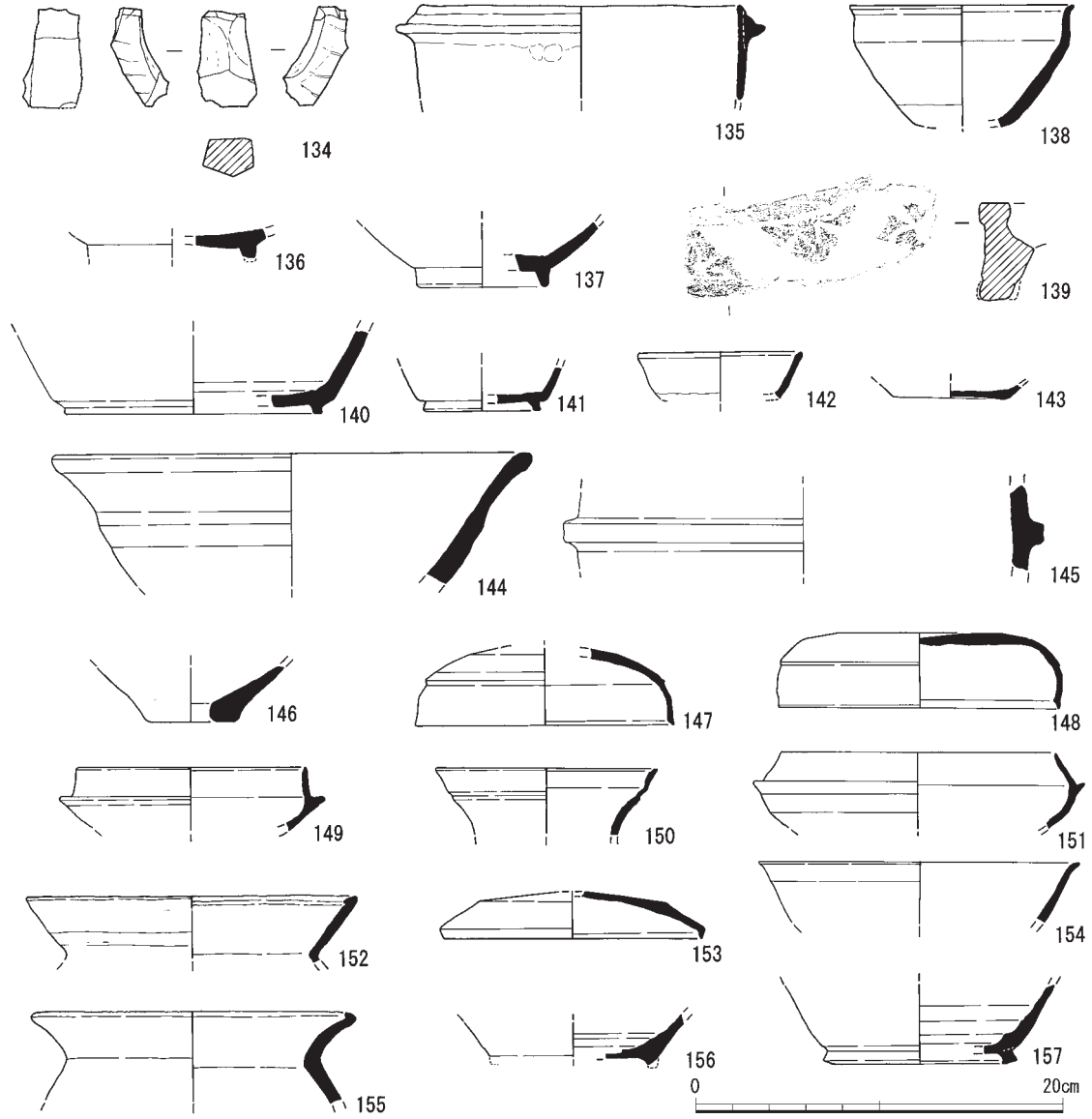
ｃ．右京第926次調査

145～157（第28図）は、右京第926次調査１トレンチＳＤ１から出土した。145は、円筒埴



99 ～ 102. R902 次　ＳＨ２上層　103・104. 同　ＳＨ２床面　105. R928 次　ＳＨ２床面　106 ～ 112. 同　ＳＫ20　113. 同　ＳＤ24　114. 同　ＳＤ21　115. 同　ＳＤ26　116 ～ 132. 同　包含層　133. 同　ＳＸ８

第 27 図　上内田地区出土遺物実測図（５）



134 ～ 139. R928 次 包含層　140 ～ 144. R902 次 包含層　145. R926 次 1 トレンチＳＤ01　146 ～ 150. 同 1 トレンチＳＫ05　151・152. 同 1 トレンチ包含層

第 28 図　上内田地区出土遺物実測図（６）

輪の一部で、直径約 25cm 前後に復原できる。断面台形状のタガの突出はやや低く、器壁は摩耗し、調整は確認できない。直径が小さく、形象埴輪の可能性もある。川西編年Ⅲ期後半～Ⅳ期に位置づけられる。146 ～ 150 は、同ＳＫ 05 から出土した。147・148 の須恵器杯蓋は外面に明瞭な稜をなし、口縁端部内面にも段を残す。149 の杯身の立ち上がりは高く、口縁端部内面にわずかに段を残す。以上、須恵器はいずれも陶邑ＭＴ 15 型式新相～ＴＫ 10 型式古相に相当し、時期は６世紀前半とみられる。152 は、１トレンチから出土した布留式甕である。布留式中段階に位置づけられる。153 ～ 155 は、２トレンチＳＤ 08 から出土した。153 は須恵器杯Ｂ蓋である。154 は、白磁椀Ｖ類の口縁部である。155 の土師器甕は口縁部端部が肥厚するもので、８世紀前半の資料とみられる。156 はＳＤ 14 から、157 はＳＸ 04 から出土した須恵器壷の底部で、８世紀後半～９世紀前葉に属する。（高野陽子）

（4）友岡地区（7ANNKR－4地区）

調査地は長岡京市友岡4丁目地内に所在し、長岡京跡右京八条三坊六町にあたる。現況は標高18ｍの水田である。調査は、幅8ｍ、長さ25ｍの試掘トレンチを設定し、調査面積は200㎡である。調査の結果、井戸、土坑、地境（水田）、素掘り溝を検出した。

井戸ＳＥ01　直径4ｍの円形掘形を呈し、深さ2ｍを測る。井戸側は断面筒状を呈し、挙大以上の長円礫を小口積みする井戸である。底部は太さ20cmの角材を六角形の井桁状に組み、枕木として石積みの基礎とする。堆積土は上層では黒色粘質土、下層では灰色泥砂である。遺物は土師器、近世陶磁器等が出土しているが、最近まで野井戸として使用されていたとみられる。

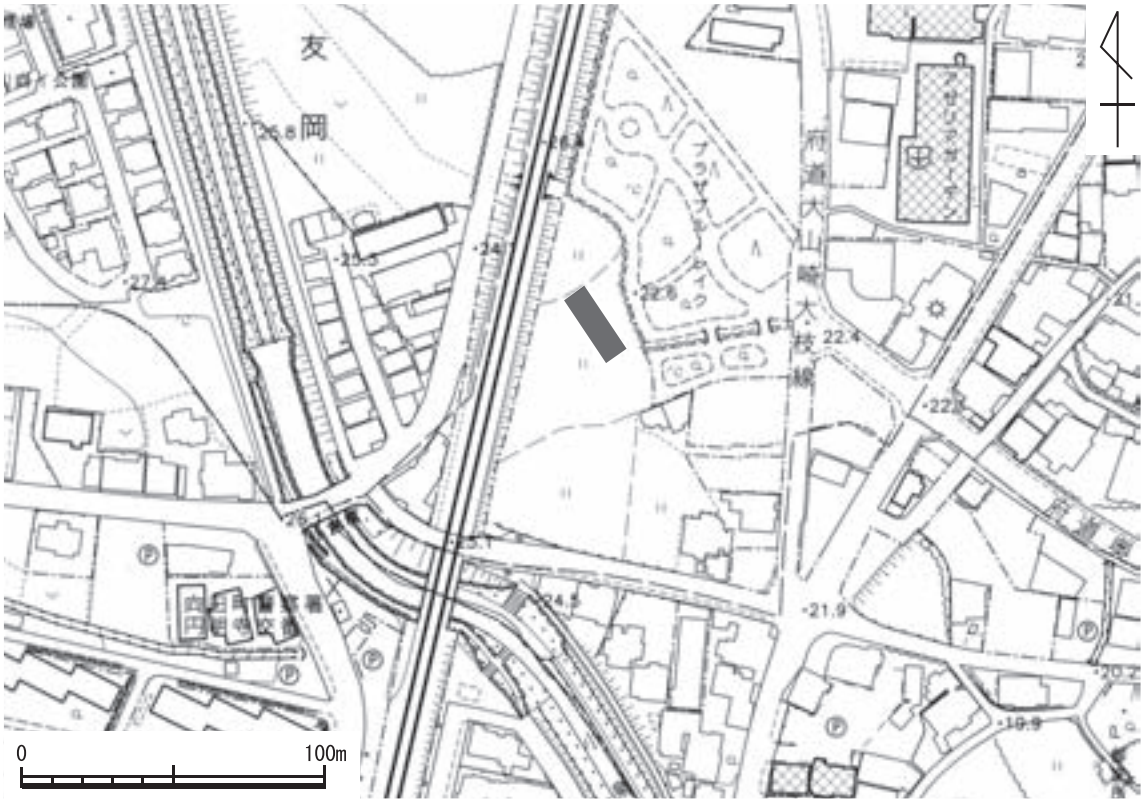
土坑ＳＸ02　トレンチ中央部で東西5ｍ、南北14ｍ、深さ0.2ｍを測り、堆積土は単一の灰黄色砂層である。底面は平坦、固く絞まっており、人為的な造作が考えられる。出土遺物はなかったが、井戸ＳＥ01より古いが、近世に属するものと思われる。土坑ＳＸ02の遺構の性格は何らかの基礎部分にあたるものと思われるが判然としない。

溝ＳＤ03　水田・畑地に伴う素掘り溝である。時期は近世に属する。

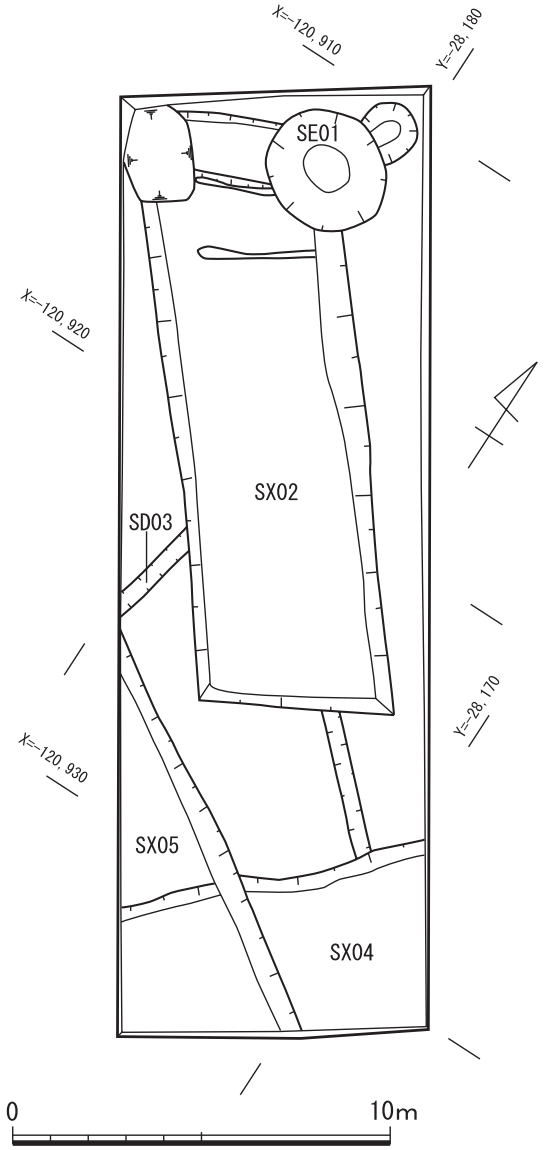
落ち込みＳＸ05　西北西方向線を境として西南西側に落ち込む遺構である。堆積土は主に黄灰色粘質土、砂質土である。この土質は水田、畑地跡と思われる。出土遺物はなかった。

落ち込みＳＸ04　ＳＸ05の下層から検出した北東方向線を境にして南東側に落ち込む。堆積土は黄褐色砂層、砂質土、砂礫層の互層、自然堆積が認められた。出土遺物はなかった。堆積状況から自然流路跡であり、ＳＸ05は水田等の土地改良に伴う造成、盛土の跡と思われる。

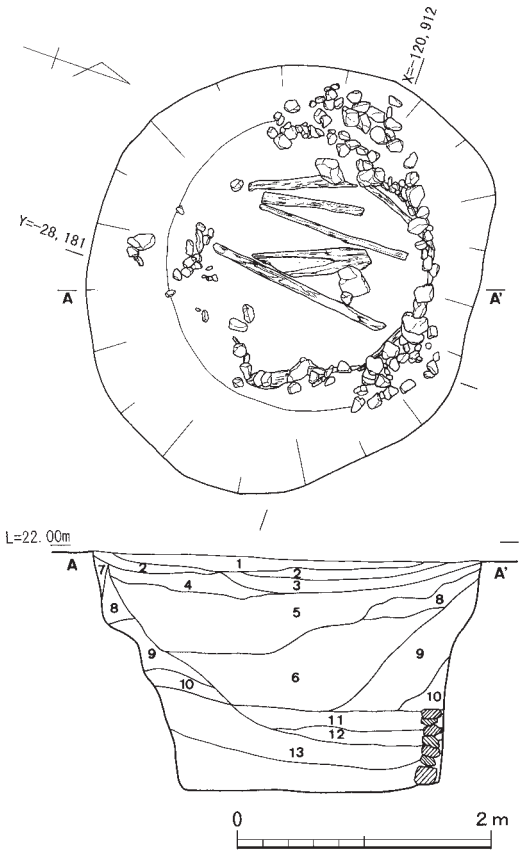
調査の結果、中世以前に遡る遺構、遺物等は確認されなかった。　（竹井治雄）



第29図　右京第926次友岡地区調査地位置図

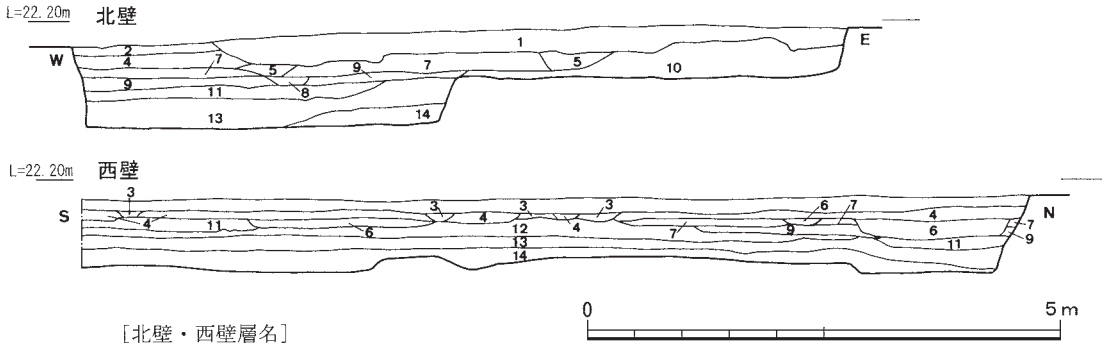


第 30 図　右京第 926 次友岡地区遺構平面図



1. 青灰色粘質土（10ＢＧ 5/1）
2. 淡茶灰色シルト混じり中砂（5Y 5/4）
3. 淡灰色粘質土（5Y 6/1）
4. 淡灰色砂混じり粘質土（5Y 6/1）
5. 褐灰色シルト混じり砂礫（10ＹＲ 5/1）
6. 暗褐灰色シルト混じり砂礫（10ＹＲ 4/1）
7. 灰黄色粘砂質土（10ＹＲ 6/6）
8. 灰黄色礫混じり粘砂質土（10ＹＲ 6/6）
9. 黒褐色粘質土（10ＹＲ 3/1）
10. 灰黄色砂礫混じり粘質土（10ＹＲ 7/4）
11. 漆喰
12. 淡灰色礫混じり粘質土（5Y 5/1）
13. 淡灰色粘質土と赤褐色粘質土の混合層（5Y 5/1、2.5Y 4/6）

第 31 図　井戸ＳＥ 01 実測図



［北壁・西壁層名］

1. 黒灰色粘質土
2. 暗灰色粘質土
3. 淡灰色シルト
4. 暗青灰色粘質土
5. 黄灰色粘砂質土
6. 淡灰黄色砂礫
7. 淡褐灰色粘砂質土
8. 淡褐灰色シルト
9. 褐灰色粘砂質土
10. 明黄褐色砂礫
11. 白黄色砂質土
12. 黄褐色砂礫
13. 黒褐色砂礫
14. 灰黄色砂礫

第 32 図　右京第 926 次友岡地区調査区土層断面図

（5）調子地区

調査地は長岡京市調子八角に所在し、長岡京跡右京九条三坊一・二町にあたる。

①長岡京跡右京第 902 次調査（7 ANRHK － 3 地区）

調査地の現況は標高 17 m前後の住宅跡であり、3 か所に試掘トレンチを設定した。調査面積は、150㎡である。調査の結果、流路跡 2 条、旧小泉川の河道、中世から現代に至る水田・畑地の堆積状況等を確認した。

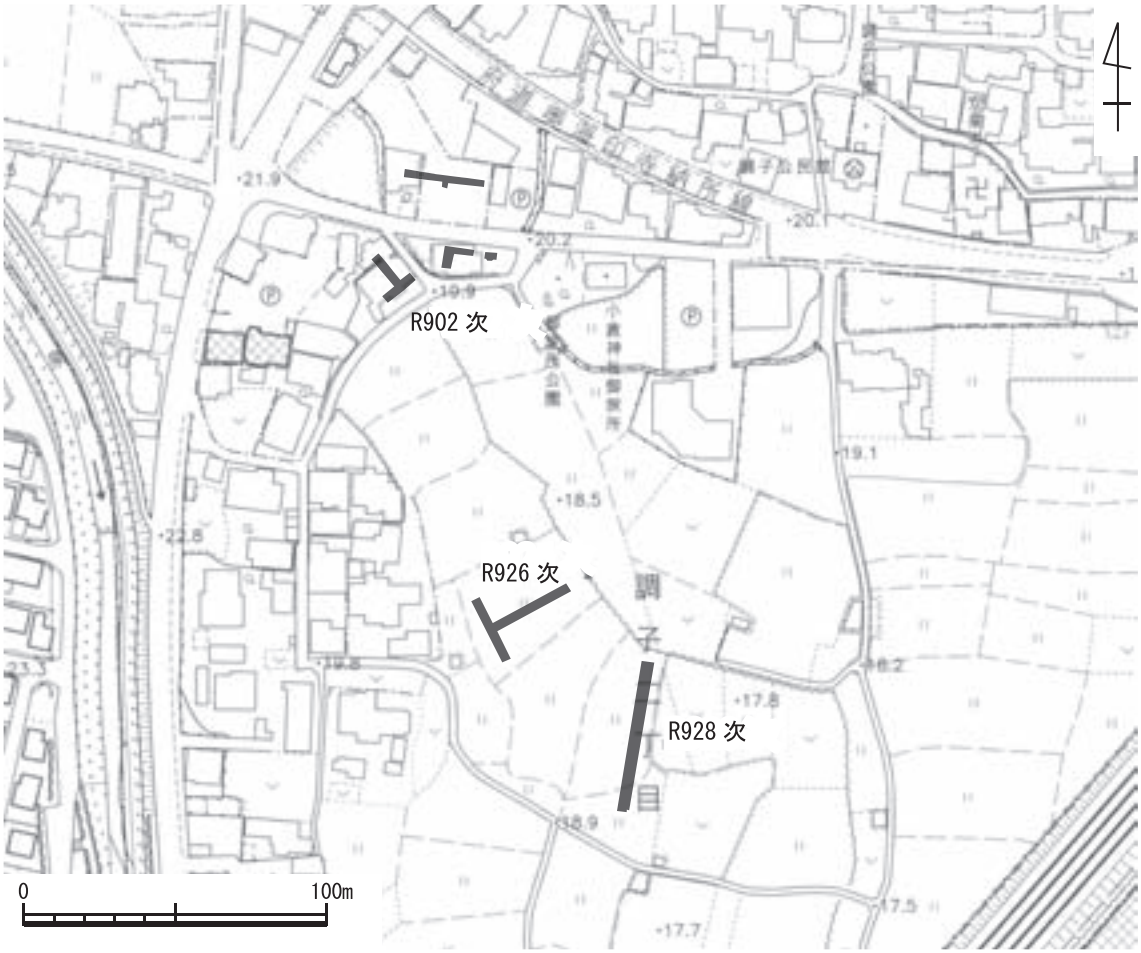
流路ＳＲ 01　1・2 トレンチにわたって検出され、幅 5 m、深さ 0.5 mを測り、北北西から南南東方向に流れる。断面形状は皿状を呈し、青灰色粘質土、砂粒が堆積する。遺物は土師器、近世陶磁器が出土した。

流路ＳＲ 02　おおむね北から南方向に流れる自然流路である。時期は中世に属し、ａ～ｃ期にわかれる。小泉川旧河道の最終末の流路跡である。

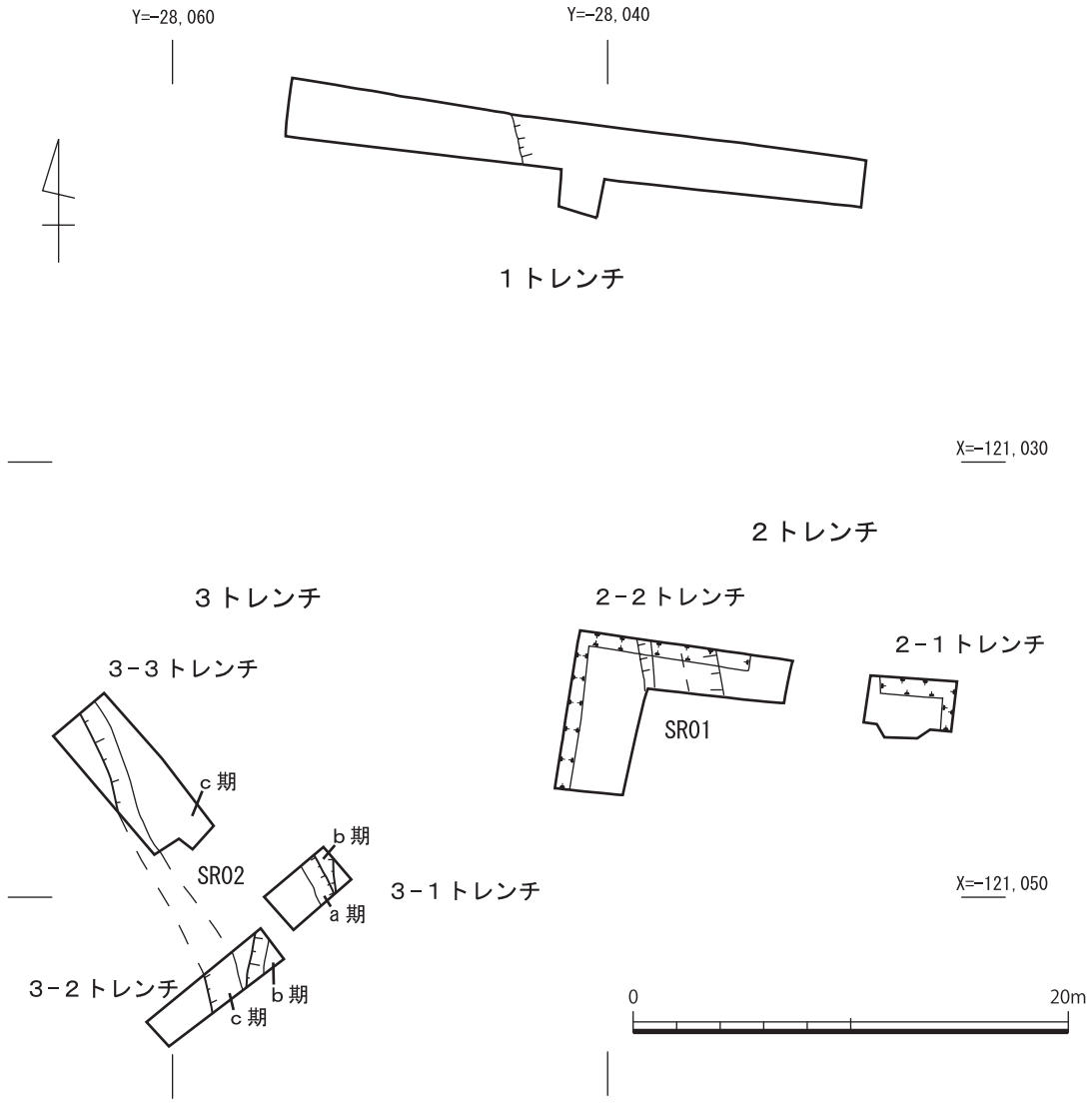
ａ期は幅 2 m、深さ 0.4 mを測り、北北東から南南西方向に流れる。断面は椀状を呈し、堆積土は淡緑灰色砂質土である。遺物は土師器、瓦器椀が出土した。

ｂ期は幅 2 m、深さ 0.7 mを測り、北から南方向に流れる。断面形状は皿状を呈し、灰黄色粘質土、砂粒が堆積する。遺物は土師器、瓦器椀が出土した。

ｃ期は幅 5 m、深さ 0.9 mを測り、北北西から南南東方向に流れる。断面形状は皿状を呈し、



第 33 図　調子地区調査地位置図



第 34 図　右京第 902 次調子地区遺構平面図

灰黄色粘質土、砂粒が堆積する。遺物は土師器、瓦器椀、須恵器が出土した。

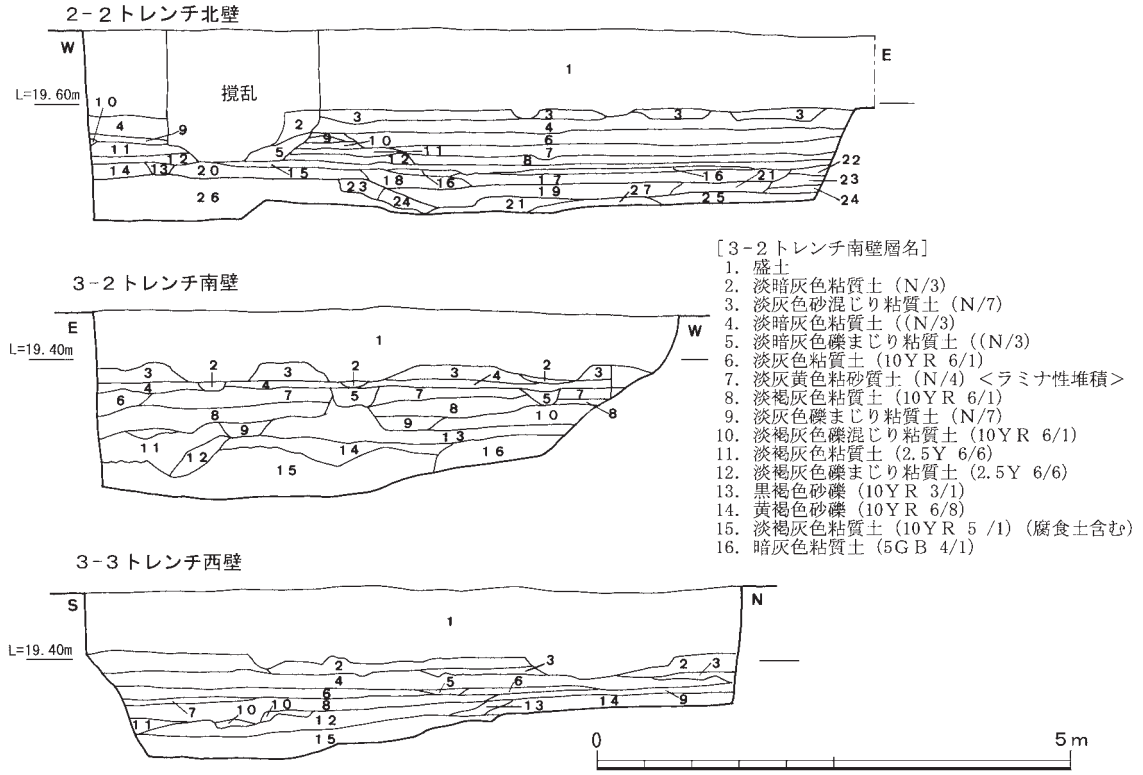
流路跡上層の水田・畑地跡は耕作土・床土以下、８層ほど確認できた。水田面とみられる層位の上面に砂層・砂粒が堆積し、氾濫の痕跡である洪水砂がみられた。時期は、中世、近世、近代の各時代で確認できた。（竹井治雄）

②**長岡京跡右京第 926 次調査**（７ANRHK － 4 地区）

調査地は京都府長岡京市調子２丁目に所在する。調査地の現況は標高 15 ｍの水田である。調査は、幅３ｍ、長さ 50 ｍのＴ字形のトレンチを設定した。調査面積は 150㎡である。調査の結果、畦畔の痕跡（地境）、素掘り溝、流路跡等を検出した。

溝ＳＤ 04　幅 0.6 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る北東方向の素掘り溝である。水田を区画する地境溝である。時期は近世に属する。

落ち込みＳＸ 06　北西方向線を境にして南西側に比高差 0.3 ｍを測る自然の落ち込み状遺構（旧小泉川の河道の窪地）である。堆積土は灰黄色粘質土、砂質土、粘質土であり、水田を拡張



［3－2トレンチ南壁層名］
1. 盛土
2. 淡暗灰色粘質土（N/3）
3. 淡灰色砂混じり粘質土（N/7）
4. 淡暗灰色粘質土（(N/3）
5. 淡暗灰色礫まじり粘質土（(N/3）
6. 淡灰色粘質土（10YR 6/1）
7. 淡灰黄色粘砂質土（N/4）＜ラミナ性堆積＞
8. 淡褐灰色粘質土（10YR 6/1）
9. 淡灰色礫まじり粘質土（N/7）
10. 淡褐灰色礫混じり粘質土（10YR 6/1）
11. 淡褐灰色粘質土（2.5Y 6/6）
12. 淡褐灰色礫まじり粘質土（2.5Y 6/6）
13. 黒褐色砂礫（10YR 3/1）
14. 黄褐色砂礫（10YR 6/8）
15. 淡褐灰色粘質土（10YR 5 /1）（腐食土含む）
16. 暗灰色粘質土（5GB 4/1）

［2－2トレンチ北壁層名］
1. 盛土
2. 淡暗灰色粘質土（N/3）
3. 淡褐灰色粘質土（7.5Y 5/1）
4. 淡褐灰色礫混じり粘質土（7.5Y 5/1）
5. 淡褐灰粘質土（7.5Y 5/1）
6. 淡暗褐灰礫混じり粘質土
7. 暗灰色砂礫混じり質土（N/4）
8. 灰色砂礫（N/5）
9. 淡緑灰色礫混じり粘質土（7.5GY 5/1）
10. 淡灰色粘質土（N/7）
11. 暗黒灰色粘質土（N2/）
12. 11層と9層の混合土
13. 淡灰色粘質土（10YR 6/1）
14. 淡黒灰砂混じり粘質土（N2/）
15. 淡灰色細砂（5Y 7/1）
16. 淡褐灰色粘質土（7.5Y 5/1）
17. 淡暗灰粘質土（2.5Y 6/1）
18. 淡黄灰色砂混じり粘質土（10YR 6/2）
19. 淡暗灰色粘質土（2.5Y 6/1）
20. 淡褐灰色粘質土（7.5Y 6/1）
21. 淡褐灰色礫混じり粘質土（7.5Y 5/1）
22. 淡緑灰色粗砂礫（7.5Y 6/1）
23. 淡黄灰色粘砂質土（2.5Y 6/3）
24. 淡黄灰色砂質土（2.5Y 7/2）
25. 明黄灰褐色粗砂（10YR 6/3）
26. 淡黒灰色砂混じり粘質土（2.5Y 2/1）
27. 暗褐灰色粗砂（10YR 5/1）

［3－3トレンチ西壁層名］
1. 盛土
2. 淡暗灰色粘質土（N/3）
3. 淡灰色粘質土（10YR 6/1）
4. 淡灰色粘質土（10YR 5/1）
5. 淡灰色礫混じり粘質土（10YR 5/1）
6. 淡褐灰色粘砂質土（2.5Y 5/1）
7. 灰色砂混じり粘質土（N6/）
8. 灰褐色礫混じり粗砂（5YR 5/1）
9. 淡褐灰色粘砂質土（2.5Y 5/1）
10. 灰色シルト混じり砂礫（10YR 5/1）
11. 黄褐灰色砂礫（10YR 6/8）
12. 灰黄色粘質土（2.5Y 6/6）
13. 黄褐灰色粘質土（10YR 6/8）
14. 明黄白色粗砂（10YR 7/8）
15. 黒褐色砂礫（10YR 2/2）

第35図　右京第902次調子地区断面図

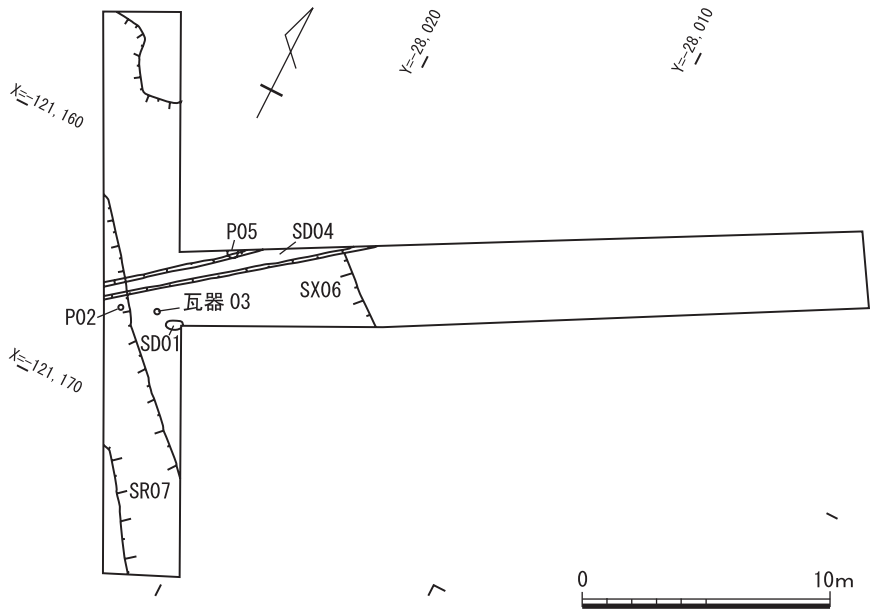
するために人為的に埋められたものと推察される。水田跡は、３時期確認でき、時期は瓦器椀、土師器等が出土することから中世に属する。

流路ＳＲ07　ＳＸ06の下層から検出した。幅2.0ｍ、深さ0.5ｍを測り、断面Ｕ字形を呈する。堆積土は砂層、小砂礫、粘土層が互層をなし、流水の痕跡が認められる。小泉川の旧河道の最終の痕跡を示し、自然流路である。時期は平安時代後期に属するものである。

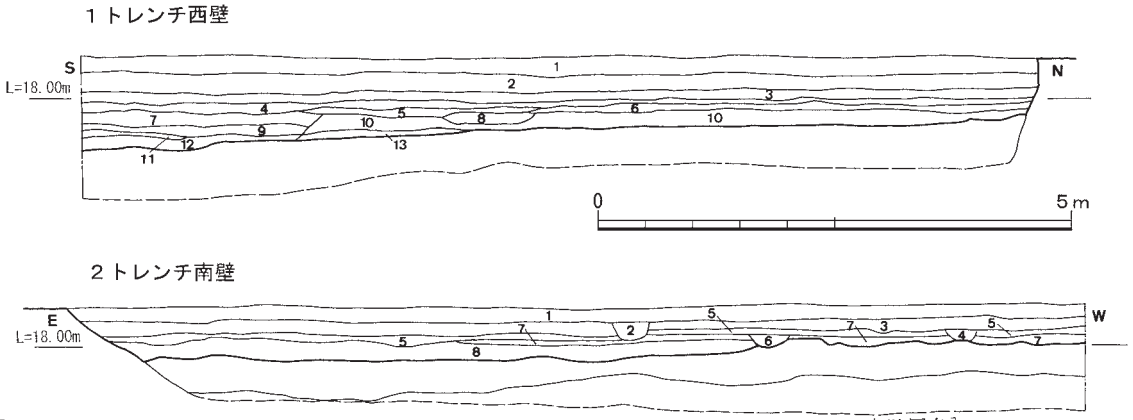
溝ＳＤ01　落ち込みＳＸ02の下層から検出した水田あるいは畑地に伴う素掘り溝である。幅0.3ｍ、深さ0.2ｍを測り、東西方向の溝である。遺物は、ほぼ完全なかたちの瓦器椀がまとまって出土した。

小結

調査の結果、長岡京跡に関連する遺構、遺物等は確認されなかった。



第36図　右京第926次調子地区調査遺構平面図



［1トレンチ西壁層名］
1. 暗黒色粘質土（N/2）　＜耕作土＞
2. 淡灰色シルト混じり細砂（5Y 5/1）
3. 暗青灰色砂混じり粘質土（10 3G 4/1）
4. 明黄褐色粘質土（2.5Y 6/6）
5. 4と6の混合層（10YR 7/6･10Y 4/1）
6. 明黄褐色礫混じり粘質土
7. 褐灰色礫混じり粘砂質土（10YR 4/1）
8. 暗褐灰色砂（10Y 4/1）
9. 茶褐色粘質土（7.5Y 4/4）
10. 明紫灰色粘質土（5RP 7/1）
11. 暗褐色粘砂質土（7.5Y 3/4）
12. 淡暗茶褐色砂粒（7.5Y 4/3）
13. 赤褐色砂礫（10YR 4/4）

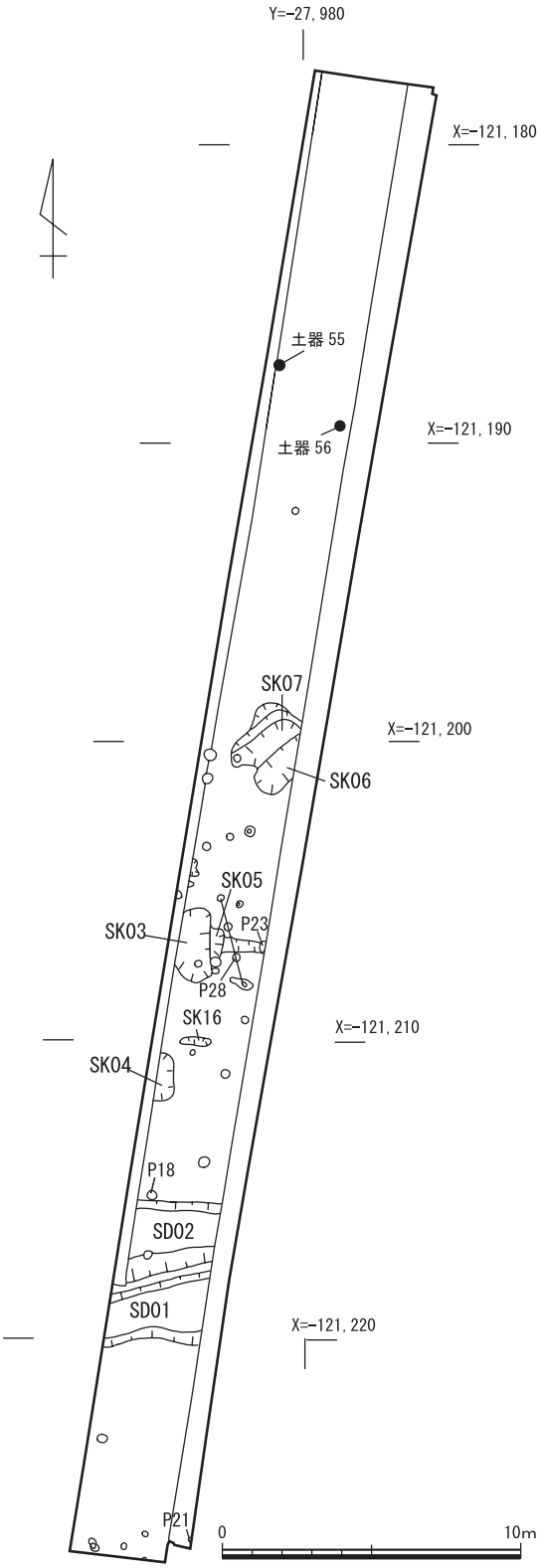
［2トレンチ南壁層名］
1. 暗黒色シルト混じり粘質土（N/2）
2. 灰色粘性土（5Y 6/1）
3. 淡灰色シルト混じり細砂（5Y 5/1）
4. 5と7の混合層＜素掘り溝埋土＞
5. 暗青灰色粘質土（10 3G 4/1）
6. 7と9の混合層＜素掘り溝埋土＞
7. 淡灰色砂礫
8. 赤褐色砂礫

第37図　右京第926次調子地区トレンチ断面図

溝ＳＤ01・04は水田に伴う素掘り溝であり、中世から現代まで洪水に遭いながらも、継続して営まれたものである。

流路ＳＲ07は旧小泉川の河道の終末期の痕跡である。落ち込みＳＸ06はこの地に水田を営むために、中世から近世にわたり、造成・盛土を行ったものと推定される。

旧小泉川の河道の範囲は今回のトレンチ内では確認できなかった。時期については流路ＳＲ07とほぼ同時期とみられる。　（竹井治雄）



第38図　右京第928次調子地区遺構平面図

③長岡京跡右京第928次調査（7ANRHK－5地区）

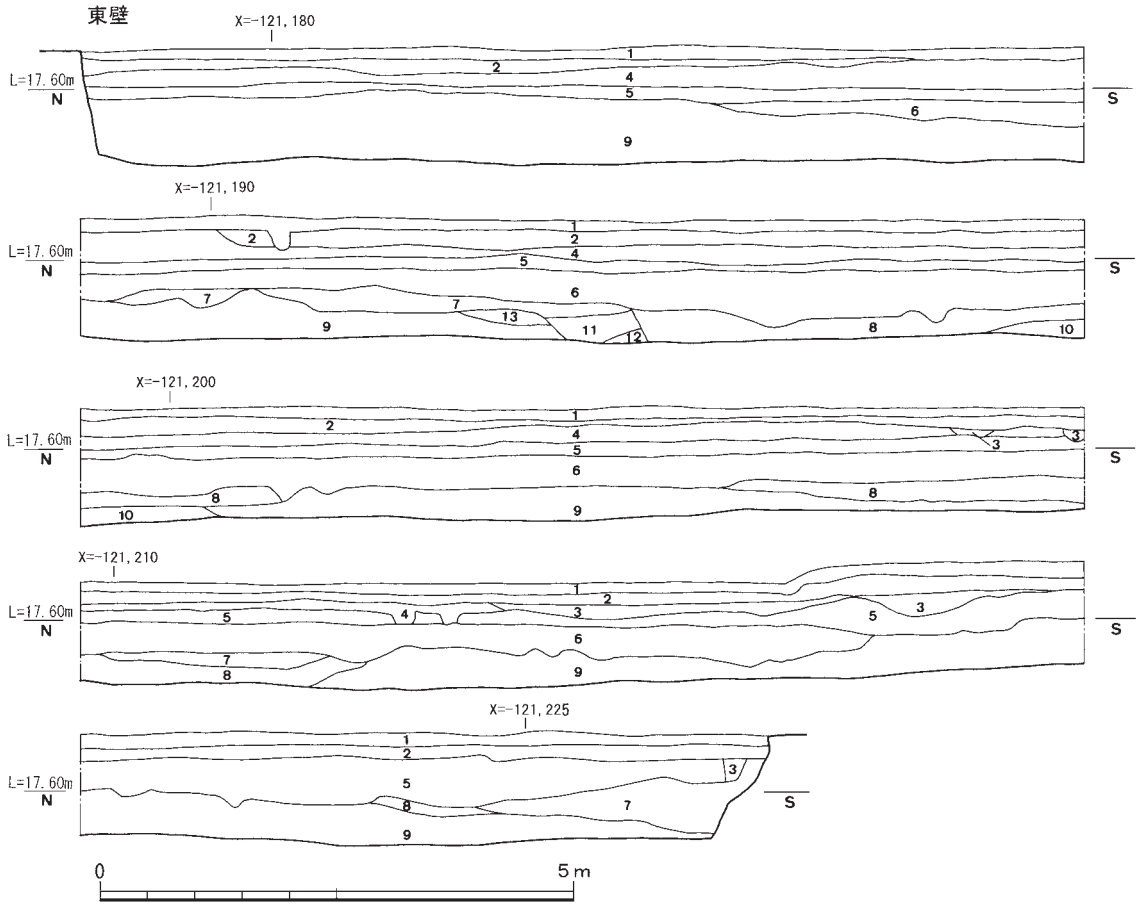
調査地は、長岡京市調子二丁目地内に所在し、旧字名では調査地の南端部の一段高い田畑が「カンノン堂」で、堂があったとの伝承があり、北の一段低い田畑が「薮の下」となっている。調査は200㎡を試掘調査として実施した。現地調査の期間は平成20年2月4日から同年2月29日を要した。調査には、調査第2課調査第2係長森　正と同主任調査員戸原和人があたった。

調査地の基本的な層位は、地表から第1層は暗灰色粘質土（耕作土）、第2層は灰色粘質土小礫混じり（床土）、第3層は黒灰色粘質土炭混じりで溝やピットの埋土、第4層は暗灰色粘質土、第5層は灰色粘質土（溝やピットのベースとなっている）、第6層は黄褐色～赤褐色粘質土となり、以下第7層から第13層では、砂又は砂礫・礫の河川性堆積の状況を示しており、現在調査地の西を流れている小泉川水系の堆積によるものと考えられる。

調査によって上層の床土直下では、水田耕作に伴う素掘り溝群を検出し、第5層の灰色粘質土の上面では溝2条、土坑5基、ピットなどを検出した。各遺構から土師器皿、瓦器椀、白磁などが出土した。

溝ＳＤ01　調査地の南よりで検出した東西方向の溝である。幅1.6～2.3mを測り3.5mにわたり検出した。溝内より瓦器椀が出土している。水田の造成土と考えられる。

溝ＳＤ02　ＳＤ01の北で検出した東西方向の溝である。幅2.0～3.0mを測り



［東壁層名］

1. 暗灰色粘質土＜耕作土＞
2. 灰色粘質土礫混じり＜φ1～3ｃｍ大礫含む＞
3. 黒灰色粘質土＜炭化物含む＞
4. 暗灰色粘質土
5. 黒灰色粘質土＜炭化物含む＞
6. 灰色粘質土
7. 黄褐色～赤褐色粘質土＜マンガン含む＞
8. 褐色砂層
9. 灰褐色砂質土
10. 褐色砂層
11. 褐色砂層
12. 褐色礫層
13. 灰褐～赤褐色礫層
14. 黒色礫

第 39 図　右京第 928 次調子地区トレンチ断面図

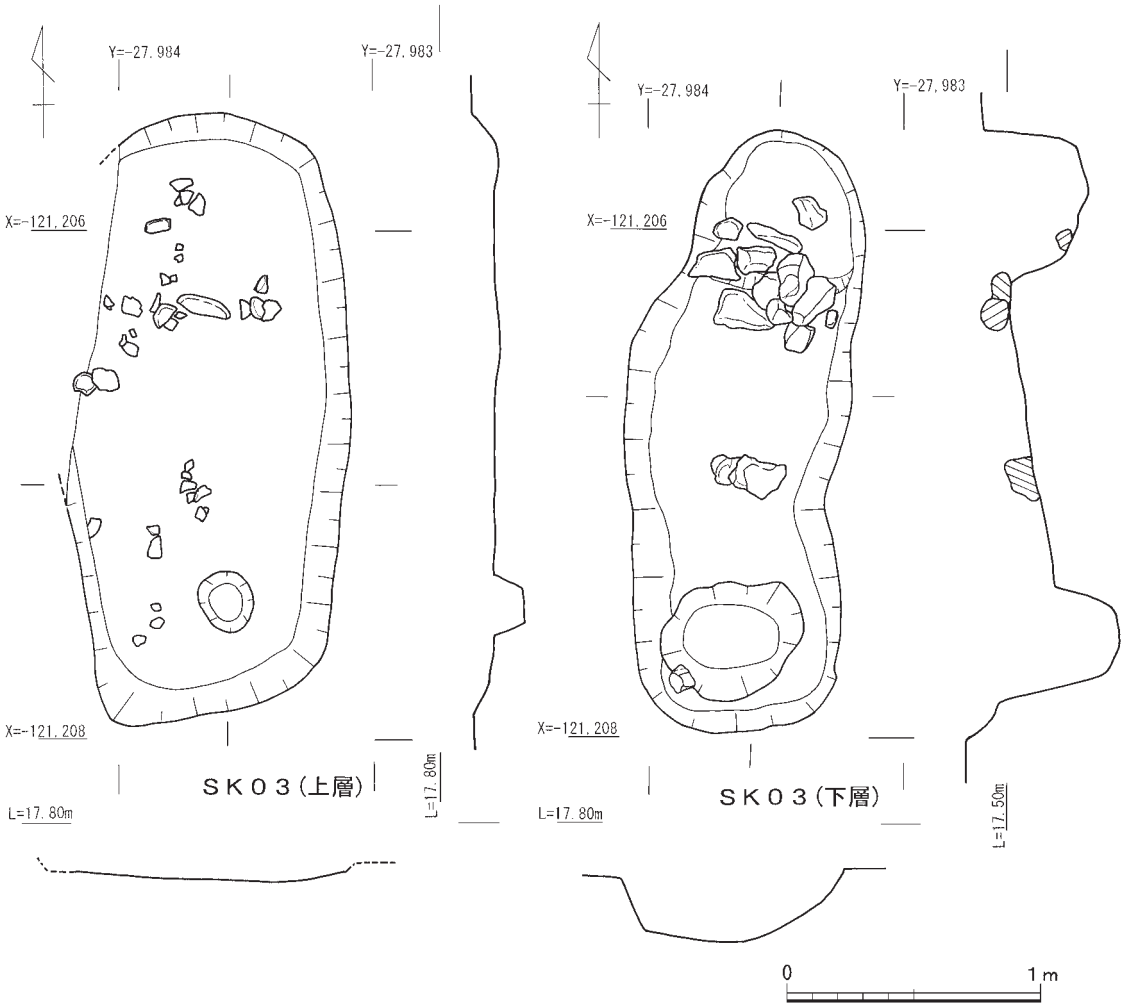
3.0m にわたり検出した。土師器甕片等が出土しており、一段低い水田裾部の水抜きの様相を呈している。

土坑ＳＫ 03　調査地の南半部で検出した。平面の幅 0.7 ～ 0.9m、長さ 2.37m を測り深さ 0.2m 程の断面舟底状を呈する。土坑の両小口には直径・深さとも 0.4 ～ 0.6m の穴を穿っている。土坑内からは焼土と炭に混じって土師器皿、瓦器椀、白磁などが出土した。

土坑ＳＫ 04　調査地の南半部で検出した。黒灰色の焼土炭混じり層によって埋まっている。平面の幅 0.7m 以上、長さ 1.6m を測り、深さ 0.2m 程の断面舟底状を呈する。土坑内からは焼土と炭に混じって大小の土師器皿、白磁などが出土した。

土坑ＳＫ 05　土坑ＳＫ 03 に西辺を接して検出した。切り合い関係は明確でなく、東側は東西方向の溝状となる。黒灰色の焼土炭混じり層によって埋まっている。平面の幅 0.4m 以上、長さ 1.0m を測り深さ 0.1m 程の断面舟底状を呈する。土坑内からは大小の土師器皿が出土した。

土坑ＳＫ 06　調査地の中央部で検出した。黒灰色の焼土炭混じり層によって埋まっている。



第40図　土坑ＳＫ03実測図

平面の幅1.0m、長さ2.2m以上を測り深さ0.1m程の断面平底状を呈する。土坑内からは焼土と炭に混じって瓦器椀が出土した。

土坑ＳＫ07　土坑ＳＫ06に東辺を接して検出した。切り合い関係はＳＫ06が新しい遺構である。黒灰色の焼土炭混じり層によって埋まっている。平面の幅1.2m以上、長さ2.5mを測り深さ0.1m程の断面舟底状を呈する。土坑内からは焼土と炭に混じって土師器椀が出土した。

小結

今回の調査では、平安時代前期から後期の遺物が土坑、ピット、溝内から出土した。調子地区内でははじめて検出した焼土と炭混じり層を埋土とする土坑を検出した。この土坑からは土師器の皿が重ねた状態で出土し、周辺で検出した小ピットにも同様の状況が見られるものがある。また、調査地の北よりでは掘形は確認できないものの瓦質の壺や黒色土器、土師器が並べられた状態で出土する等、調査地周辺で何らかの儀礼や信仰に関わる営みがあった可能性が考えられる。また近接する調査地南端の一段高い地形の水田は、字名や地元の伝承から草堂等の建築遺構が遺存している可能性が考えられる。

（戸原和人）

④調子地区出土遺物（第 41・42 図）

１～４は右京第 902 次調査として行った２・３トレンチ、５～ 21 は右京第 926 次調査として行った１トレンチで出土しており、22 ～ 66 は右京第 928 次調査で出土した遺物である。

ａ．右京第 902 次

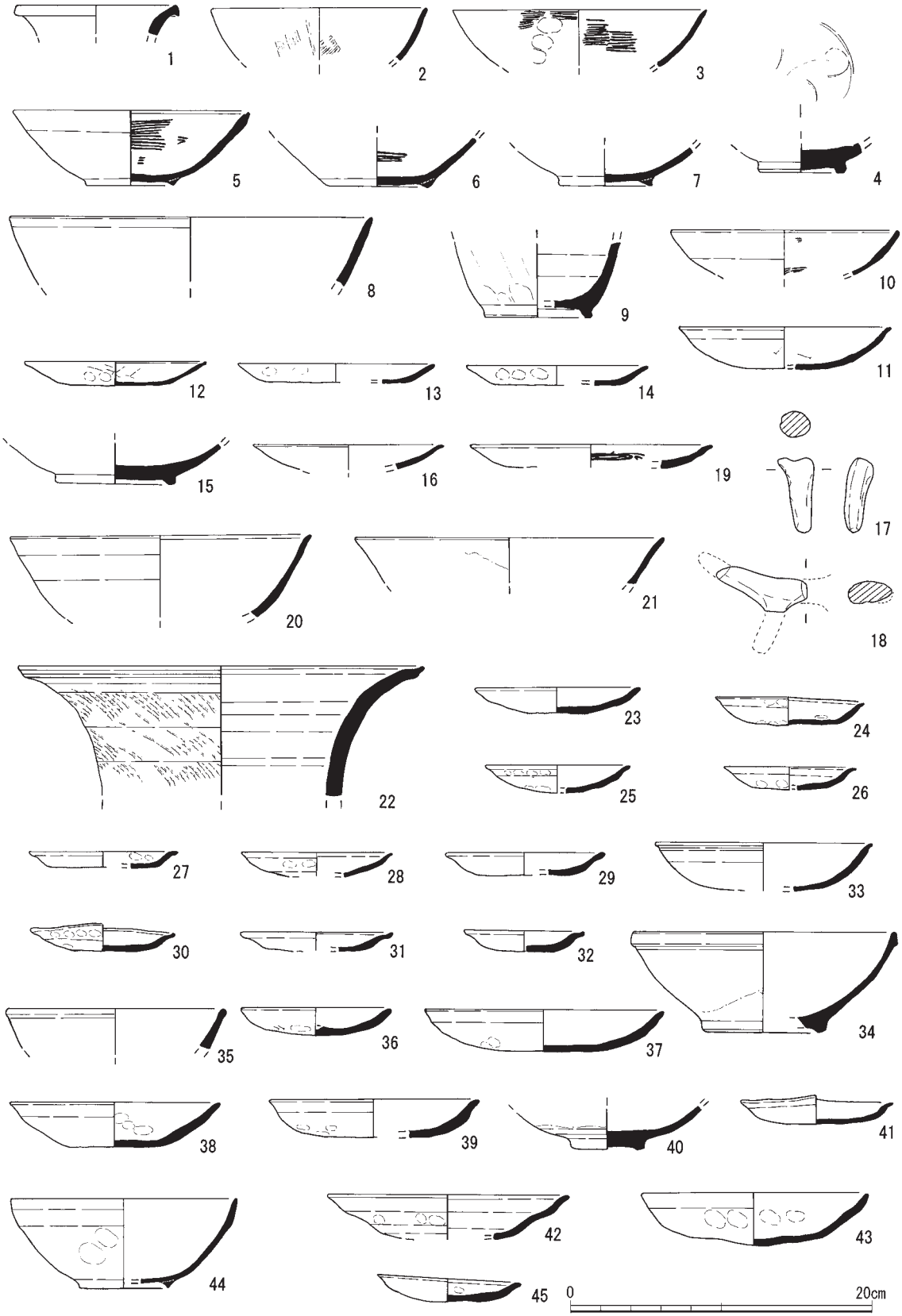
１は、２トレンチ包含層中で出土した。陶器壺の口縁部で口径 10.6cm を測る。２は、灰釉陶器椀で内外面下半に櫛描きを施す。12 ～ 13 世紀の所産である。３は瓦器椀で、４は青磁椀である。

ｂ．右京第 926 次

５～７は１トレンチ溝ＳＤ 01 で出土した瓦器椀である。５は口径 12.0cm、器高 1.3cm、６は高台径 6.6cm、残存高 3.3cm、７は高台径 6.0cm、残存高 2.6cm をそれぞれ測る。これらの遺物により溝ＳＤ 01 の埋没時期は 12 世紀後半と考えられる。８～ 18 は１トレンチ包含層中より出土した。８は須恵器鉢で、９は須恵器の壺もしくは鉢である。10･11 は土師器皿もしくは椀である。10 が口径 15.0cm、11 が口径 14.0cm を測る。12 ～ 14 は土師器皿である。12 は口径 12.0cm、器高 1.5cm、13 は口径 12.4cm、器高 1.3cm、14 は口径 12.0cm、器高 1.3cm をそれぞれ測る。15・16 は緑釉陶器である。15 は内外面に濃緑色の釉を施す椀の底部で、高台径 8.0cm、残存高 2.7cm を測る。16 は内外面に濃緑色の釉を施す皿の口縁部で、9 ～ 10 世紀の所産である。17・18 は土馬の脚片と下半身臀部から尾にかけての部分である。19 は無釉陶器皿で口径 16.0cm、器高 1.5cm を測る。20 は須恵器椀、21 は灰釉陶器椀である。２～４は３トレンチ包含層中より出土した。

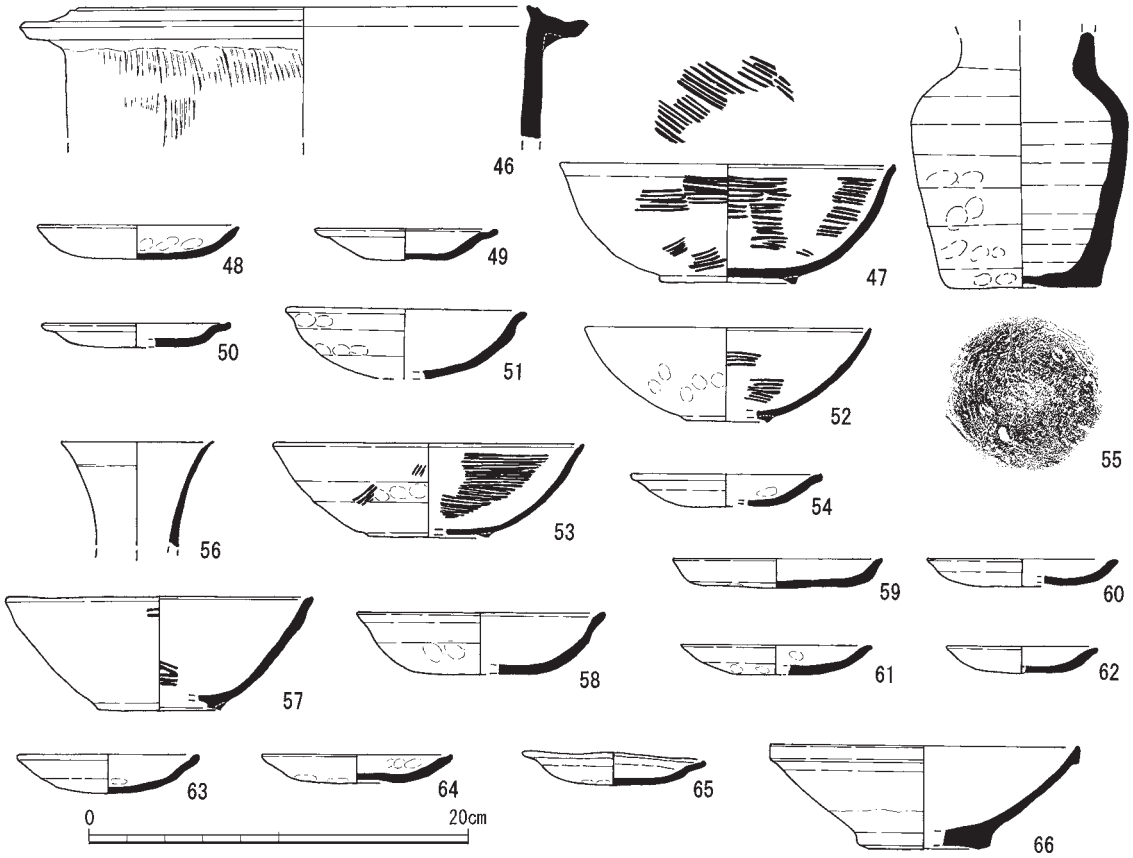
ｃ．右京第 928 次

22 ～ 35 は土坑ＳＫ 03 内で出土した。22 は須恵器壺口縁で口径 27.0cm を測る。23 ～ 32 は土師器皿で、30 ～ 32 は口縁部にわずかに段をもち端部をつまみ上げる。おおよそ口径 9.5 ～ 10.5cm、器高 1.5 ～ 1.8cm のものを主体とするが、32 は口径 8.0cm とやや小さいものもある。11 世紀中頃から後半にかけての所産である。33 は土師器皿、34・35 は白磁椀である。33・34 は 12 世紀前半の所産である。36 ～ 40 は土坑ＳＫ 04 内より出土した。36 ～ 39 は土師器皿である。36 は口径 9.6cm、37 ～ 39 は、口径 14cm、前後を測る。40 は白磁皿である。高台径 4.8cm、残存高 2.4cm を測る。41・42 は土坑ＳＫ 05 内で出土した土師器皿である。43 は土坑ＳＫ 07 内で出土した土師器皿である。44 は土坑ＳＫ 06 内で出土した瓦器椀で、口径 15.0cm、器高 6.0cm を測る。45 は土坑ＳＫ 16 内で出土した土師器皿である。口径 9.5cm、器高 1.8cm を測る。46・47 は溝ＳＤ 01 の埋土中で出土した。46 は土師器の羽釜である。口径 23.6cm、残存高 7.0cm を測る。47 は黒色土器Ｂ類である。内外面及び内底面に丁寧な平行ミガキ目を施し、口径 17.6cm、器高 6.3cm を測る .。10 世紀後半～ 11 世紀の所産である。48・49 はピットＰ 18 から口縁部を上に重なって出土した土師器皿である。48 は内湾する口縁で口径 10.4cm、器高 1.8cm、49 は口縁部に段をもち端部をつまみ上げる。口径 9.5cm、器高 1.6cm を測る。50 はピットＰ 23 から出土した口縁部に段をもつ土師器皿である。口径 9.8cm、器高 1.5cm を測る。51 はピットＰ 28 から出土した土師器鉢である。底部から内湾して立ち上がり口縁端部を外方に引き出す器形で、口径 12.4cm、器高 3.7cm を測る。11 世紀の所産と考えられる。52 はピットＰ 21 から出土した瓦器



1～4. R902 次 包含層　5～7. R926 次ＳＤ01　8～18. 同 1トレンチ包含層　19～21. 同 2トレンチ包含層
22～35. R928 ＳＫ03　36～40. 同 ＳＫ04　41・42. 同 ＳＫ05　43. 同 ＳＫ07　44. 同 ＳＫ06 45. 同 ＳＫ16

第 41 図　調子地区出土遺物実測図（1）



46・47. R928 次 ＳＤ01　48・49. 同 Ｐ18　50. 同 Ｐ23　51. 同 Ｐ28　52. 同 Ｐ21　53 ～ 55. 同 北部包含層
56 ～ 66. 同 包含層

第 42 図　調子地区出土遺物実測図（２）

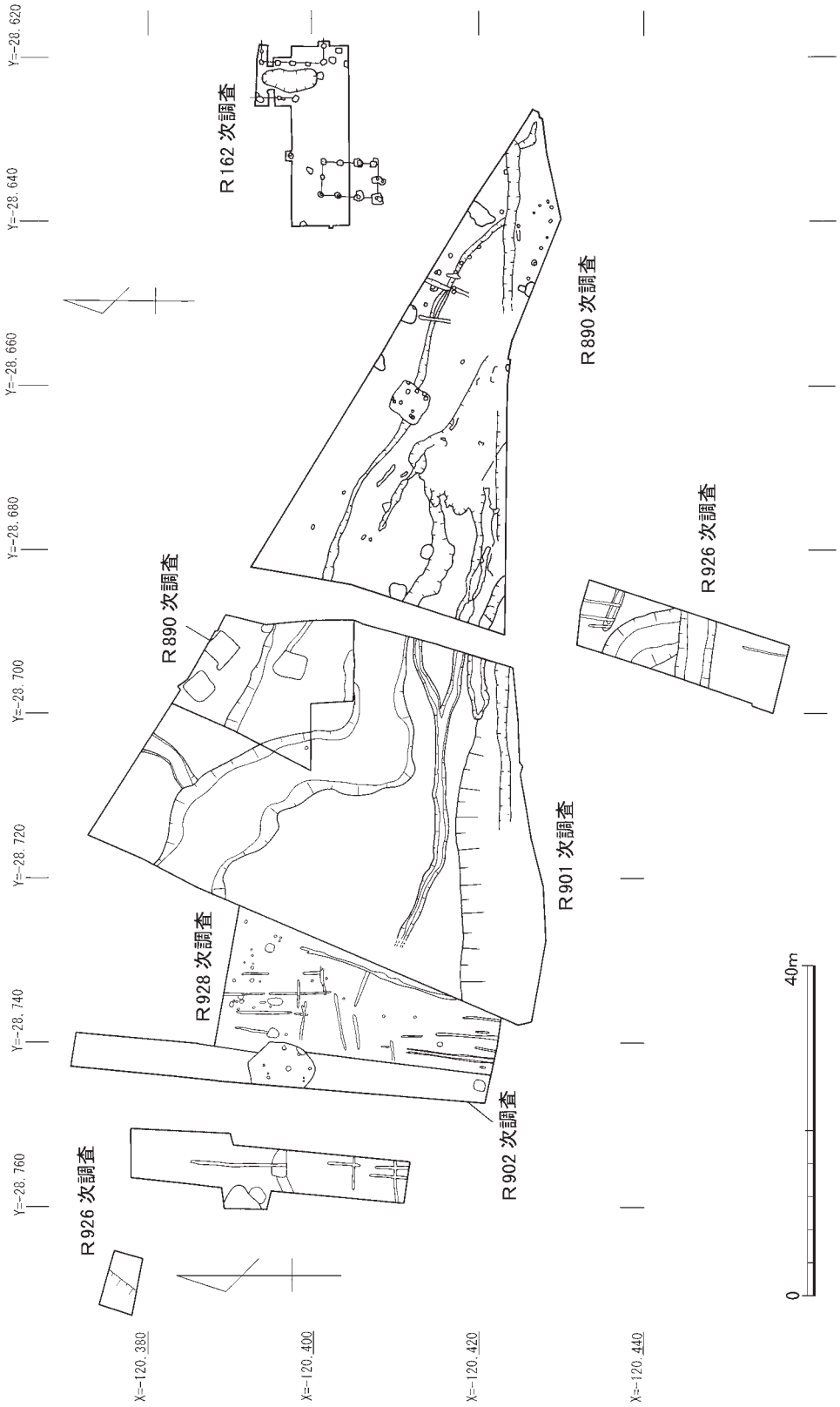
椀である。3 ～ 55 は北部包含層中よりまとまって出土した。53 は伏せた状態で出土した黒色土器Ｂ類の椀である。内面に丁寧な平行ミガキ目、外面には斜め方向のミガキ目を施す。10 世紀後半の所産である。54 は口縁部を上にし、置かれた状態で出土した土師器皿である。55 は立位で置かれた状態で出土した、瓦質の壺で口縁端部を欠く。10 世紀後半の所産と考えられる。56 ～ 66 は包含層中から出土した。56 は白磁壺の口縁で、口径 8.0cm を測る。57 は瓦器椀で、12 世紀の所産と考えられる。58 は土師器鉢で、59 ～ 65 は土師器皿である。口径は 9.5 ～ 10.0cm、器高 1.5cm 前後のものを主体とする。12 世紀の所産である。

（戸原和人）

３．まとめ

平成 19 年度の発掘調査では、９地点の試掘調査と３か所の本発掘調査を実施した。別途報告する第 927 次調査を除くと、試掘調査では右京第 902 次調査の上内田地区、右京第 926 次調査の調子地区、右京第 928 次調査の調子地区で遺構を検出した。そのほかの試掘調査では、遺物を含む遺構が存在しないか、もしくは河川堆積物、近現代の遺構しか検出できなかった。

右京第 902 次調査の上内田地区試掘調査では、古墳時代初頭の多角形住居を検出した。この時期の遺構としては下内田地区では、初めての検出事例である。これまでの調査の結果からは、古



第 43 図　上内田地区遺構平面図

墳時代初頭の集落の広がりを確認することができない。右京第890次調査では古墳時代初頭の土器がほとんど発見できなかったことから、右京第898次調査北側または西側に広がる可能性があるが、西側について右京第926次調査では当該期の遺構を確認することはできなかった。

古墳時代後期の集落は、溝ＳＤ04の北側に広がるとみられる。遺物量も右京第890次調査1トレンチで多く西に行くほど多いことから、集落の中心は右京第890次調査北側と考えられる。

溝ＳＤ04は流路として機能していたが、古墳時代初頭には人工物と考えられる木組みや、橋脚柱とも考えられる柱もあり、人工的に改変されている可能性も指摘できる。またこの川の中からは、表皮のついた木が出土しており、中には幅が70cmを越すものも存在している。加工痕等は特になく自然物と考えられるが性格は不明である。

右京第901次調査では、縄文時代晩期の船橋式の突帯文土器が出土しており、周辺に縄文時代の集落の存在の可能性が指摘できる。

調子地区では2か所の試掘調査で、遺構を検出した。平成18年度以前の調子地区の試掘調査では、建物跡などの明確な遺構があまり検出できていなかったが、右京第926次調査では、瓦器を含む溝ＳＤ01を検出した。

右京第908次調査では、土師器や白磁碗を含む土坑を検出した。こうした中世前期の遺構の発見によってこれまでの試掘調査では遺物の存在のみで明確ではなかった、調子地区の遺構の広がりを確認することができた。

平成20年度調査地内においては、長岡京跡に関連した遺構は検出できなかった。長岡京域南部が未開発であったという説と齟齬しない結果となった。　（中川和哉）

調査参加者（順不同）

調査補助員　杉江貴宏・木村悟・黒慶子・木村涼子・阿保悠稀・大本朋弥・藤井宏光・川崎友裕・藤原希・溝渕直也・坪野茉莉恵

整理員　内藤チエ・長谷川マチ子・井上聡・茶園矢壽子・大島弘子・藤芳多江子・太田早苗・小塩三佳

注１　「右京第104次（7ANOND地区）調査略報」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度（財）長岡京市埋蔵文化財センター）　1983
「右京第104次調査概要（7ANOND地区）」（『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集　（財）長岡京市埋蔵文化財センター）　1984

注２　長岡京跡右京第851次・下海印寺遺跡第22次・伊賀寺遺跡「京都第二外環状道路関係遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第124冊-1　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2003

注３　高野陽子「（３）土器編年」（「佐山遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第33冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2003

注４　福島孝行「平面多角形の竪穴住居についての検討」（『考古学に学ぶ－遺構と遺物－』　同志社大学考古学研究室）　2000

図　　版

上内田地区＜長岡京跡右京第 901・902 次＞　調査地遠景（東から）

⑴ 荒堀地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
調査前全景（東から）

⑵ 荒堀地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
１トレンチ全景（北から）

⑶ 荒堀地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
４トレンチ全景（西から）

⑴ 尾流地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
１トレンチ全景（北から）

⑵ 尾流地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
１トレンチ流路跡ＳＤ 05・
ＳＤ 07（南から）

⑶ 尾流地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
２トレンチ（北東から）

⑴ 上内田地区＜長岡京跡右京第 901 次＞　調査地近景（北西から）

⑵ 上内田地区＜長岡京跡右京第 901 次＞　調査区全景（上が東）

⑴ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901･902 次＞
調査地近景（西から）

⑵ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901 次＞
調査区西壁土層（東から）

⑶ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901 次＞
流路ＳＤ 04 － ２区西部土層断面
（南東から）

⑴ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901 次＞
流路ＳＤ 04 木製品・自然木
出土状況（北西から）

⑵ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901 次＞
流路ＳＤ 04 木製品出土状況
（上が南）

⑶ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901 次＞
流路ＳＤ 04 土器出土状況
（上が西）

⑴ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901 次＞
流路ＳＤ 04 木柱検出状況

⑵ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901 次＞
溝ＳＤ 02 土層断面（東から）

⑶ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901 次＞
作業風景（東から）

⑴ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
調査前風景（南西から）

⑵ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
トレンチ全景（南から）

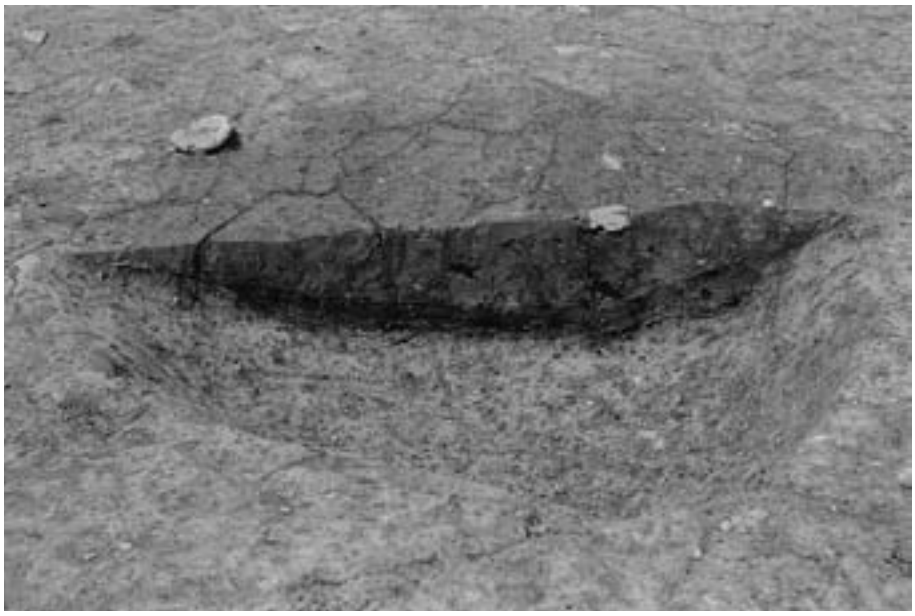
⑶ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
トレンチ北壁土層（南から）

⑴ 上内田地区＜長岡京跡右京第 928 次＞　調査区全景（北から）

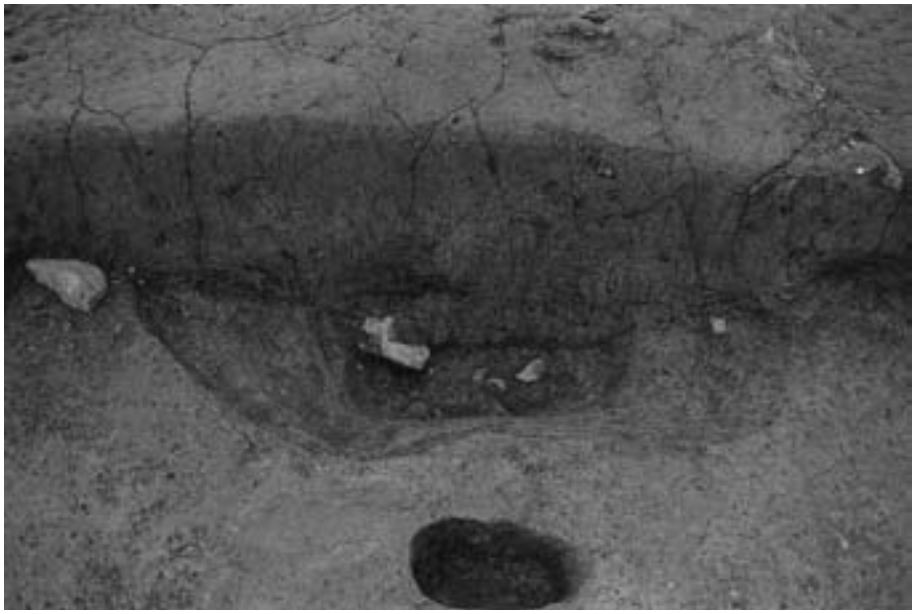
⑵ 上内田地区＜長岡京跡右京第 928 次＞　竪穴式住居跡ＳＨ２（北東から）

⑴ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
竪穴式住居跡ＳＨ２
上層石材検出状況（南から）

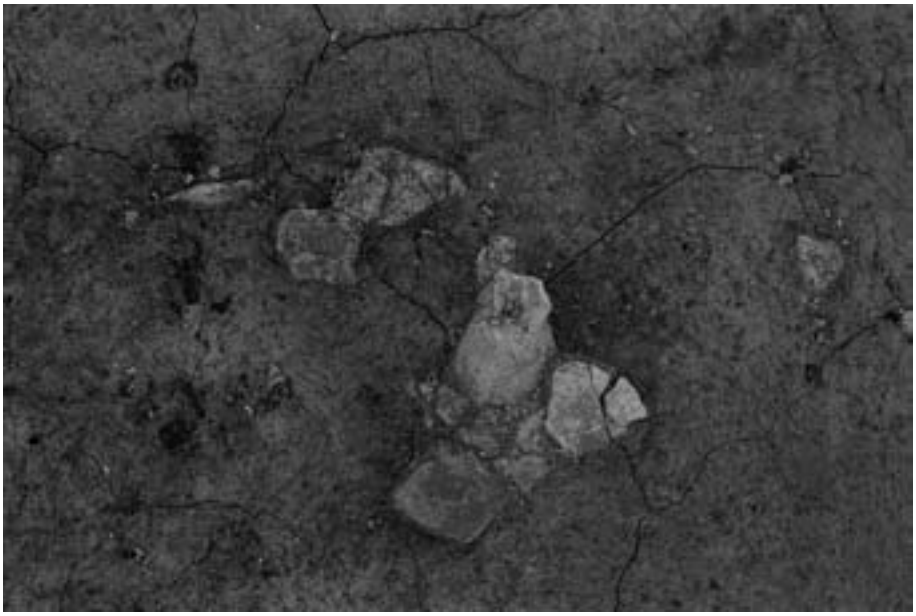
⑵ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
竪穴式住居跡ＳＨ２（東から）



⑶ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
竪穴式住居跡ＳＨ２
中央土坑Ｋ１（南から）



⑴ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
竪穴式住居跡ＳＨ２土坑Ｋ２
（北西から）



⑵ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
竪穴式住居跡ＳＨ２
土器出土状況（上が北）

⑶ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
土坑ＳＫ 20（東から）

⑴ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
土坑ＳＫ９（東から）

⑵ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
落ち込みＳＸ８（北西から）

⑶ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
調査区南壁土層（北から）

⑴ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
１－１トレンチ全景（南から）

⑵ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
１－２トレンチ全景（西から）

⑶ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
２トレンチ全景（北から）

⑴ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
１－１トレンチ土坑ＳＫ 05・
ＳＫ 07（北東から）

⑵ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
１－１トレンチ土坑ＳＫ 07
土器出土状況（上が南）

⑶ 上内田地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
２トレンチ溝ＳＤ 08 全景
（西から）

⑴ 友岡地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
調査前全景（南東から）

⑵ 友岡地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
トレンチ全景（北から）

⑶ 友岡地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
井戸ＳＥ 01（南西から）

⑴ 調子地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
調査前全景（西から）

⑵ 調子地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
１トレンチ全景（東から）

⑶ 調子地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
２－１・２トレンチ全景
（西から）

⑴ 調子地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
３－１・２・３トレンチ全景
（南東から）

⑵ 調子地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
調査前全景（南から）

⑶ 調子地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
トレンチ東部全景（北東から）

⑴ 調子地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
トレンチ西部全景（北西から）

⑵ 調子地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
トレンチ中央断ち割り
（北西から）

⑶ 調子地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
溝ＳＤ 01 土器出土状況
（上が東）

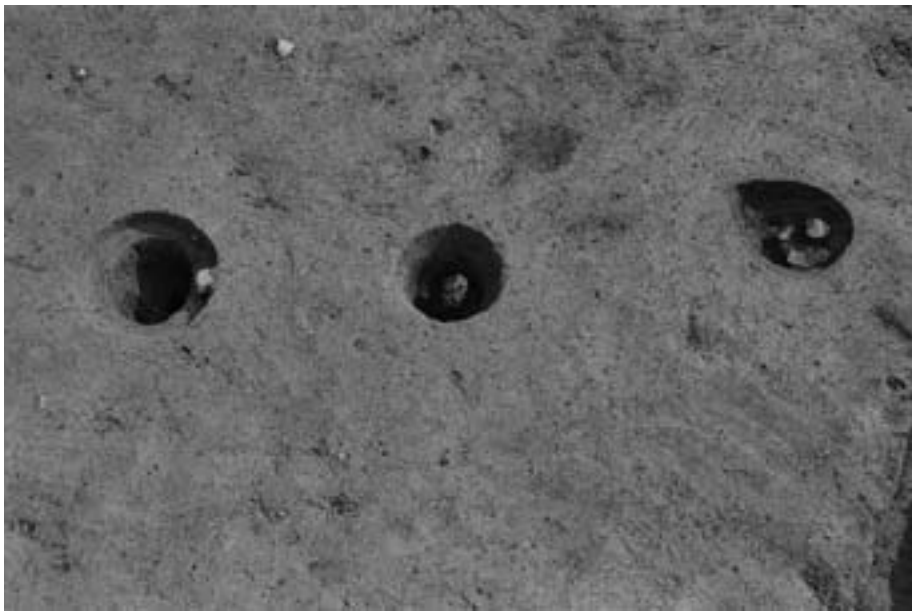
⑴ 調子地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
調査地全景（南から）

⑵ 調子地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
溝ＳＤ 01（東から）

⑶ 調子地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
溝ＳＤ 02（南から）

⑴ 調子地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
土坑ＳＫ 03（西から）

⑵ 調子地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
土坑ＳＫ 06・07（南西から）



⑶ 調子地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
柱穴Ｐ 10・11・12（北西から）

2

3

8

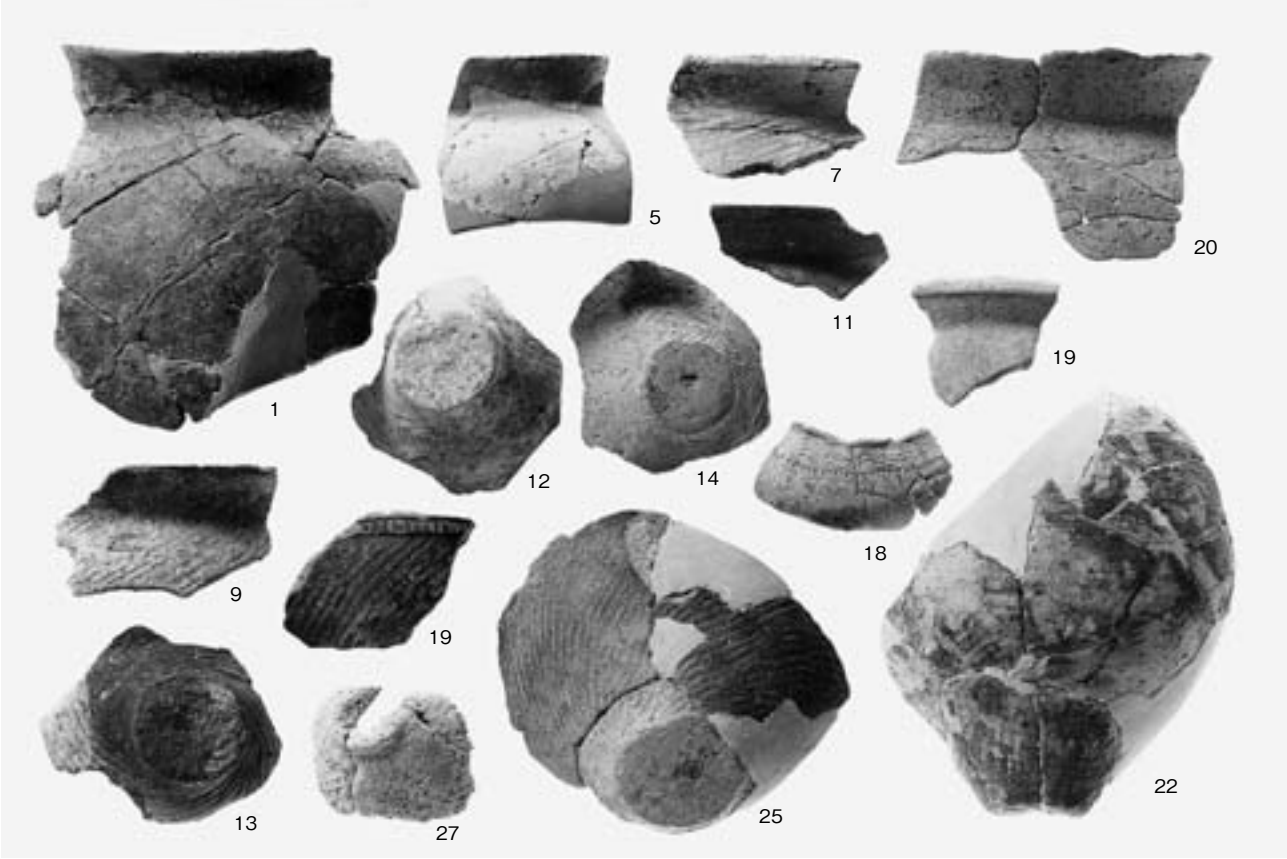
4

24

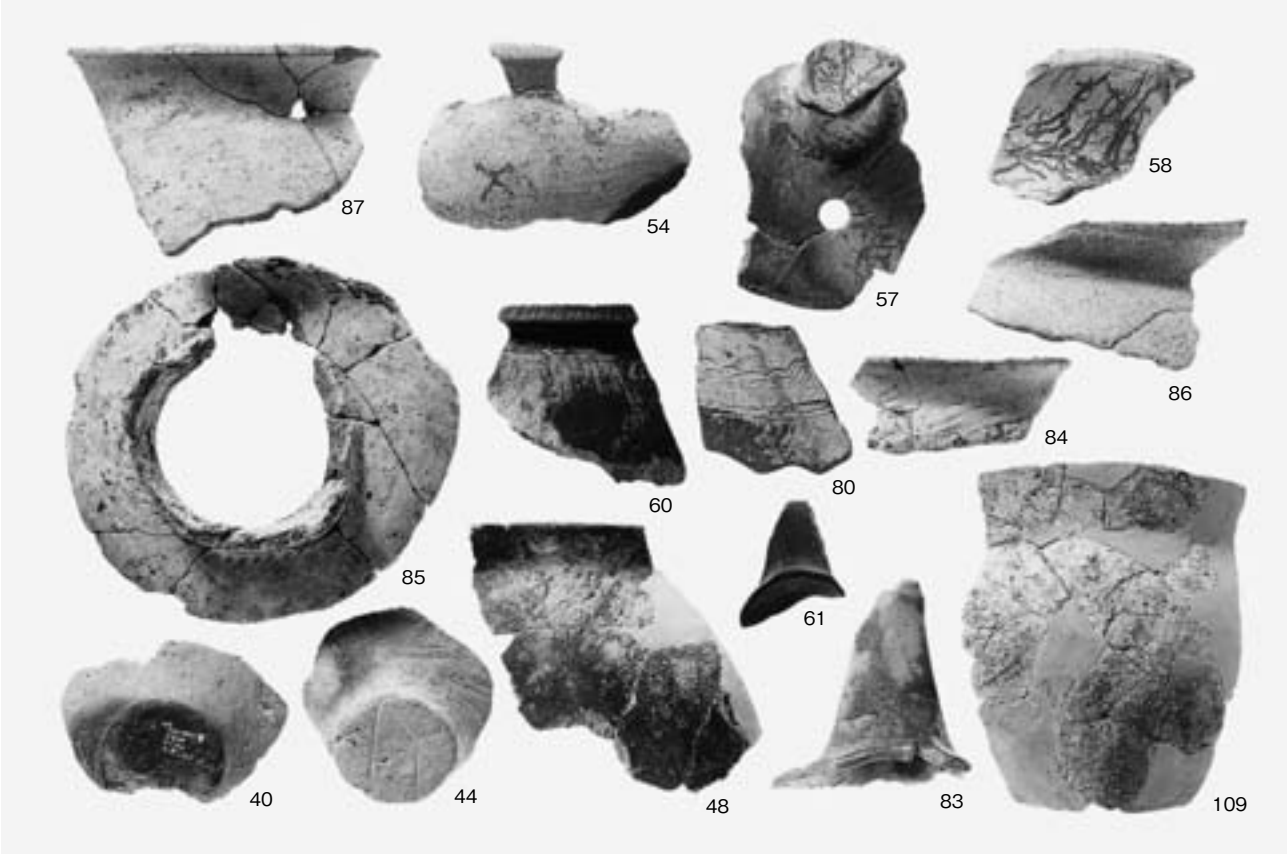
62

17

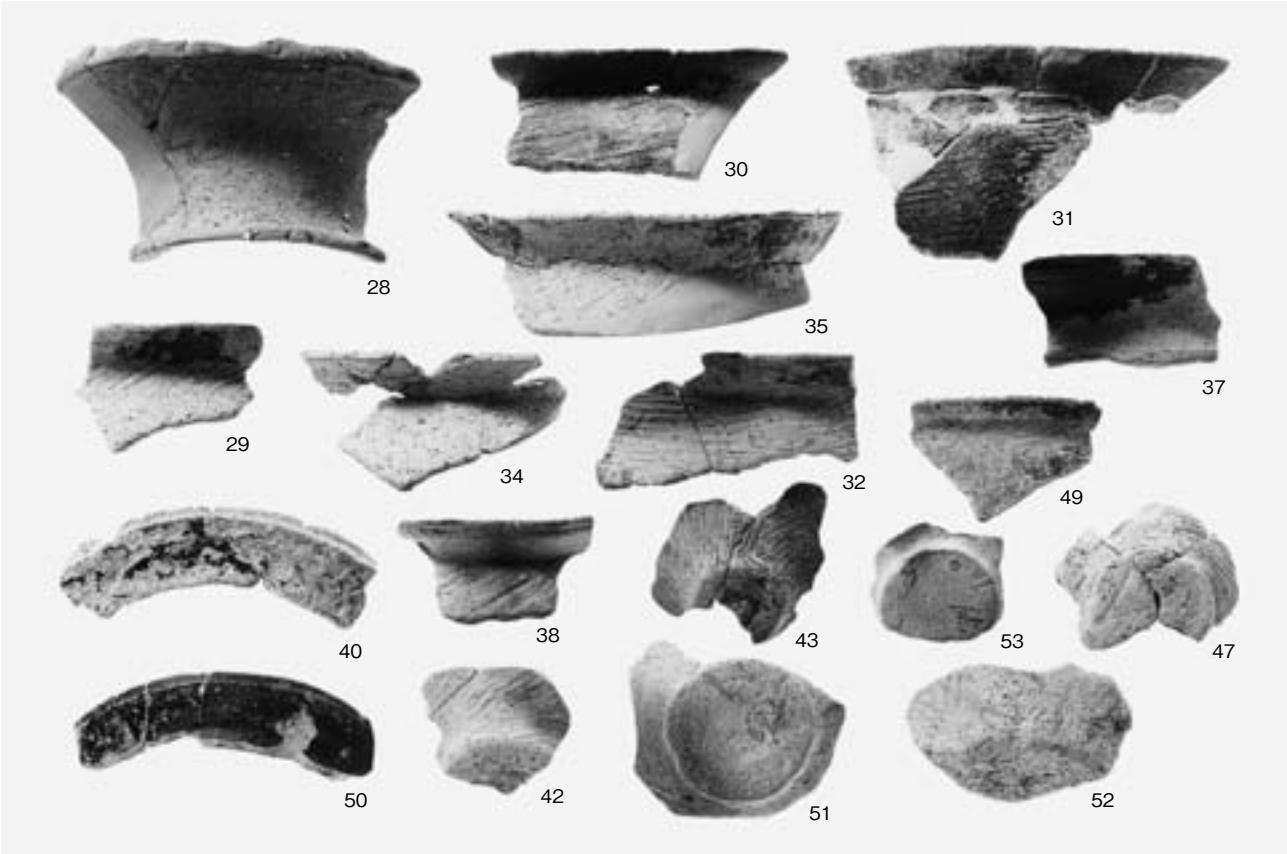
上内田地区出土遺物（1）



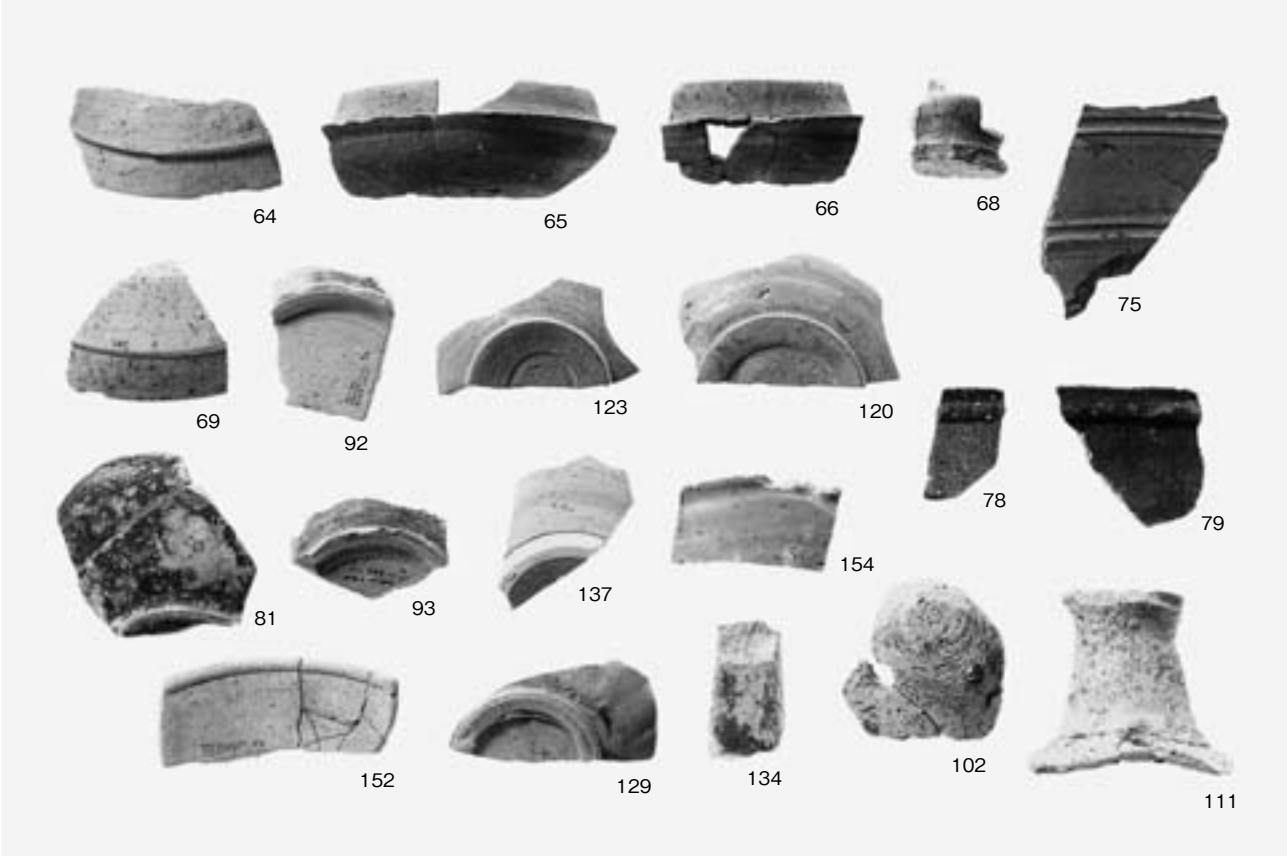
上内田地区出土遺物（２）



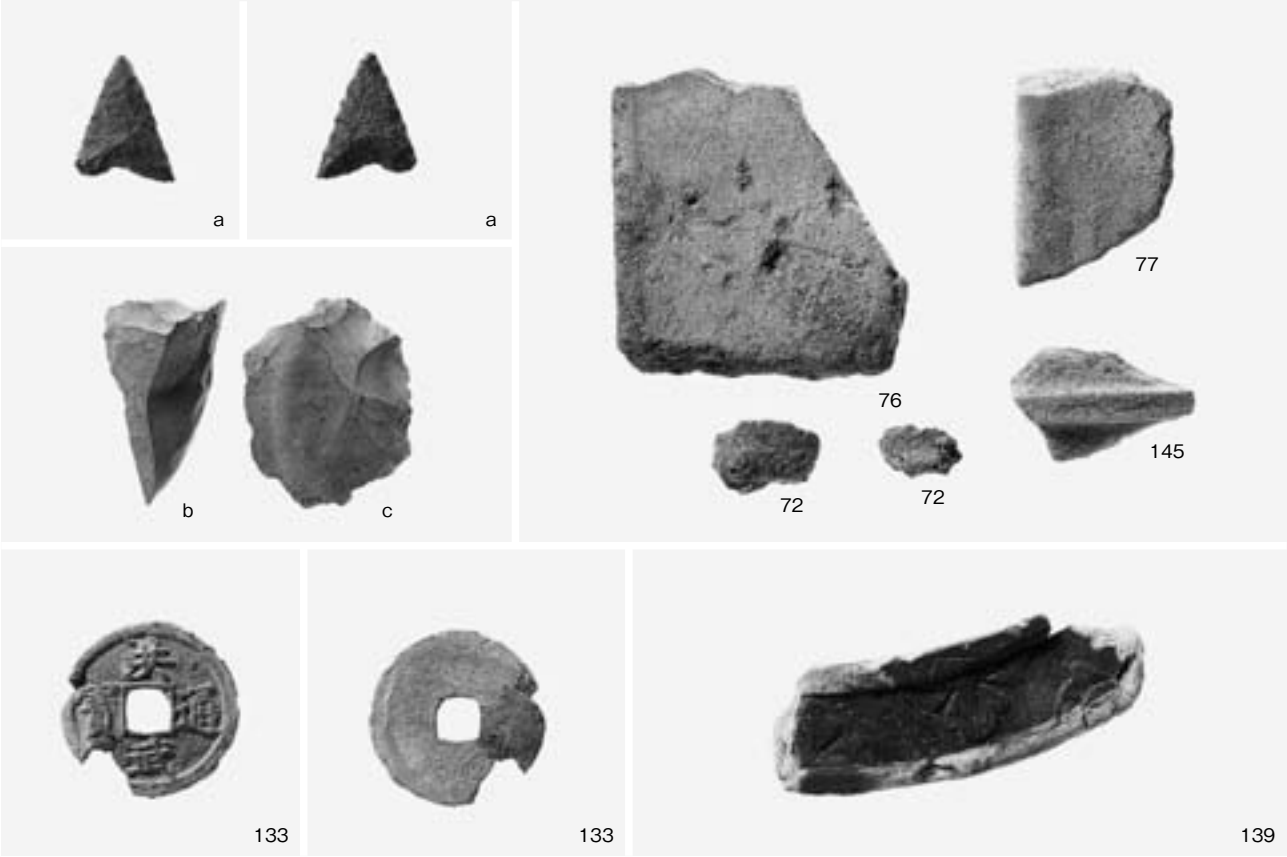
⑴ 上内田地区出土遺物（３）



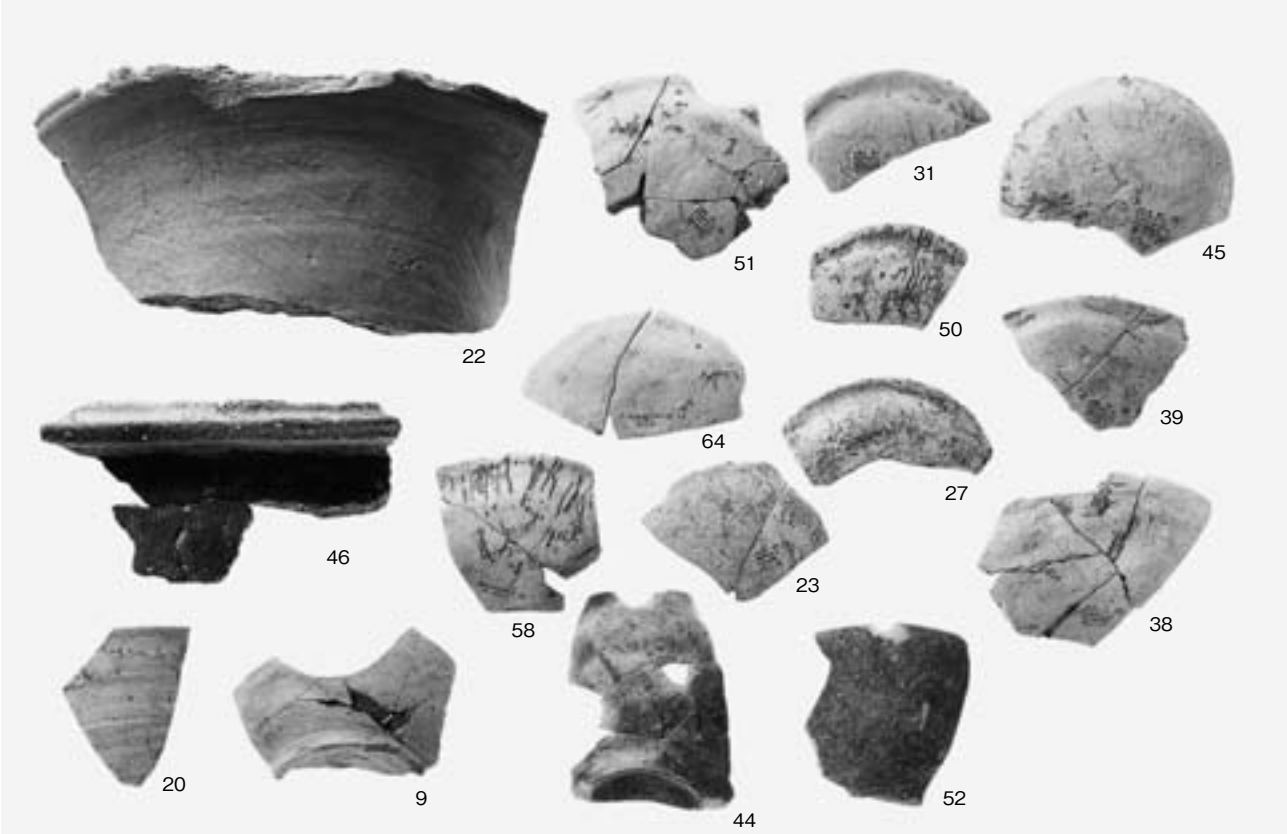
⑵ 上内田地区出土遺物（４）

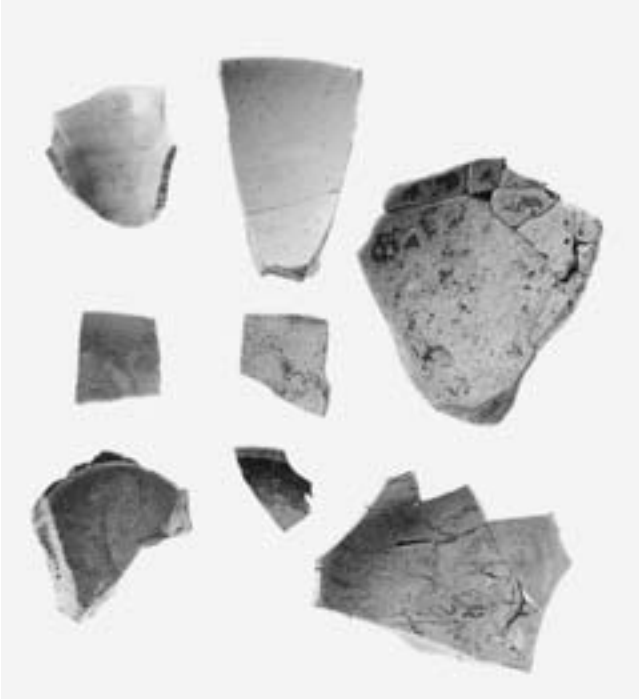


⑴ 上内田地区出土遺物（５）



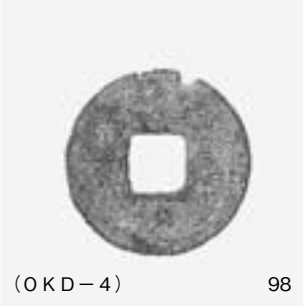
⑵ 上内田地区出土遺物（６）


22
51
31
45
50
39
64
27
46
23
58
38
20
9
44
52



56
34
15
21
2
16
40
4

98


（ＯＫＤ－４）
98

18

17

調子地区出土遺物（１）

66

43

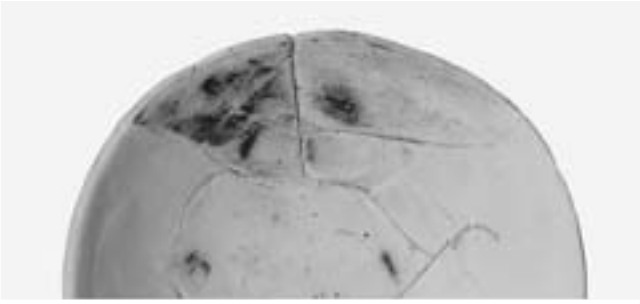
24

30

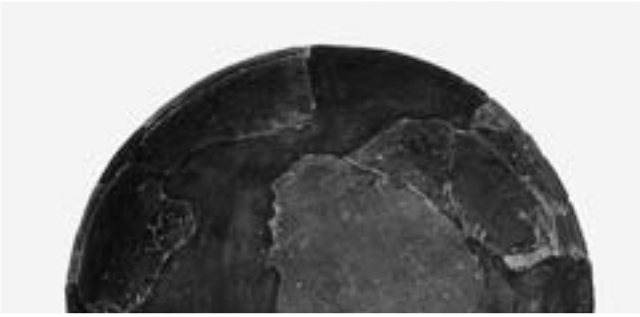
41

49

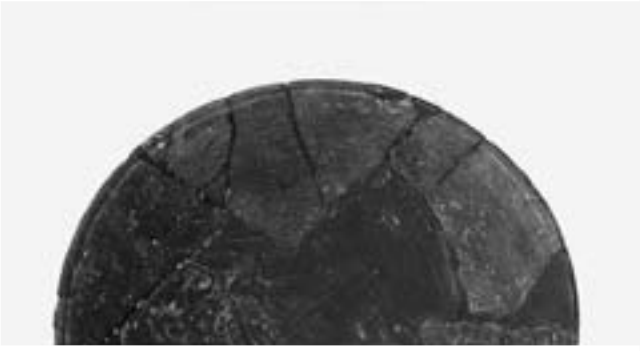
65



5



53



47

調子地区出土遺物（２）

茶臼ヶ岳古墳群の調査では、丘陵尾根上において弥生時代後期の方形台状墓２基、古墳時代前期の方墳３基を検出した。各々から木棺を納めた埋葬施設や壺棺、破砕土器供献とみられる土器溜りなどを確認した。さらに平安時代の経塚１基を検出した。

鹿背山瓦窯では、昨年度に瓦窯跡２基を検出しており、その瓦窯に関連して調査を進めたところ、瓦窯に関連した掘立柱建物跡１棟、粘土取り穴、通路２条を検出した。これらの遺構の検出により、瓦生産工程が明らかとなるとともに、出土瓦の検討から平城宮へ瓦を供給した官営瓦工房であることが明らかとなった。

馬場南遺跡は遺跡の範囲とその性格を確認するための試掘調査であり、この調査の結果、掘立柱建物跡１棟のほか、溝を検出した。溝内からは施釉陶器のほか、「神雄寺」などと墨書された須恵器が出土し、奈良時代の一般集落との異なる性格の遺跡と想定される遺跡である。

第901次調査では、古墳時代初（庄内期）の流路跡を確認し、流路内から良好な状況で土器が出土した。また、包含層中から縄文時代晩期の凸帯文土器も出土した。

第902次調査では、上内田地区において庄内期の竪穴式住居跡の一部を確認した。その他、試掘調査地では、本発掘調査につながる顕著な遺構遺物の検出は無かった。

第926次調査では、上内田、調子地区において古墳時代の土坑や平安時代の溝などの遺構を確認した。

第928次調査では、上内田地区において第902次調査試掘調査で確認していた竪穴式住居跡を面的に広げ、庄内期の多角形住居跡であることが判明した。また、調子地区では、平安時代後期の土坑を確認した。

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査報告集 第 131 冊

平成 21 年 3 月 31 日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒 617-0002　向日市寺戸町南垣内 40 番の 3
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒 604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141